

[TOP](#) [開会前](#) [問題提起1（吉川勇一）](#) [問題提起2（小林一朗）](#)
[問題提起3（天野恵一）](#) [問題提起4（小林正弥）](#) [討論1](#)
[討論2](#)

第2回平和公共哲学研究会

「デモかパレードかピースウォークか 世代間対話の試み」の記録

これは、2004年4月11日に行われた公開ディスカッションである「デモかパレードかピースウォークか 世代間対話の試み」の記録です。

【パネリスト】（発言順）



吉川勇一

（元ベ平連事務局長、「市民の意見30の会・東京」事務局）



小林一朗

（環境・サイエンスライター）



天野恵一

（『インパクション』編集委員）



小林正弥

（地球平和公共ネットワーク発起人、公共哲学ネットワーク代表）

【司会】



岡本厚（『世界』編集長）

【日時】

2004年4月11日（日） 開場13:15

【場所】

荻窪地域区民センター 第1・第2集会室

[>> こちらからお読み下さい](#)

呼びかけ文より

平和運動の発展を願う皆様に

3・20の世界統一行動が終わり、次の段階を考える時になったと思います。平和運動のあり方をめぐって、最近、『世界』『論座』などで重要な議論がなされています。

『世界』3月号では辺見庸氏が「抵抗はなぜ壮大なる反動につりあわないのか 闘下のファシズムを撃て」で、「デモだかパレードだか」に怒りの表現が欠けていることについて、「私たちのファシズム」が「パレード」を歪めていると批判しました。これに対しては、『世界』4月号の「読書談話室」で高田健氏が「傍観するか、内在するか」という反論を掲載しておられます（ 1 ）。

また、『論座』3月号では、吉川勇一氏が「デモとパレードとピースウォーク イラク反戦運動と今後の問題点」を寄稿され、反戦運動論や、運動内部における議論の少なさを指摘されました（ 2 ）。また、天野恵一氏は『インパクション』139号（今年1月）の鼎談「イラク派兵と『改憲』—反戦運動の課題をめぐって」で、9・11以後に現れてきた若い世代の反戦運動を厳しく批判しつつ、「運動文化の完璧な世代断絶」を指摘しておられます。

つまり、平和運動のあり方をめぐって、世代間によって発想の相違が存在し、相対的に年長の世代から若年世代への批判がなされているということができるとでしょう。平和運動がさらに発展するためには、このような問題について公共的な議論がなされることが必要だろうと思います。

平和公共哲学研究会は、平和問題を中心にしておかれた議論の場を作ることを目的としています。また、公共哲学において世代間関係は中心的な問題の一つであり、私たちは世代間対話を通じて、「世代継承生成性（generativity）」を実現することを主張しています。そこで、平和運動において、世代間対話の場を作り、運動の世代継承や発展を促進することは、この研究会の主題に正にふさわしと思考します。

そこで、第2回平和公共哲学研究会では、私よりも年長の世代から吉川勇一・天野恵一氏、若年世代から小林一朗氏をお招きして、以下のような公開討論会を行うことに致しました。また、吉川氏は、小林正弥についてもHPで批判的な言及をされておられます（ 3 ）ので、小林正弥もパネリストとして発言することに致します。そこで、司会は、論争の場となった『世界』編集長の岡本厚氏にお願い致しました。タイトルの主題「デモかパレードかピースウォークか」は、この企画の起点となった吉川氏の上記論稿に即して付けられています。

地球平和公共ネットワーク関係では、発起人の一人・千葉眞先生が朝日新聞で「注視したい新しいデモ 『平和の術』創造の可能性」（2001年3月18日、夕刊）を3月20日直前に寄稿され、「平和への結集」にも言及されました。また、来月号の『世界』では、私が司会した対談 小林一朗氏・川口創氏（名古屋のイラク 派兵差し止め訴訟に関わる弁護士）・草野史興氏（長崎で高校生として平和運動） が掲載されます。

私達としては、「ものすごい、つながりようもない断絶」（天野氏）に絶望することなく、あくまでも世代間対話によって、世代差を超えた「平和への結集」を追求したいと願っております。そこで、研究会終了後に、第4回「平和への結集」会合を開催する予定ですので、ご関心のある方はご参加を歓迎致します。（文責：小林正弥）

1．高田氏の詳細な反論「困難を乗り越える闘いに内在するか、それとも外部から嘲笑するか」は、以下を参照。確定稿は、『技術と人間』3月号に掲載。

<http://www4.vc-net.ne.jp/~kenpou/seimei/takada.html>

2．吉川氏のHPに掲載。

<http://www.jca.apc.org/~yyoffice/>

「最近文献」61．なお、「論争・批判」9で、この論稿への反響が批判的に扱われています。

3．上記HPのNews(100．最近の状況についてのご報告やら意見やら 2003/12/17掲載)。

[>> こちらからお読み下さい](#)

TOP	開会前	問題提起1（吉川勇一）	問題提起2（小林一朗）
問題提起3（天野恵一）	問題提起4（小林正弥）	討論1	
討論2			

TOP	開会前	問題提起1 (吉川勇一)	問題提起2 (小林一朗)
	問題提起3 (天野恵一)	問題提起4 (小林正弥)	討論1
	討論2		

開会前



小林正弥

「12時から1時までワールド・ピース・ノウ（以下WPN）(*1)が呼びかけたデモがありますので、そこからこられる方々がおられるだろうということを考えまして、皆様にお許しいただければ15分だけ開始を延ばさせていただき2時開会ということにさせていただきたいと思っているのですけれども、よろしいでしょうか。

この15分の間を使うように資料をお配りしました。この2, 3日の人質誘拐の事態に対してですね、WPNで出した声明とか、あるいはこのシンポの関係者のメッセージや文章が資料にあります。大体ここに参加している方々が関わったものを中心にしていますので、これについて一言ずつお話いただければありがたいと思います。では、天野さんからお願いします。」



天野恵一

「あの僕自身の資料の中にですね、今日北海道札幌の友人から送っていただいた、もうメールで流れていると思うのですが、あの家族の声明というのがお手元にいつていると思うのです。外務大臣の声明と並んでいるやつです。これを見ていただきたいのですが、僕はわざわざ今日午前中これを刷って持ってきたのです。この間の政府のとした態度の酷さというのは如実に表れていると思いましたが、朝のテレビなどを観ますとね、なにか小泉達は自分達が断固として撤兵を拒否した故に上手く拘束された人々が解放されるというふうなメッセージを発して、それに同調するテレビのコメンテーターの発言もあります。もちろんさすがにそこまで調子のいい話に全員がのっているわけではありませんが、かなりそういうふうに言論は間違いなく組織されてくる時間にはいつているふうに思いましたので、本当に解放されたらそういう声はもっと大きくなるのではと思ってこの文章を持ってきました。ただ読んでいただくとわ

かと思いますが、要するに外務大臣はですね、わが国の自衛隊もNGO同様に人道派遣されているのだと、3人の解放を求めるメッセージの中にこういう主張をいれたわけです。それで家族の人達は自衛隊と3人がですね、同列に位置づけられたら恐ろしくしょうがないから、このくだりは外してくれというふうに事前に読まれたときに要求して、それが蹴られたんです。今日の新聞をお持ちになっている方はみたらいいと思いますが、この文章は家族会の要求を拒否して、そのままのつけられています。ですからその、削除することができないのなら、発表を中止してくれと要請したが、まったく無視されている。

このことが示しているのはですね、本当に3人を政府が気づかっていたらそんなことはしないはずです。NGOを含む反戦運動の人々が3人はまったく軍隊と関係なく、むしろ派兵に反対して、自衛隊の派兵に反対して現地の活動をさまざまにやっていた人達であることをこと細かく丁寧に説明したものを、英語でも流してですね、アル・ジャジーラ経由で向こうに働きかける努力をしていたわけです。そのこと全体に対して泥をかけるようなそういうメッセージが外務大臣から発表された。このことだけじゃないと思うのです。最初に三人が拘束されたことが報道された直後にやった福田官房長官の発言もですね、人道派遣やっているのだから退く必要はないという話をします。通常ですね、もし百歩譲って撤退はできない、しないという意志があったとしてもですね、三日間の間の猶予しかないわけですから、その間中は撤退の選択も含めて色々検討しているという態度を示すのが普通だと思うのですよね。人質にとられた側の論理としてはそうしてあたりまえ。ところが、現実には本当にもう見殺しにするから勝手にやってくれというメッセージを発していることと同じことになっちゃうわけですね。撤退を要求されて撤退の選択はない、絶対しないというふうに政府が繰り返し繰り返し言っているということは、非常に残忍な行為であった。それでも拘束者側が解放するという声明で出てくるということで、その政府が自分達が解放したように、上手く交渉して解放したような手柄話にするっていう行動は、非常に事態を歪曲しておかしい。拘束者側は自衛隊を派兵した国家（小泉たち）と三人を区別してくれて解放すると言っている。撤退をずっと要求してきた私達の運動はここでもっとかなりはっきりと継続的に撤退を要求しつづけるというふうにしなればまずいんではないかふうに思います。政府は殺してくれという態度であったことを批判しつつ、自衛隊撤退を要求し続ける必要がある。その点を訴えるべく資料に入れさせていただきました。すいま

せん。」



吉川勇一

「これは何かといいますと、小林正弥さんから載せていいかというお問い合わせがあったので、かまいませんとお答えをしたものです。実は、昨日から今日にかけては、3人の釈放のために大変な行動が全国で行なわれているわけですが、私は昨日の国会前の行動に行かれなかったものですから、どうしたらいいかと考え、では新聞に投書でもしようかと思って『朝日新聞』の「声」欄に昨日送った原稿がこれなんです。でも連絡がまだないところを見ると、ボツになったと思います。こういう意見を新聞の投書欄に送ったということをお知らせするだけの文章に過ぎません。

私の意見はほとんど天野さんがおっしゃったことにつけていますが、ひとつだけ追加しますと、これは後の討論にも関係するんですが、この2日間、あるいは3日間に展開された全国の運動はすごい規模だったと思います。メールだけでも、読みきれないほどのさまざまな情報、あるいは行動の呼びかけ こういう手紙を出したらどうだ、こういう投書をしたらどうだ、アラビア語に翻訳してもらえないか、翻訳したらどこへ送ったらいいのかというようなものが、乱れ飛んだわけですね。こういう日本の市民の行動や意見は、向こうに確実に伝わっていると思います。3人はまだ実際に釈放されたわけではありませんが、解放が実現すれば、それは、家族の力を含めて、私たちの運動 自衛隊撤退を要求しつつ、三人の釈放を願った人びとの運動の結果だと思えますし、皆さんもそう思われることでしょう。今日の議論にも関係することですが、いろいろなグループ、その間に摩擦もありながら、一つ目的に向かって共同した行動に専心したという今度の経験は、大きなプラスとして作用し、お互いの垣根を超えることにもなりはしないかという気さえ、少し早計かもしれませんが、私は今しているということをお伝えしておきます。」



小林正弥

「岡本さんの方から声明の説明をお願いします。」



岡本厚

「私の資料は、今回の事態にいてもたってもいられないということで、おととい、つまり9日の夕方の5時頃までに文案を考えまして、『世界』の著者や関係者を中心とした人たちに署名を緊急にお願いしたものです。×切は翌日の10時。とにかく集まったものだけでも集めて、日本政府、首相官邸、外務省、防衛庁、それから各政党、マスコミ各社に送りました。共同通信ではオンラインで配信されました。声明は1と2に分かれ、1の方はイラクの人達に向けて、2は日本政府に向けて、救出に全力をあげるといふのなら、自衛隊をイラクから撤退させるべきだという要求をしたものです。すぐに英訳して、アル・ジャジーラ他、私達が把握できた、アラビア語のメディアに昨日送りました。アルジャジーラには、オンラインで流れたことを確認しました。」



小林正弥

「はい、後の資料の方には、WPN関係のものがあります。冒頭の方はWPNのホームページの一部を写しましたし、その後はWPNからの首相官邸前の緊急抗議行動の呼びかけ、3人の日本人を救い自衛隊の即時撤退を求める緊急アピールがあります。事態が起こってから非常に緊急に作られたメッセージや呼びかけです。今日は、WPNの中心になっておられる方々がこのパネリストの中にはいませんで、何らかの形で接点があるとか、一部関わっておられるというパネリストだけなんですけれども、一応WPNの動きも紹介した方がいいかと思って、この資料を作って参りました。明日も、12時から3時、あるいは18時から19時に、その後も確か今度の木曜日、あるいは18日というあたりで抗議行動が計画されているとふうに伺っていますので、是非WPNのホームページなどをご覧になってご参加いただければありがたいと思っております。」

[>>次へ](#)

*1 ワールド・ピース・ナウの[公式ページはこちら](#)。

TOP	開会前	問題提起1 (吉川勇一)	問題提起2 (小林一朗)
問題提起3 (天野恵一)	問題提起4 (小林正弥)	討論1	
討論2			

TOP	開会前	問題提起1 (吉川勇一)	問題提起2 (小林一朗)
	問題提起3 (天野恵一)	問題提起4 (小林正弥)	討論1
	討論2		

問題提起1



小林正弥

「ではこれで2時になりましたので、第2回平和公共哲学研究会、タイトルを「デモか、パレードか、ピース・ウォークか」、サブ・タイトルを「世代間対話の試み」というこのパネルをはじめさせていただきますとに思います。お手元の資料に、「第2回平和公共哲学研究会」と打っており、その次のページに趣旨が書いてあります。簡単に私の方から説明させていただきます。

趣旨のところでは、この公開討論会のご案内メールの時に付したものがそのまま採用されています。簡単に説明しますと、皆さんも多くがご存知のように、最近『世界』とか『論座』などで、平和運動のあり方についての議論が始まっていて、たとえば『世界』の三月号における辺見庸氏の「抵抗はなぜ壮大なる反動につりあわないか」がひとつのきっかけとなりまして、それに対するWPN関係者の高田健氏の反論(*1)というものがなされましたし、『論座』の方では、今日パネリストに来ていただきました吉川勇一さんの「デモとパレードとピース・ウォーク」、副題が「イラク反戦運動と今後の問題点」(*2)が寄稿され、それが今日の研究会の直接の出発点になっています。そこで吉川さんの文章は今日の議論とも深く関わりますので、これを参考資料としてお手元に配布してあります。またパネリストの天野さんは『インパクション』139号の対談で、若い世代の反戦運動を厳しく批判され、運動文化の完全な断絶を指摘しておられます。そこで、今日はそういった議論を基底にしながら、「ここに世代間の問題が反映しているのではなからうか。現状認識の相違もあるかもしれないが、どういう平和運動を展開するかというスタイルや発想のところに違いがあるのではないか」というような問題意識をもとに、このパネルを企画したわけです。

その議論の中で私自身の発言も批判(*3)されたりしていますので、今日は司会というよりもパネリストの形で参加させていただきます

た。またその他招待の方々にもさまざまな発言がこれに関連してなされていますので、後の方で招待者の方々にも是非ご発言をお願いしたいというふうに思っています。もちろんこれからの議論の中でさまざまな考え方の違い、あるいは今後のあり方についての考えの違い、あるいは一致点が出てくると思うのですけれど、違いを違いとして確認しながら、一致点もまた重視し、特に今回のような緊急の事態をみるとやはり、「世代間の違いを超えた、連携する平和運動の構築を目指したい」と私個人は考えています。実は29日にも地球平和公共ネットワーク主催としては「平和への結集」の大きなシンポジウムを企画していますので、われわれの主催者側の意識としては、「今回の議論でこの世代間の問題を議論することによってその次の段階でさらに大きな平和運動の発展のためにこの会がいければいい」というふうに願っています。特にここ数日間の展開をみると、世代間の対話どころではないという感じで、おのずと世代を超えた連帯ができていく感じがするのですけれども、一応少し解放の見通しが出てきたところで、「少し本格的な議論をしてもいいか」という雰囲気になっていると思いますので、この後は司会を『世界』の岡本さんに譲って、よろしくお願ひしたいと思ひます。」



岡本厚

「それでは、今主催者の側の問題提起をうけまして、これからシンポジウムに入っていくと思います。お手元の中に、大体のこれからの予定が書かれているタイム・テーブルですね、これに沿って、沿った形で行っていきたく思いますけど、天野さんが、これから夕方国会での行動があるということなので、早めにお帰りになりますので、そのことはあらかじめご承知おきください。一番最初に、皆さんこられた方ですね、どういう人達が来ているのかということをおねリストが知りたいというので、聞きますので手をあげていただきたいのですけれど、20代の方ってどのくらいいらっしゃいますか？ あっ、あっ、この位いらっしゃいますねえ。30代の方はどのくらいいますか？ 40代？ 50代どうですか？ ありがとうございます。60代？ 70代？ あっ結構70代いらっしゃいますねえ。80代、あっ、そうですか。ありがとうございます。それからインターネットを日常的にやっぺいらっしやる方手を挙げていただけますか？ ほとんどですねえ。ありがとうございます。これから、大体こういう方々を中心に話をするというこたです。はじめにパネリストの方のご紹介です。それぞれまたお話になるので、細かいことはその中で出てくると思ひますが、皆様から向かって右側吉川勇

一さんでいらっっしゃいます。著名な元ベ平連(*4)の事務局長。それから日市連(*5)、それから市民の意見30(*6)というずっと長く運動されてこられた方でいらっっしゃいますね。1931年に生まれています。それから、小林一朗さんです。彼は1969年生まれですね。9・11の直後に「チャンス」(*7)という運動をたちあげたお一人でいらっっしゃいます。それから天野恵一さん、よろしくお願ひします。反天皇制の連絡会を長くやってこれらました。1948年生まれです。最後になりましたけれども、小林正弥さん、今日の主催者の方であります。公共哲学研究会をされて、1963年生まれです。『非戦の哲学』などの著書もあります。

今日は、はじめる前にですねえ、二つのことだけ申し上げたいと思います。ひとつは、われわれここにいるパネリスト私も含めてです、これいかなるものも代表していないということでもあります。世代も含めて、いかなる集団の代表でもない個人としてボランティアに集まった者として発言をするということでもあります。いかなる権利でも権威でもない、いかなる利益も代表しないということでもあります。そして何が若い世代なのか、何が古い世代なのか、何がオールド・ジェネレーションなのか？これを言ってしまうと全然議論がはじまりませんので、とりあえずは若い世代、新しい世代というのは9・11以降でできた世代。9・11以後に新しくでできた人達というふうに私はとりあえず言及したいと思います。ですから年齢がたとえ50代、60代であったもですねえ、若い世代であるかもしれません。それが第1点であります。第2点は今日のシンポジウムはタイトルにありますけれども、対話の試み、議論の試みなんです。相互批判というのは自由でありますし、これやるべきです。しかしあたりまえのことですけれど、最低限お互いに対する敬意というものは持って話すというのが基本的常識だと思います。どうもメールとか、インターネットだと、段々抑制が効かなくなるということがよくあることですが、今日はこうやって顔を突き合わせて話すわけですから、是非そのあたりのことは守っていただきたいと思います。今日の目的としては、できる限り共通の基盤、お互いの志をするところ、目指す方向は一致しているというふうに私などは思っていますので、是非共通の基盤をあらためて確認する場になれば。しかもこれまとめたりなんかするようなことは考えていません。ひとつのステップとして考えていただければと思っております。それでは、はじめますけれども、時間がですね、今日はいろいろな方々に発言していただきたいので、このチリンチリンという音を鳴らして。ちょっとこういうのが鳴りますよっていうので、(チリ

ン・チリン)。これは終わったというしるしなんです。一分前になると、このあたりになんかでてくると思いますので、そういう形で時間を、すいません大変失礼なことですけども、今日はいろんな人に発言をしていただきたいということでそういう形で進めさせていただきます。それじゃまず、トップバッターとして吉川勇一さんよろしくお願い致します。」



吉川勇一

「普通自己紹介からはじめるんですけども、時間の節約のために私がつくったレジюме(*8)の下に、自己紹介をつけておきました。仔細はこれに譲ります。人生の賞味期間がもう過ぎかかっている人間だ(笑)ということさえおわかりいただければ.....と思います。そこに住所もメールも書いてあります。ご意見があれば大歓迎ですので、お送りください。

さて、すぐ本論に入ります。レジюмеに沿ってお話しします。レジюмеにふってある数字の順序でいきますが、とてもこれは20分でお話できる内容ではありません。これに沿って言いたいようにお話ししたら、おそらく最低でも1時間はかかると思いますので、飛ばすところも出てくると思います。

司会の岡本さんも言われましたけれども、議論 特にインターネット上の議論ですと、私の知るかぎり、最後はお互いの罵詈罵倒で終わるとというのが大部分のようです。残念なことです。インターネットのメール上で建設的な議論が行われた例をあまり知りません。相対で顔をみながらの討論ですと、同じ表現でもニコニコしながら言っているのか、眼を怒らせて言っているのかがわかるわけで、理解の度合いがだいぶ違います。インターネットではそうはいかないので、どうしても議論がエスカレートして行って、まずいなあという気がしています。

私の「デモとパレードとピース・ウォーク」をめぐっていくつかの意見をインターネット上で拝読はしたんですけども、最初のうちは、批判というよりも、誹謗、中には揶揄ではないかと思えるような たたとえば年寄りが昔の栄光にしがみついて近頃の若者に文句を言っているだけで、貸す耳なんかもってはいない、という類の意見が多かったように思います。ようやく最近になって、そうではない、まっとうな、真剣な議論が、しかも印刷された文章の形で出て

くるようになったので、よかったなあとホッとしているところです。小林正弥さんや斎藤まやさんたちのご努力で実現できた今日の討論のことも喜んでいきます。

ただ、この集まりの問題の一つは、タイトルに「世代間対話」とある点です。確かにパネリストを見ますと、そのように選ばれています。70代の私から、一番若い小林一朗さんまで、大体均等に間隔をおいて、団塊の世代・全共闘世代といえる天野恵一さん、それよりさらに若い学者の小林正弥さん、そして9・11以後に運動に参加されてきた小林一朗さんというふうに……。その限りにおいては世代の違いは反映できると思うのですが、実は、現在の反戦運動で問題となっていることは、必ずしも世代間の意見の相違や感じ方の相違というだけにまとめきれものではないものだと思います。私は欲張って、今日の参加者の方にいろいろな資料をお配りしました。その中の一つに埼玉NPOセンターの東一邦さんが書かれた「左を忌避するポピュリズム」(*9)と、もう一つやはり東さんの「連帯とネットワーク」(*10)という文章があります。それから、関西の黒目という人の「『内在』する事の可能性そのものの危機であるのだ」(*11)という文章もお手元にあると思います。後者の「関西の黒目」というのはおそらくペンネームだと思いますが、これはWPNの中心におられる高田健さんが『技術と人間』3月号に書かれた文章への反論として出てきたものです。まだ印刷された形にはなっておらず、メーリングリストやインターネットの上で読めるだけですが、皆さんにはプリントアウトしてお配りしました。

このお二人の意見では、かなり重要な問題提起がされていると私はうけとめ、お配りしたいと思ったのです。この場で読むわけにはいかない長さの文ですから、後でご検討いただければと思います。東さんのネットワークという言葉に対する語感の問題などには、世代間や経験の違いも反映されているのは確かかと思いますが、にもかかわらず、東さんはこれを世代間問題としては出しておられない。一緒に運動をやり、接触がある中で、世代の差を越えて感じられる、運動の仕方、問題の提起の仕方、表現の仕方の違いとして、東さんは出されておられる。関西の黒目さんは「それは世代の問題ではない」と、はっきりと言っています。

現在の議論は、WPNを一つの例としてとってもいいんですけど、なにかの運動を共にしている集団全体が、ただ一色の性格を持っていて、その集団に対してその外部から違和感やら批判やらが投げか

けられているという構造では明らかでない。私自身もWPNの内部の人間だと思っていますし、それから他の方々もそうなのですが、WPNのすべてにおいて完全に一色になりきっているわけではない。これは、当然のことで、WPNとは、実にさまざまな人びとが、イラク反戦などいくつかの特定の課題を中心に集まっている多様な存在であり、そこにはさまざまな思想が混在しているものです。そのことは、言葉の上では誰もが認めるわけですが、にもかかわらず、そこには、もう少しきちっと議論をし、理解を深めておく必要のある問題点があると思っています。東さんや関西の黒目さんなどが提起されている問題を、全体の中にどういうふうにとりこみ、活かしていくかということはかなり大事な問題ではないでしょうか。

3に移ります。そもそも今日の集会のタイトルにもなった『論座』の文章で私が言いたかったことは、経験の継承が大事だということと、もう一つは論壇の中で、また、運動自体の中でも、運動論が非常に少ないということでした。経験の継承という問題については、『論座』以前に、今年の『現代思想』6月号および『マスコミ市民』6月号に載った私の文章(*12)でも述べています。後者は、今では入手しにくいと思いますので、今日コピーをお配りしてあります。昨年5月の憲法記念日に立川市の集会で私が話したことの記録です。この中では、経験の継承の問題のほか、「デモ、ピース・パレード、ピース・ウォーク」というような表現に関する私の違和感や、権力に対する認識の問題や、いわゆる「やさしさ」のことに触れています。これを読んでいただければ、私が「やさしさ」の問題をどう考えているかをご理解いただけるかと思いますが、これもこの場でというのは無理かと思えます。

4に移ります。先ほど触れた『技術と人間』3月号の高田さんの文は、私の意見への直接の反論ではなく、『世界』3月号にのった辺見庸さんと、もう一つ、同じ号に載っている北沢洋子さんの文章に対する反論、批判として書かれたものですが、しかし私が読む限り、同時に私の『論座』や『現代思想』の文章にも触れていると思わざるを得ないところがいくつかあるようです。高田さんは「やさしさ」問題をとりあげ「今の運動に議論が少ないと年配者が嘆くが、第一にどこを見ての話か？ 第二に果たしてそれがやさしさの故か、冗談ではない」と、強い言葉で批判されていますが、運動との関連で「やさしさ」問題に触れたのは私の『論座』の文だけだと思います。私がどういうコンテキストでそれを言ったのかというこ

とは、『マスコミ市民』の文の方で明確になっていると思いますから、あとでお読みください。私は、若者が「やさしさ」というものを取り違えてはいないか、ということをやったのです。若者がやさしさを持っているから議論がおこらないと言っているのではもちろんありません。これは高田さんが私の意図を読み違えられたのだと思います。私が言ったのは、若者が「やさしさ」だと思いこんでいるものは実は「やさしさ」ではないだろうということです。つまり相手の気持ちの中に踏み込んでいって、「君の言っていることは違うと私は思うが、そこはどうなんだ」と突き詰め、自分と相手との意見の違いを明らかにし、かつその中で、一致できるものは何か、一致していないものは何かを明確にさせるという作業を避けている、そして、それが「やさしさ」だと思いこんでいはいはしないか、というのが私の言いたいことでした。相手を傷つけやしないか、あるいは相手を傷つけたと相手に思われることによって自分が傷つきやしないかというのに対する恐れがあるのではないのでしょうか。

これがいいかどうかは別として、かつて60年代後半から70年代の全共闘世代がよくやったことですが、「おまえ展開してみろよ！ そんなこと言えるのかよ！ それで済むと思うのかよ！」という調子の、すごい議論 内ゲバは別ですが これは敵対関係ではなかったと私は思うのです。仲間同士の間でも、同じ党派に属している人でもそうでしたし、『マスコミ市民』に書きましたが、新聞記者と活動家とか、雑誌の編集者と運動に参加している学生などが、新宿の赤ちょうちんの飲み屋で朝の2,3時ころまで、その調子の議論を延々としているということがよくあったわけですね。しかもそれは、必ずしも敵対関係をよびおこすものではありませんでした。最近その種の議論が消えました。新聞記者もまったく議論しません。いや、何を議論していいかわからない新聞記者や雑誌の編集者が大部分です。岡本さんをここにおいて失礼ですね、岡本さんと松本一弥さん（当日参加されていた『論座』副編集長）は別として、と言い直しますけれど、とにかく非常に少なくなっている。運動の中でもそういう傾向が顕著だと思います。年寄りという敬して遠ざけてしまう。若者というとうとう俺達の気持ちは伝わりゃしないよと、意見も言わなくなるような感じがあって、これは年代を超えた現象だと思うのですが、そういうことへの批判というコンテクストで「やさしさ」に触れたのです。

時間がないからここで朗読できないのですが、ここに條冬樹さんという詩人の『優しい詩』という詩集があります。ずいぶん前、60年

代後半から70年のベトナム反戦運動の中で出された本ですけれども、彼は戦争体験があり、私たちにとっては先輩の人です。僕は好きなんですけれど、『優しい詩』という題がついていながら、これぐらい厳しい詩はない。いかに自らにも厳しく、同時に権力、人民を弾圧するものに対しても厳しいか、それが真の「やさしさ」だと、彼はうたうのです。論文ではない詩なのですが、僕はこの厳しさを奥に潜めたものこそが本当のやさしさなんだ、と感ずるので。これに比して、どうも今の場合は、「おまえの意見はこうなんだろ。わかったよ、俺と違うことは。で、それでいいじゃないの、違いは違いで。」ということでは止まってしまふ。運動の中では、もうちょっと突っ込んだ議論があつていいと私は思うのです。それは、相手を人格的におとしめるものとはまったく違ったものであるべきで、受け取った方もそれで傷つけられたと思うのではなく、真剣に対応していく……そういう議論の中からでないかという気がします。ですから、高田さんの反論は、あたってないし、誤解があれば解いてほしい。これが4番です。

5番に行きます。『労働情報』という雑誌があります。これの3月15日号にWPNで中心的にやられている方がた、三人を含む座談会が載っています。タイトルは「労働運動への問題提起と擁護」なんです。中に私の『論座』文章に対する批判が三人の方でなされています。それを読んで私は悲しい思いがしたんです。「継承というのは、上の世代から提示されたものをどのように引き継ぐのか、といったことだと思うけれど、何も提示されていないのに引き継ぐことはできない」ということが言われ、それに応じた人は、「いや、提示したと思ってんるんだよ（笑）。結局は『今の若いヤツは』といった意識に近い。」などというやり取りです。これは議論になっていない。少なくとも『労働情報』のような雑誌が載せる座談会としては極めてレベルの低いものだと、残念に思います。私の名前は出てきません。老人なので名前を出したら「失礼」かななどご本人は思ったのかもしれないけれども、かえって気分が悪いです。吉川の言っていることは間違っているとされた方がずっとすっきりします。

「継承すべき経験なんてあるのか」と言われていますので、今日は、これだけは少なくともわかってほしいという二つの経験を皆さんのお手元にコピーとして提供しました。一つは、研究社から出た全5巻の『講座コミュニケーション』の一節で、私が書いた「自由

の危機」(*13)という論文です。もう一つは、福富節男さんという、ベトナム反戦運動以来、ずっと私たちといっしょに行動した、年齢は私よりも先輩の80代で数学者ですけれど、その福富さんが書かれた本の中の共同行動の原則についての文章(*14)です。

まず「自由の危機」についてですが、かつてベ平連が山口県岩国市に作った「ほびっと」という反戦スナックがありました。今でも岩国にある米軍海兵隊基地にいる米兵による反戦運動の根拠地として開設したものでした。ここを拠点にしての米軍内部の地下反戦活動は、当時、世界の最先端に行く優れたものにまで発展するのですが、この「ほびっと」が徹底的に弾圧され、最後は閉店を余儀なくされます。この弾圧は直接的には広島県警と山口県警がやるんですけど、しかし実際には、米国務省、米軍、日本国政府、日本国警察庁、そして広島県警と山口県警が連携、連動した国際的な大計画による弾圧であったことが判明します。それを実証的に明らかにしたものが「自由の危機」です。私は権力の恐ろしさということを、そういう経験を通じて認識したのです。

デモのときに、隊列のすぐ横に並んで、「もっとひっこめ！」なんて言っている、あの警官をみて、これが権力かなんて思いこんで、それに突っかかり、あるいは突っかかることはやめましょう、仲良く一緒に歩きましょうなんていうレベルで権力というものを考えられたら困るとというのが、私のお伝えしたいことの一つです。

もう一つの、共同行動のルールについてのべた福富さんの文についてですが、もうだいぶ時間がなくなってきましたので、詳しくは説明できません。60年代後半から70年代にかけて、当時のベトナム反戦市民運動が、どんなふう異なる意見や立場の間で共同の行動を築こうとしたか、その中でどういうルールが生み出されていったのかを知ってほしいと思います。それは必ずしも今に伝わっていないと思うからです。今では、これと違うものが原則だと言われているように思えます。『赤旗』の主張などでも、「戦後日本の国民運動の中で」「共闘の原則が確立されて」きており、それは「国民運動の正しい発展と共同の拡大にとって法則的なもの」だなどされている(04年4月3日号)ものは、福富さんがまとめられたものとは違うルールです。突き合わされて議論がされたらいいなと思います。

まだレジュメの半分しかお話していませんが、もう時間がなくなってきましたから、あと一点だけ。小林正弥さんは、小林さんと

私との間に意見の対立がある、私から批判をされたというふうに言われました。みなさんのお手元には私の小林正弥さん批判をお配りしていませんので、どんな批判なのかわからないと思います。その点だけ申し上げます。昨年12月8日に討論集会があり、そこで小林さんの報告を聞いて私はそれに異論がありますと、その場で質問をし、私のホームページにも小林正弥さん批判を載せました。そのことを指しているわけです。

一つはその批判の中では言っていないのですが、ここで付け加えておきたいことは、小林さんの著書『非戦の哲学』などを見ますと、小林さんは自衛隊合憲論をお持ちです。それから自衛隊必要論です。そのことを小林さんは隠されていないのですが、私とまったく立場が違うので、批判をせざるをえず、今後運動の中で議論していくべきではないかと思っています。今の自衛隊をどう見るのか、本当に必要なのか？ 小林さんは必要だとおっしゃっていますが、私はそうではないと思います。これは今後の問題であって、今日のテーマではないので、それだけにとどめます。

12月8日集会での小林さんの報告への批判としては、60年代から70年代にかけての反戦運動の総括というのが十分に伺えない、つまり、その中から何をひきだし、何を受け継ぎ、何を捨てなければならないかが、明確ではないということです。たとえば日本の加害者責任の問題やら戦争責任の問題が、小林さんの著書からはあまり伺えない。聖徳太子の「和」や中国の墨子からいきなり自衛隊必要論、日本の中立などに飛んでしまうように思えるのに私は疑義をもっているのですが、もう時間がありませんで、それはあらためての課題といたします。以上です。」

[>>次へ](#)

*1 高田健氏の反論 [こちらを参照](#)。

*2 「デモとパレードとピースウォーク」は [こちらを参照](#)。

*3 私自身の発言も批判 [こちらを参照](#)。

*4 ベ平連 「ベトナムに平和を市民連合」の略称。1965年発足、1974年解散。『ベ平連回顧録でない回顧』（小田実）、『市民運動の宿題』（吉川勇一）などに詳しく述べられている。[旧ベ平連の記録](#)。

- *5 日市連 「日本はこれでいいのか市民連合」の略称。1980年発足、1994年解散。
- *6 市民の意見30 [公式ページはこちら](#)。
- *7 チャンス [公式ページはこちら](#)。
- *8 当日のレジユメは[こちらを参照](#)。
- *9 「左を忌避するポピュリズム」は[こちらを参照](#)。
- *10 「連帯とネットワーク」は[こちらを参照](#)。
- *11 「『内在』する事の可能性そのものの危機であるのだ」は[こちらを参照](#)。
- *12 『マスコミ市民』6月号に載った文章は[こちらを参照](#)。
- *13 「自由の危機」は[こちらを参照](#)。
- *14 「共同行動のルール」については[こちらを参照](#)。

[>>次へ](#)

TOP	開会前	問題提起1 (吉川勇一)	問題提起2 (小林一朗)
問題提起3 (天野恵一)	問題提起4 (小林正弥)	討論1	
討論2			

TOP	開会前	問題提起1 (吉川勇一)	問題提起2 (小林一朗)
	問題提起3 (天野恵一)	問題提起4 (小林正弥)	討論1
	討論2		

問題提起2



岡本厚

「ありがとうございました。だいぶ混んできて席が足りませんので、自分の隣の席空いている人、手を挙げてもらえますか？ すいません、受付の人がそこへ誘導してあげてください。あともう一点、いま録音されている人がいるみたいですが、個人の参考として録音されるのはかまいませんけれど、これは記録して公表することも考えています。勝手に公表することは止めてください。部分的に公表する場合は、かならずその発言者に確認をとってください。話し言葉だとどうしても言いすぎたり、言い足りなかったり、思いと違うことがありますので、かならずそれはお願いします。次に、小林一朗さんお願いします。」



小林一朗

「小林一朗です。吉川さんとは逆に、自己紹介からはじめた方がよいかと思っております。理由は自分はいこの間まで平和運動の外にいて、今は平和運動をやっている者、そうした一つのサンプルでもあると思うからです。今回個人の立場で参加しておりますけれど、僕は9・11直後に何人かと「チャンス」というネットワークを立ち上げまして、反戦平和運動を担うというますか、それなりにできることをやってきました。私の場合、最初は環境分野の活動から入りました。大学では一切、市民運動、活動には参加したことがなく、普通に就職してエンジニアになって、ハイテク分野、半導体のエンジニアになりました。就職後に環境問題の深刻さを知り驚いて、環境の技術者に転じ色々やっていくうちに、いろんなぶつかりあいを知るようになりました。また途上国の環境問題、まさにこれが構造問題であるということを理解しました。そして環境破壊のいきつく先、経済成長のいきつく先は、やはり戦争だなあというような問題意識がいつのまにか自然にでてきたんですね。いつかは軍需産業の問題や金融の問題、戦争の問題へ踏み込まなければならないなあと思っていた頃に9・11がおきたという感じでした。」

既にみなさんおわかりのとおり、私自身は全共闘のことも知りませんし、ベ平連のことについても名前だけ知っていた。盛り上がった活動があって、小田さんがいたということぐらいのことは知っていましたが、それ以外のほとんど知らないまま。そういえば阿木幸男さんの非暴力ワークショップを脇で見ていたことがあるだけで、そのくらいしか知らないまま平和運動に入りこんできました。

僕自身だけでなく、その周辺にいる低年齢層というのは、その人たちもちろん経験不足で、物をみるときの着眼点とか、物足りないことなどが色々あると思うのですが、これは見方を変えればこうした僕たちのような層に世相が表れるのではないかという印象を持っています。

次に「チャンス」について少し振り返りたいと思います。9・11の直後にそれまでの自分の日常の感覚をつきやぶるようなショックを多くの人を受けたと思うのです。普通だところ、活動やっていて呼びかけて新たに参加してくれる人は非常に少なく、さびしい思いをするケースが多いと思うのですが、あの時は、ある種のハードルを超えちゃったと思うのです。何かしたい、しなければ、という思いが人々の間に生まれたと。

だけどこの活動をこのまま終わらせちゃいけないなあということ、僕自身は非常に強く感じました。この9・11という事件のおきてくる背景や、事件をとりまく世界全体のことをもっと理解して次につなげていくか、そのためにはどうすればいいのかということを考えました。同時に、それぞれの人自分からできることということも重視するという考えも考えました。なぜなら、僕自身が反戦運動にアレルギーを強く持っていた。大学の時にセクトが仕切ったりしていて到底入る余地がなく、振り返ってみると、こう奪われたような感覚、自分が社会に参加していく機会や気持ちを奪われるような感覚をどっかに持っていたんじゃないかなと、思うんですね。それが自分の中でアレルギーとしてあったんじゃないかなと、今は思っています。「自発的な意志」はいろんな工夫を生むベースだと思いますし、問題にぶちあたったときですね、自分で解決していこう、仲間と協力して解決してもっと前へ向かっていこうという気持ちのベースになると思うのです。誰かにいわれたことに乗るんじゃないかと、まず自分からはじめよう。ただそのときに、「できること」に固執することはよくないと思います。この自分にできることとい

うことが自己弁護的に使われることがあって、自分はこれしかできないからとか、問題の本質は別のところにあるのに違うところに居続けるための理由として使われることがあるなあと感じていました。それで僕は活動の質と幅を変えていこうということを強く主張してきました。それはそれなりに貢献してきたんじゃないかなと、なんとなく思っているんですけど、どうですかねえ。

チャンスが始める以前、「平和」が心の問題だけに集約されて、日本の犠牲者としての、戦争の被害者としての感覚に集約されちゃうようなことがあると感じていました。それをいかに変えていくか。たとえばアジアの侵略から戦後のODAに向かっていく流れを見れば、これが一連のものだということが少し勉強すればわかるはずなんです。でもその重要な点が断絶されている。ODAのことを大学で勉強していた学生が、前に僕に持ってきた本が『国民の歴史』で、これいい本ですよとかいって持ってくる。つまりそれくらいの感覚があるっていうことを認識する、運動をやる人間が認識する必要があるんじゃないかなと思っています。

ピース・ウォーク(*1)という名前は色々波及しましたけれど、たぶん全国で20箇所を超えるくらいのところでやったんじゃないかなと思います。僕自身はウォークという言葉にこだわっていたところがあって、その起点となったのはティクナット・ハンというベトナムの時に、死体の犠牲者を背負って歩いたりした方、あとアメリカインディアンのセイクレット・ラン（聖なる走り）です。アメリカインディアン・ムーブメントがこれも70年代だったと思いますが、デニス・バンクスたちがはじめました。聖なるウォークということで、自分たちの文化、生きている誇りを取り戻そうという意味を示しながら大陸を横断するということをやりました。僕の中にあっただイメージというのはそれだったんです。9・11の時、その時点では僕はそれでよかったんじゃないかと思っています。あの時は問題と現象の関係性がかなり曖昧でした。誰が悪者で、もちろん実行犯がいるわけですけども、誰が悪者で、どこに問題があるのかというのがちょっと見えにくい状況だったんじゃないかなと思っています。ウォークの前に今起きている事を噛みしめて、目をつぶって追悼する時間をもうけ、そしてまずは何の音楽もかけず、何のマイクも何のスピーチもなく歩きはじめて、渋谷の坂を降りたところから前に向かっていこうというメッセージで歩いたんですね。このやり方は9・11の時は、僕は状況に合っていたんじゃないかと思っています。しかし、WPNになってくると、ちょっと僕はピースウォークの時と

は違うやり方が必要なのではないかなという気がしていました。ブッシュの背景とやろうとしていること、それを応援する日本政府、その関係性というのが傍目にも明確になってきた。9・11の直後からブッシュが次に向かうだろうなことは感じていましたが、直後にはその流れは、見えにくかったんじゃないかなという気がします。それでイラクに攻撃をしかけると時になると、誰が何を目的に戦争をしかけるのかというのがはっきりしてきたので、そのときにウォークのコンセプトだけではやはり違うんじゃないかなと。もっとNOということをきちんとつきつけなければいけないと。内部よりも外側からみたときにそのままのコンセプトがWPNに持ちこまれたんじゃないかという印象があるかなと思います。ここはいろんな方の意見を聞きながら議論をしなければならないと思っています。

次に非暴力について触れたいと思います。おそらく今日も話題にのぼるのではないかと考えていたんですが、チャンスと警察の関係(*2)ってというのがいろんなところで話題になりました。ご指摘のとおり認識が甘かったことは事実だと思います。考慮はしたといっても、やはり実際の体験をふんでいない者のいう考慮というのは甘くならざるをえないと思います。その意味では、甘さがあったことは事実だと思うのです。ですが一方で、僕自身は個々人の意見としては権力と付き合い続ける、それは仲良くやるということではなく、人間性を取り戻してももらう努力というのは続けてもいいんじゃないかなと思っています。これはある種自分の中の確信みたいなものです。ただそれをいろんな人達といっしょに運動をやるときに、自分の意志を尊重するのか、それとも多くの人とのコンセンサスで一致したところで向かうのか、つまり警察の付き合いだけはやめろ！というところへ向かうのかというのは、当然運動のいっしょにやる人達の意見を尊重するのはあたりまえのことだと思います。

運動の断絶ということが言われますけれども、この断絶した間の時間というのをどうとらえるかという点については、かなり共通の議論ができるんじゃないかと思っています。70年から2000年位まで、約20年から30年の断絶があると思うんですけれども、この間日本の社会がどう変わったのか、そのときに個人の思考がどう変わったのかということは、議論できるんじゃないかと思っています。根底にある運動の哲学とか、どうしていききたいかというのは一緒であっても、この社会の雰囲気、個人の思考の変化とかですね、経済の変化、こういったものにそのままの運動の継続では対応しきれないじゃない

かという気持ちを持っています。社会に見えるさまざまな断片的な問題、日本では自殺、ひきこもりの問題というのがよく語られますけれども、これは当事者のみに特徴的なことではなく、日本社会の持っている全体的雰囲気と重なっていると思うのです。つまりそういった全体的雰囲気、人達に働きかけて行く必要があるというふうに考えます。

自分がやっている市民活動を人に話す時に、「ボランティアやっています」と言うと「偉いわねえ」と言われるんですね。だけど「市民運動をやっています」というと、「危ないんじゃないの」って近所の方から言われたりして。このギャップを埋めていかなければならないと。こうした人達に自分のやっていることを伝えていかなければならないわけです。伝える側の工夫を考える必要があるなあと。僕は伝える工夫にかなり力を入れてきたつもりです。

これまでの話題と重なることなのですが、中学生から小学性かどちらか忘れてしまいましたが、もっとも嫌いな言葉のアンケート結果を知りました。それが「夢」と「希望」って答えたっていうのです。これ、かなり衝撃的なことですけれども、たぶんこれ、サラリーマンもそうなんじゃないかな、町工場もそうなんじゃないかなって思うのです。一部勝ち組と言われている人達が違うだけで。いや、その人達も追い立てられてやる気になっているだけかもしれない。この未来に対して希望を持ってないという雰囲気。そこに対して運動は何を仕掛けていくのか、何を語っていくのかということをご自己批判を含めて考えなければならぬと思います。ですから私が主張したいのは、未来を創っていくということ、その希望を伝えていくということ、これを自分の中ではとても重視している。結果的に「反対」という意思の位置付けが低く見えるのは、「創り出す」主張を重視しているからです。ただ、「創り出す」といっても、事を進める上では、必ず反対しなければならないという局面があるということは理解しています。

三つ目の話題、「伝える対象」に移ります。先ほど「チャンスはある種のサンプルだ」ということを申し上げたんですけども、ちょっと僕はチャンスの中でもかなり浮いていて、いつもみんなから批判されています。「おまえ勝手なことばかりやっている」と。今日もこんな議論の場なんか出るなという批判も受けています。しかし、どうしてそのような反応がでるのか、ということも考えなければならぬんだと思っています。来て話してみれば、意外とス

ムーズに議論ができた、ぶつかることはあるかもしれないけれど、合意するところがみえたりするってこともあるかもしれません。しかし、自分たちを批判する人たちとの議論を毛嫌いする傾向があるんじゃないかという思いもあります。それもひとつのサンプルだと思います。チャンスを含めて青年層やそこにも参加していない周辺にいる人達に伝えるために何をすればいいのか、僕らがやった広げるための活動の例として、有事法制のときにはCM(*3)を作って映画館で流しました。ほかにも見栄えのよいビラを作る。僕たちは「フライヤー」(*4)と呼んでいたんですけど。クラブ・イベントなどのチラシは「フライヤー」と言われていて、僕もそういったところに関わっていましたが、メンバーもそうだったんで自然と「ビラ」ではなく「フライヤー」という名称が出てきたわけです。僕たちは見てもらうための工夫、その点に努力しました。この「見てもらうための努力」が僕は大事だと思うのです。まず、自分が主張したいことを持っているのはあたり前です。その上で相手に伝えたいという思い、相手を理解しようとしているこちらのスタンスが伝わるかどうかということが、僕は大事だと思っていて、強い言葉だけが一面に並んで、見栄えもなく、さして見てもらう工夫をしていないチラシをどんどん配っても、それはゴミになってしまうだけ。だけれども、受け取り側が見たいような工夫といたしましうか、それをこちらがしているということが伝わるということが僕は重要じゃないかなと思っています。そこからはじまる。いつまでもそこだけにこだわる必要はないにしても、入り口として、そういった伝える工夫というのがとても大事になるんじゃないかなと思います

過去の運動を色々、ベ平連のお話については吉川さんに以前僕らのミーティングに来ていただいて、聞かせていただきました。全然しなかったことが見えてきて、かなり共感するところとありますが、問題意識が近いなあと思うところがありました。そういったものを含めて、自分自身がくくってしまっていた運動観についての反省を、今強く持っています。ですから反戦平和運動に対するいわれなき中傷というのかなり多く存在するだろうなあとわかります。ただ一方で、これは誰か個人ということでは必ずしもないんですけども、市民運動が持っている内向きのベクトル、方向性、エネルギーの向く方向ですねえ、そういったものがやはり僕はあるんじゃないかなあということ強く感じます。内側だけの議論っていう。たとえばBBSなんかもそうなんですけれども、メーリングリスト上で吉川さんとやりとりさせていただいた内容のなかで、インター

ネット上でものすごい誹謗中傷をする、「2ちゃんねる」がそうですけれども、そうではないところでも、これでとても対話にならないなあてというような意見をあげてくるケースが結構あるわけですね。まさに先ほど吉川さんがあげられた黒目さんはその中の一人だなと僕は思っています。ただ彼の意見を全部無視していいかっていうとそうは思わなくて、吉川さんがとりあげたところに重要な指摘、たとえば運動官僚って言葉がありましたけれど、これはかなり重要な指摘だろうなあって気がします。この意見は是非ご覧になってください。

あとは、PRの観点についてレジュメに書きました。このPRというのは単に宣伝ということじゃなくて、パブリック・リレーションですよ。社会に対してどうコミュニケーションしていくかと、この観点が僕は繰り返しになりますけれども大事だと思っています。論壇や新聞、運動の雑誌というものに意見を出すことはもちろん重要なんですけど、この限界が明らかであって、そこでいくら議論しても、そもそも読まない人たちには、無いものと同然と扱われてしまいます。運動側の中にいる人にとっては議論の場になるわけですが、その外側にいる人達に焦点をあてた場合完全に無視されてしまう。その点をどう捉えるかということですね。たとえばチャンスに集うような人達は、議論をするという意識よりも、この論壇や新聞などを読まない人達に意識が向いているために、議論をしようと言ってもまずそれではのってこないと思います。ちょっと特殊な人達はいるかもしれないけれども、若い、9・11以降に活動を始めた層の特徴の一つとして、自分と同じ目線の人達に伝えていきたいという意向が強くあるなあと思います。それを意識して運動の経験をやはり伝えていくという取り組みがこれからあるんじゃないかあと思います。

話がごちゃごちゃしてすいませんけど、パレードについて呼称について少し触れておきたいと思います。僕自身はパレードという名前はあまり好ましいと思いません。パレードというのはお祝いの時にやるのが普通ですし、そこには犠牲になっている人達のイメージというのがあまりでてこないじゃないかと思います。チャンスでピース・パレードというのを一回企画したんですけども、そのときにですね、映像で戦争の映像、難民の映像、苦しんでいる人の姿というのを写し出すスクリーンの前がダンスフロアになっていて、映像の前でみんな踊っているわけですね。12月だったんで、あんまり寒くて一回踊ろうとしたんですけど、その映像をみているうちに

体が止まってきちゃいました。だけれどそこでそんなに気にせず踊り続けている人達がいる、でもこれ現実だなあと。この映像の前で踊れるというのが今の現実で、こうした人たちの感覚を受けとめて、その人達に語りかけていくとのが必要だなあと感じています。

いろんな批判をいただき、特に自分自身考えていかなければいけないなあと思っていることは、少数排除なのではないかという批判についてです。これがやはり気になります。WPNやそういうデモンストレーションをいろんな人が参加しやすくする、そういう雰囲気を作っていくっていう時に、それでは駄目だと、ジグザグ・デモとかをやる必要があるんだということを主張する人達がよくこられて、数人で道を外して行って道の真中へいったりするんだすけれど、それに対してWPNのスタッフが、必ずしもチャンスのメンバーではないですけれども、抑えたりしたと。実際僕もそういう場面を見たし、邪魔しないでほしいという気持ちをもったことも事実ですね。ただそれをどう捉えていくかですね。それに対してたぶん黒目さんは雰囲気を感じて運動官僚という言葉をつかっているんですけど、自分達は世界に対して社会に対していろんな人達にたいして開かれていることをやっているつもりでも、いつのまにか少数排除といふかな、異端はどうでもいいという感じが浮かんじゃっているんじゃないかなという危惧は、自分自身持つんです。これを超えていくために、僕としては出れる場所はどこでも出て議論をするという活動をこれからも続けていきたいなと思っています。これまでも何度か自分が批判にさらされる場面に出て議論をするということがありましたけれども、そういう機会を尻ごみせずにかけて行って意見をうかがう。受け入れがたいところで議論をするということは、個人的には続けていきたいと思っています。レジユメの一番最後のところはすいません言えなかったけれど、後の議論でふれたいと思います。どうもありがとうございました。」

[>>次へ](#)

- *1 ピース・ウォークについては[こちらを参照](#)。
- *2 チャンスと警察の関係 [こちらを参照](#)。
- *3 有事法制のCM [こちらを参照](#)。
- *4 フライヤーの例は[こちらを参照](#)。

TOP	開会前	問題提起1 (吉川勇一)	問題提起2 (小林一朗)
問題提起3 (天野恵一)	問題提起4 (小林正弥)	討論1	討論2

TOP	開会前	問題提起1 (吉川勇一)	問題提起2 (小林一朗)
	問題提起3 (天野恵一)	問題提起4 (小林正弥)	討論1
	討論2		

問題提起3



岡本厚

「ありがとうございました。次、天野さんよろしく。」



天野恵一

「僕の『インパクション』の座談会の発言も紹介されているんですが、それは座談会だってこともありまして、その場の気分でしゃべっているの、私のまわりの若い方々から色々批判も受けました。どういう批判かということ、世代論というのは基本的に断絶を組織するんですね。上にも向かって、下にも向かって俺達俺達がという話ですから。そういうことでどういう批判が僕にいくつかわせられたかということ、一緒に運動してきている若い人達がいっぱいいるわけですね。彼からみたら、俺達はいったいおまえにとってなんなんだって気分させるような発言だったとやっぱり思っている。しょせん若造みたいな、そういう意味ではちょっと世代論的な枠組みをリジットに立てっちゃったのは、そういうような発言をしちゃったのはまずいなあというふうに反省しています。若い人の運動もいろいろです。

それともう一点、これは長いおつきあいしている吉川さんがいるんでわざわざ言うんですけど、吉川さんの提起や整理について僕は基本的にわかんないわけではもちろんなく、非常によくわかるんですけど、でもたとえば僕はいつくかそのマスコミ迎合型の若い人の運動、たとえばマスコミの記者に向かってありがとうなんていうデモ隊がいるのをみたときは、仰天しました。警察官に向かってありがとうというの、仰天です。そういう文化どうしてでてきちゃったのか僕はよくわかりませんが、そういう仰天した感じの、ある種のマスコミメジャー志向というのは、僕はどこで最初に感じたかということ、なんと「ベ平連」です。変な言い方ですが、ベ平連がそれほどひどかったわけではなく、全部そうだといいたくないわけじゃない。そのころ僕だって若かったんで、学生だったんですか

ら。僕の同級生ぐらいでベ平連でやっている奴というのは、たとえば開高健(*1)とか小田実だとかいわゆるマスコミ文化人、その人がやっていることを支えていくことがすごく好きで、メジャー志向なんですよね。

僕たちの学生運動は、ベトナム反戦運動だけをやったわけではなくて、大学闘争というのは基本的に能力主義的序列主義な社会秩序全体に対する異論ですから、はっきりしていることはマイナー志向なんです。どちらかというところ。駄目でけっこう、徹底的にマイナーでいきたいっていう、渡世に対してそういう倫理観が自分たちは圧倒的に支配していたと思うんですよね。何処までホンネになっていたかはともかく。だからものすごい行き違いで、すごい違和感があったんです。そういう学生「ベ平連」には。もちろん「ベ平連」が全部そうだったなんてそんな失礼なことを僕がいいたいわけではないので、誤解のないようにしてください。そういう点でも、世代論というのはちょっとイカンなっていう、なん世代にわたってもいろんな問題が共通してあって、今の問題もある。世代論的な実感というにも僕は根拠があると思っていますけれど、それだけで区切っちゃうのはちょっと論議が発展的にいかないという形態をつくっちゃうな。そう思った。とりあえずそういうことだけ最初に言っておきたいと思います。

それから僕のレジュメというのは先ほども言いました「家族会アピール」を頭にしたいいくつかの文章、僕が書いた文章を適当にはってきたんですね、今日はどういうことを話したらいいかってことを全然イメージわかなかったんですが、とりあえずここに一番最初にいれているですね、僕の発言というのは、1991年のシンポジウムのときの発言です。ここにいらっしゃる吉川さんも参加してまして、そのときもちょっと世代横断的にやったんですが、平井哲之さんというサルトルの翻訳者で有名な仏文学者の方もいました。「わだつみ会」活動を長くなさった方です。すでにおなくなりになっていますけど。それとアジア・アフリカ会議、もちろんベ平連もやりました栗原幸夫さんです。それと吉川さんと、それから京都大学で、今年定年退職になりました池田浩士と私の5人のシンポジウム、反戦運動のシンポジウムがありました。『派兵時代の反戦思想』（軌跡社）という本になっています。

そのときにですねえ、すでに僕はちょっとここで読んでいただければいいのですが、82年の反核フィーバー以降、市民運動というもの

はマスコミ受けする枠組みの中で自分ではまっていくというすごいマイナスな傾向を持ちだしているんじゃないかということにすごい危惧を感じると発言している。具体的に言うとこのときは、反原発運動がフィーバーしてしまってますね、チェルノブイリの後ですねえ、チェルノブイリの直後にフィーバーしたわけじゃないんですけど、食卓に放射能問題がのぼった時ですねえ、かなりのたくさんのニュー・ウェーブの運動がでてきて、相当広いたくさんの集まりの集会がもたれたんです。猛然ともものすごい数の公安刑事がその集会場の日比谷の野音の外なんかにはいっぱいいて、僕たちは私服刑事なんかをいろいろ事情聴取などをしたり、カメラをまわしたり、テープまわしたりしていれば当然抗議して騒ぎだしますよね。そういうことに僕達がとりかかると、運動の妨げになるからやめてくれとって、主催者が僕達の方を排除して、公安の人をそのままにしておく風景が、局面ですよ全部そうだったわけじゃないですけど、いくつかの場所でそういう局面がつくられてきたんです。私服刑事がなにをやっているのかわかっていないという人達にとっては当然のことだったかもしれませんが、そういう形で問題がいっぱい噴出して、市民問題というカテゴリーも僕はもともとあまり好きではありません。これはマスコミ用語ですから、基本的に、要するにメディアでとりあげられる運動、たとえば僕なんかの話でも新聞なんかでインタビューされているとき、肩書きは市民運動家になるわけです。僕は自称したことはほとんどないですけど。ただマスコミの方が作ったカテゴリーとしてはそうなっているわけですね。ですからそういう言い方になってきて、もともと市民運動としてあったようなものとは違った要素が出てきたんじゃないかということですね。その問題をも討論した記録です。このときも吉川さんに、じゃ天野はデモの時に突っ込ませて逮捕されるような方法がいいと言うのかと言われました。いやそんな酷いことはっておりません、というやりとりをここでしている記録をちょっといれてあります。あのですから小林君が言っているようなことは非常に難しいんです。その別に逮捕されたらいいなんて僕も思わないわけですけど、行動をどう規制するか、それをどうするかということですね。集会場の入り口ですねえ、ものすごい身体検査を僕達がやられるわけです。反天皇制運動なんてテーマそれ自体が「非国民」になっている奴はですね、ある時期は集会場に入るまで10発くらいは殴られるのがあたりまえというような集会を、ずっと機動隊に囲まれてボコボコってやつをやってきたわけですね。

そういう関係で体験してきた公安警察や機動隊や警察というものに

対する感じ方は、なんか彼らに人間性をとりもどしてほしいなんていうレベルではちょっとコミュニケーションできないものを体験としてずっと持ってきているのです。もちろん何をやってもよいかというものではもちろんないですけど。だからそういう体験もあり、そういう運動の中で警察がいろいろ、たとえば僕達の運動の中では警察官が一般市民を名乗って会員になりたいとって入ってきたときもあります。態度がおかしいから長くいたわけではないのですが、彼は私服刑事で、ずっと後に慶次の一群の中にその男を発見したという経験もあります。スパイ活動当たり前、そういう人達なわけですねえ。

僕は経験として何をいいたいのかといいますと、次ちょっと一番最後の奴を見ていただきたいんですけど、僕は70年代になってから『情況』という雑誌の編集にかんできました。74年10月号に爆弾事件で、爆弾犯とされた人達がほとんどでっちあげであるという事件について一覧表をつくった、一連のでっちあげ事件の特集をつくった。これ僕編集にかんできていた時代のものなんですが。「虚構と作為-70年代フレームアップの構造」という特集の中の表です。とにかくやっていないことをどんどんしゃべらされて、何人もの作られた自白調書を組み立ててですね、共犯関係を全部つくっていくんです、警察官が。取り調べている警察官や検察官は嘘をつかしているという自覚はあると思いますよ。ただこれは、法廷で弁護士や救援会などのいろいろな人の努力で、この後、ぼくもかんだ「土田邸・日石郵便局爆破、ピース缶爆弾事件」なんかはその件については事実上全部無罪になった。アリバイがボロボロでちゃう構造になった。いくつかの爆弾事件でいわれているものも、ものすごく犯人を適当につかまえてはかせて、どんどんそいつらにやらした話にしてしまう。まあやってもいない爆弾犯に自白しろっていても結構大変な話ですけど、そういうことは公安警察の日常であり、職業なんですねえ。僕はこれがまあある種の全共闘運動後にでてきた武装闘争路線の全体的な敗北過程にでてきた膨大なフレームアップ事件ですね。やってもいない奴をどんどん捕まえてやったことにして、事件としてたたきつぶしていっちゃう。その中の一つの事件の救援をかなり長くやりました。その過程で、公安警察は本当にどんなことでもするんだなあ、だってこれ死刑の求刑まででているんですよ、だから、死刑で殺しちまってもいいという実際にやってもいない奴を、そういうことをやる人達なんですね。やっぱり公安秩序を維持する人達は。そういう政治目的をもって動いている人。このことをとりあえず僕は、体験としてお伝えしておきたいと思ひましてこれを入

れておきました。

それから次にですね、僕の友人が二人、右翼に殺されているんですが、右翼暴力団に殺されたっていうとなんかわかった気持ちになる話かもしれませんが、実際はよせ場なんか右翼の暴力は公安のリークで動いている。公安警察がやれといわせて、やれという構造を作って殺しています。山岡さんが最初に殺された佐藤が殺されたとき、公安にやられた、そういうことを明らかにしていた上で、彼自身も殺された。山岡の時もそうだった。日々家に帰るような人生を送っていないわけですから、いつどこで寝ているかわかんないんですね、山岡の場合は。ところがある日突然、そこに確実にいるというのは右翼の人がわかるんじゃないくて、公安の方は仕事ですから調査能力があるんです。情報を流して先導しているということは日常的にある。よせ場の場合、日雇い労働者の世界の場合は暴力団の暴力が剥き出しの社会ですから、その暴力をつかっているいろいろめんどくさいことを処置するっていう、そういうことはいっぱいあるわけですよ。山谷のリーダーが山岡だって暴力団に紹介したのは公安だった事実があります。それは公安警察の任務なんですね。そういうふうに彼らは存在していて確かに人間性は壊れていると思いますが、どうやって対応していくか、そういう状況にどういう人達とどんなつきあいが可能かといえ、よっぽど警戒しなければやっぱりいけないんじゃないかなあっていいたくて、この山谷の虐殺に関する後のレポートを入れておきました。公安も人間だというのは分からなくもないけど、そんな気持ちよくいかないんです。向こうはお金もいっぱいもっていて、時間もいっぱいもっていてやりたい放題な人達なわけでしょ。そのことを、僕は自分の体験に則してちょっと伝えておきたかった。

もう一つは一番最後にこれは僕の反天皇制運動連絡会たニュースに書いたものです。女性国際戦犯法廷の時の体験をちょっと知っていたためにこれを。これは松井やよりさんの追悼で書いた文章です。場所が九段会館だったこともあって当然右翼の人も膨大に来て、いろんな介入をしてきました。そこは自分たちのホーム・グラウンドだと思っているわけでしょうから。そのときにですね、右翼の暴力というのはたいしたことしなかったんです。実際は。公安が持ってくる情報というのがすさまじかった。もう殴りこんでくるから裏にまわれ、裏口を出入り口に変えろっていつてきて。主催者の女性たちは、警備を警察に依頼をしていますから、入り口を変えちゃったわけです。ところが裏口というのは売店になっていて、民

間人が誰でも入れる場所なんです。表口の駐車場というのは、管理責任者九段会館が拒否すれば右翼の車は入れないことになっていたのですが、裏口になることによってどんどん右翼が売店にものを買うような顔をして入りこんできて、とても整備できない事態になって、このままいくと完全にトラブルがおきて、集会が潰されちゃうなと思ったんで、僕は少々越権行為だったんですけど、九段会館の責任者と話をして出入り口を表に全部もどしたんです。それを絶対裏口にしろって指示を出したのが、右翼がガンガンせめてくるから絶対裏口じゃなきゃ安全じゃないと言っていたのは、2日間言いつづけていたのは公安刑事です。実際その日も右翼はきませんでしたし、そういうなんていうんですか、右翼がつぶしにきたのではなくて、公安がつぶさせようとした経緯があります。それを僕はその場でずっと、朝から晩まで現場にいましたから、ものすごくたくさんの方がいっしょに、何百人がいっしょのところまでガードに立っただんですけど、その中にいましたから、僕もよく覚えています。公安刑事というのはそういう人達なんです。建前はともかくとしてですね、そういう政治警察はそういうことをずっとやりつづけている。

マスメディアは爆弾フレームアップ事件の時などは、悪魔の爆弾犯というように一面のトップでガンガン報道しまくっていたわけで、警察とマスコミは組んでそういうムードをつくっているというシステムだったわけですね。マスコミもフレームアップに協力した。だから、マスコミにうけるというか、マスコミにのるという運動の広がりが必要だという主張を一般的に全否定する気はまったくないですけど、非常にそこは難しい問題を内包している。だからそういうこうメジャーへの上昇志向というのは、運動をだめにしてしまうという点もあると思う。その点はちゃんと考えなければならない。僕らは、こういう問題は国家権力との関係でずっと考えざるをえなかった。

ベ平連の話に最後戻します。吉川さんに怒られるといけませんから。では実にそういう反権力主義で警察との関係に緊張感をもってきちんとやれということは、運動の中で僕たちに身をもって教えてくれたのはもちろん吉川さんとも関係が深い、福富節男さんです。例えば僕は何度も福富さんとデモ申請にいきました。デモのときの機動隊の指揮官車が入り込んできた時など、絶対やつらの越権行為をゆるさない、具体的な場所で絶対ゆるさない、僕達が当然持っている権利をきちっと維持し、具体的な場所で行使していく。そういうことの積み上げの中である種の運動文化をつくらなければならない

い、それを福富さんなんかには教えられ、共に作ってきた、そういう記憶があります。ですから福富さんも元ベ平連ですから、ベ平連の文化の中に脈々とあったものを僕達は共有してきたという記憶もちろんです。栗原幸夫(*2)さんも、元ベ平連です。長く反天皇制運動につきあっていただいているわけですが。ですからそういう流れでいっしょにやってきた、僕はそうした反権力という旗をおろさない。それを捨ててはどのようなものでもないかという運動の文化を共に生きてきた。この間も僕たちはデモをやっています。抗議している。最初にもいいましたが、権力のやり口の酷さに、政府のやり口の酷さに具体的に、政治的に抗議をする行動をずっとやってきたんです。それはもうデモンストレーション以外のものはないです。それはそういう具体的な運動文化の中をくぐって培われてきたものだから、僕は非常に大切にしたいと思っています。言葉を大切にしたいんじゃないで、その中身です。作りだしてきた中身です。そのことを強調しておきたい。すいません。」

[>>次へ](#)

*1 開高健 ベ平連ではニューヨークタイムスへの意見広告運動などを行った。

*2 栗原幸夫 公式ページは[こちら](#)。

[>>次へ](#)

TOP	開会前	問題提起1 (吉川勇一)	問題提起2 (小林一朗)
問題提起3 (天野恵一)	問題提起4 (小林正弥)	討論1	
討論2			

TOP	開会前	問題提起1 (吉川勇一)	問題提起2 (小林一朗)
	問題提起3 (天野恵一)	問題提起4 (小林正弥)	討論1
	討論2		

問題提起4



小林正弥

「自己紹介がてら言っておきますと、私はここ数年間、公共哲学という知的な学問的運動を中心に活動してまいりましたが、9月11日以降平和問題の重要性を考えて、特に平和問題に集中しています。はじめは研究者の間で大きな会議を行い本として編集することからはじまって、特に去年の後半からは市民の方々と連携を進めて「地球平和公共ネットワーク」の活動に力を入れております。まあ公共哲学の一つの大きな課題として、いろいろな学問の分野がばらばらに分断されていると、大きな問題を考えることはできません。そこで、この「蛸壺化」を打破するということを目的にしています。しかし最近平和問題と関わるにつれて感じたこととして、研究者と市民の間とか、あるいは市民運動と市民運動の間もかなり「蛸壺化」しており、断絶があるということを感じたのです。そこで、この平和公共哲学研究会というものをつい最近作って、今日はその第2回目です。今回は吉川さんの問題提起で、吉川さん自身が「平和運動に運動論が足りない、議論が足りない」ということを仰っているので、その意味では私の感じていることとその点は共通するので、今回の企画を考えました。公共哲学の中では、ジェネラティビティー（世代継承生性）という、エリクソンという心理学者が提起した概念を最近強調しております。エリクソンは所謂アイデンティティという概念で有名なわけですが、彼はアイデンティティの後の段階として、ジェネラティビティーを考えました。世代間の関係として、「前の世代が次の世代にどう受け継がせるか、次世代をどう育てるか、次世代にどう貢献するか」ということです。私もこれを重要な問題提起だと思っているのですけれども、今回のテーマである、世代間の平和運動という問題はこのジェネラティビティーという角度から考えることが出来るのではないかと、思ってサブタイトルを考えました。

公共哲学に於いては、「運動の場に限らず、社会の全ての場におい

て議論を行う公共的な空間、公共圏が必要である」ということを主張していますので、その意味では、平和運動においても公共哲学的なアプローチに意味があるということになるだろうと思って、今回こういう企画を考えた訳です。

とくに9月11日以降、そしてまた、おそらく数年は平和運動にコミットせざるをえないと私は思っています。なぜなら、ご存知のように、とくに9月11日以降加速しておりますけれども2005年から6年に2大政党で改憲案が出ることになっており、その後改憲の発議と国民投票が起こりうる。憲法の改正によって9条2項の削除というような平和主義の廃止が行なわれうる。タカ派はこれをタイムテーブルに載せていて、私達はそれを前提に行動すべきだと思っています。

この時を私は「天下分け目の関が原の戦い」といっているのですけれども、仮に何回か憲法改正の発議があるとしても、「大阪冬の陣」「夏の陣」みたいなもので、段々外堀から埋められて最後は内堀も埋め立てられ、平和主義全体の廃絶が企てられるでしょう。ですから私はそういう危機の時代だと思っています。もちろんイラク戦が既に起こっていますし、それからここ2、3日では緊急度の高い事態が生じていましたけれども、このような状態が数年レベルで続くと思うんですね。憲法政治という概念がありますが、「通常政治」とは違う「憲法政治」に突入しつつあります。つまり、今の日本の状態は危機事態なので、運動にしても、あるいは運動と関わる研究者のありかたにしても、それを前提にして考えなくてはいいと思います。

時折、特に戦争体験をお持ちの高齢の方とお話しすると、絶望感を持っておられる方が多く、気持ちはあっても「どう動いたらいいか、どうしたらいいか」という突破口が見いだせず、動けなくなっている人が非常に多いんですね。私はやはり、行動する以上はですね、「絶望感の下で負けるかもしれないけれども、やるべきことをやっけて行こう」というのではなくて、本当にこの戦いで勝てるようなあり方を研究者と運動のレベルと両方で協力して作るべきだと思います。ですからその意味でですね、これからする議論は、ある意味では既存の平和主義の方々の神経を逆なでする部分があると思うんですけども、私の意図としては、この危機事態にアプローチをかける必要があるということをお伝えしたいのです。

危機が終わって、平和主義を再確立した後、「さらに発展させるた

めにまたもとのアプローチに戻す」ということは、一向に構わないと思うんですよ。そういう意味では、加害責任をはじめ過去の運動の最高の思想的成果も、一時的に諦めて、運動を思想的レベルでは30年、40年後退させて、勝負しなければいけないかもしれない。こう問題提起したいと思うんです。何故かと言うとですね、先ほど小林一郎さんが仰しゃられたように、私も、PRというのはパブリック・リレーションであり、実はパブリックフィロソフィーと同じパブリックであって、この関係は密接だ、ということに気がついたんです。

パブリックフィロソフィーは、公共的に多くの人々に共有される哲学ということで、ある程度わかりやすく人々が共有すべき思想を意味していますけれども、まさに運動となるともっと自覚が高まって、公共的關係を考えなくてははいけません。だから、思想レベルあるいは学問レベルで、あるいは関心のある人の範囲での議論の立て方と、一般の市民に対してリレーションを考えてアピールする場合のアプローチとでは、やはり分けるべきだと思うのです。もちろんこの二つが矛盾してはならず、当然ながら関連があるべきなんですけれども、同一視はしないで分けた上で關係を考えて、「パブリックリレーションはどうあるべきか」ということを考えるべきだと思います。例えば私は研究者として言いたいことも、パブリックリレーションを考える場合には抑制せざるを得ないことも在るのですね。

今回の討論会の組み立てにあたって、「果たしてこれは世代間対立か」という、議論が様々なところからあります。実際の運動をしている人の中では、「非常に激しい運動をしたい」「これだけ権力がひどいんだから徹底してやるべきだ」という人が若い世代の人の中にもいるわけです。けれども、問題はですね、「どういう層にたいして訴えようか」ということだと私は思います。つまり、かつての「ベ平連」あるいは「全共闘」の世代の運動が対象としていたその世代の人々と、例えば「チャンス」のような、9月11日以降出てきた若い人達が訴えようとしている若い同世代の人達の意識や考え方が決定的に違っているのです。私はこれは否定し難い事実だと思いますね。ですから、パブリックリレーションという観点からすれば、それが運動の組み立て・態度に大きく反映するだろうと思います。私は研究者ですから、そういった活動をしている方々のアプローチをみながら「なるほどそうせざるを得ないのかな」というふうに思いつつ、それを促進し、エンカレッジしたい、というふうに考えています。そこで、例えば「アート・オブ・ピース」（平和の

技、平和の技術・芸術)といった概念を用いた、平和運動のアプローチを身近なグループ(足の裏で憲法第9条の会)で提唱しています。

しかし、パブリックレーションとの関係も踏まえて、パブリックフィロソフィーとして、思想として考えた場合には、やはりもう少し考えなくてはいけない部分もあるだろうと思います。今日は吉川さんや天野さんのような非常に重要な役割を果たされている方々をお迎えしているので、思想のレベルでも少し話してみたいと私は思っています。例えば現在のように平和主義が私はかなり追い込まれており、ほっといたらこれはもう負けざるをえないような状況まで来ていると思うんですけども、「なぜそうなっているのか」というふうに考えてみれば、それはやはり平和運動の分裂の問題も大きいし、あるいは思想の内容において、昔は左翼思想と主に平和運動が盛り上がったわけですけれども、左翼思想の衰退という問題。それから、暴力の問題。それから、戦争体験の世代交代の問題。理想主義のあり方の問題。それから、反権力という自己規定の問題。こういった問題が様々な形で複合して今日の事態を招いているということも見つめなくちゃいけないんじゃないか、というふうに思っているわけです。

「どういふふうに考えるべきか、どういふふうにすべきか」ということなんですけれども、3の項目で、先ほど小林一朗さんの言われたところでは若い人は嫌っている「希望」という言葉をあえて使っています。凄くラフに「なんでこんなに平和主義が追い詰められているか」と言えば、従来の護憲平和運動の担い手が高齢化したために若い世代とか、あまり平和問題に関心がない人から見ると、「平和運動が古い運動で、タカ派が言っている主張の方が新しい」という誤ったイメージが出来てしまった。単純な話ですが、これは決定的に大きいのではないかと私は思っています。これは論理的には嘘でして、人類史からみれば、戦争はずーとやってきたことで、それに対して平和主義は新しくて、戦後それを日本は打ち立てたわけですけれども、なんとなく、中心の人が高齢化しているというだけのことによってイメージがひっくり返った。この問題が実は大きいのではないかと思います。それから政治家の方も、やはり「自分たちが新しいことをやりたい」という志があるのかもしれないけれども、それは従来の平和主義の成果を手放すことになります。タカ派的な政策にもっていくことが悪い意味での使命感になってしまっているのではないかと思います。戦前に革新派というのはタカ派だったわけ

ですね。戦後に革新が平和派にかわった訳です。私はもう一回「革新」がタカ派に戻ったという感じではないかと思うんですね。で、研究者として論理的にそれを批判することは簡単ですけども、運動として考える場合には、イメージとしてこれを転換していく必要があるだろうと思います。つまり、「より若い新しい世代が新しい平和運動を作る」というイメージも作らないと、論理的批判だけでは間に合わないと思います。研究者としては、論理的批判を行うのは容易で、雑誌や新聞に論評するというだけでよければ、こんなに簡単なことはないのですけれども、平和運動の方々と協力して道を切り開かざるを得ないという気持ちになっているのは、この状況を逆転するためには研究者だけでは不十分だと思うからです。若い人達と話して、よく感じるのは、やっぱり「平和運動のイメージが暗い」ということですね。ですから、「反対だけの運動はしたくない」ということを言っている人が多いのです。戦争責任論や加害責任を強調しているし、昔は運動の内部に内ゲバなどの暴力問題があったというわけですね。実体はもちろんそれだけではないのですが、そういったイメージがあることは事実です。これに対して、若い人達は、「明るいイメージが良いんだ」と言う人が多いのです。「希望」という言葉は嫌いという若者も多いかもしれませんが、私はそういう明るいイメージの方が若い人には訴えやすい、と思っているんです。WPNのホームページなどを見てもそうだと思いますけれども、インターネットの世界を見ると、そういう雰囲気のある運動が多いような気がします。9月11日以降、あまり過去の経緯は知らず深い知識も無しに、「平和は大事だ」と思って動き始めている人はそういうイメージを持っている場合が多いような気がします。そこで、私は友愛とか光とか喜び、それから内面的平和といった概念を強調しているわけなんですね。かつての「反戦」という表現を「非戦」という表現で置き直したりしています。

それから、「反対運動ばかりではなく、対案を示さなくてはいけない」という主張が近年は強力ですが、その「対案」が権力側の政策と非常に似たものになってしまっています。だから現実主義が権力追認になっているという問題があると思いますね。例えば誘拐事件で人命が危険にさらされても撤兵を要求できないという民主党の考え方はとんでもないものだと思うのです。対案こそ撤兵ですよ。

もっと大きな物語や理念をふまえたような明るい希望の運動を構築することが大事だと思います。「もう一つの世界」という言葉がワールドソーシャルフォーラムでスローガンになっています。そう

いった概念や中身には色々なイメージがあっただけいいと思いますけれども、運動の成果あるいは夢として、今の世界とは別の新しい世界が出来るという展望が大事だろうと思います。これを語らないと逆転できないだろう、と私は思います。

もちろんその反面では、暗くとも見つめなくてはいけないもの、権力の問題はあるわけですが、2段階のアプローチをとったかどうかと思うのです。つまり全く知らない人に対して一般的にアプローチする時には、あまり暗いイメージのことを強調するよりも、WPNなどでピースパレードなどと言うように、イメージとして、分かりやすく入りやすいものにするのはいいことです。初めて平和問題に関心をもってデモに出掛けてみると、いきなり官憲とぶつかって逮捕されるということになってしまえば、「もう二度と行きたくない」と感じる市民が今ではほとんどだと思いますね。そうならないようなデモのあり方を、やはり開催者に工夫してもらわないと、知人ですら誘えないということになりますね。だけれども、他方で、運動にコミットしておられる人は、当然ながら、もっと深い深刻な問題を追求するべきだし、もっと徹底して戦わなくてはならないということもあるだろうと思います。その意味では、一般向けのアプローチとそれから奥行きとして非常に深いものと、両方あってしかるべきでしょうし、分業関係のようなものがあるといいだろうと思います。

ですから、今日は主題が「デモかパレード、ピースウォークか？」で、小林一朗さんは「パレードは問題だ」と仰ったんですけれども、私はさらに極端な立場として、「パレードでもいいではないか」と言いたいのです。他方で、もちろんそれだけではないのは当然で、私も研究者として「ぜひ深い議論をしたい」という気持ちもありますので、研究会あるいは講演会といったような深い議論の場を設けようと思うんですけれども、一般向けのアプローチとは一応区別しておいたほうが良いか、というように思っています。

これは、吉川さんから批判された、戦争責任問題についての一つの問題提起とも関連しています。時間の関係で端折りますけれども、去年の12月に私が話して、吉川さんがホームページで批判された内容というのは、私は自衛隊がイラクに派兵されるということに反対する理由として、「日本の中でテロが起こるかもしれない。自衛隊がもしかしたら、被害にあうかもしれない。今回まさに危険があっ

たように日本の民間人が誘拐されるかもしれない。」と述べたのです。「日本人が被害にあうかもしれない」という点を正面から述べるべきだと思うし、広島・長崎の原爆の被害ということも強調していいと思うのです。もちろん加害責任の問題も大事だと思いますよ。自衛隊がイラクの人々を殺すかもしれないわけですから、この場合は加害者になるわけですね。直接殺さなくても、日本の知識人は政府の政策を支持することによって、間接的には戦争の加害に加担していますから、そこには戦争責任、あるいは戦争加担責任があると思います。知識人ないし研究者としては、そういう戦争加担をしている知識人や研究者に対して厳しく批判をするべきだと思います。しかも、第二次世界大戦についてというよりも、いま進行中の世界戦争について、まさに人が死につつある状況について追求すべきだ、というふうに私は思っているわけです。第二次世界大戦の経験は現在の問題を理解し考えるためには非常に生きる経験であると思います。しかし、やはり若いひとの意識一般に対して訴えかけるのは現在進行中の戦争であるので、そこに焦点をあわせる形で議論を組み立てる、あるいは運動を組み立てるということが大事ではないか、と考えています。

戦争責任問題に関しては、理論的なレベルでも議論することが出来ます。もちろん「日本に戦争責任がある、加害者責任がある」ということは当然そうだと思いますし、その自覚を深めてきたのが戦後の平和運動の進展だと思うんですけども、第二次世界大戦に直接コミットしていない、あるいはそのとき生まれていない人達、ごく最近生まれた人達にいきなりその戦争責任を訴えてもなかなか伝わらない、ということを見聞することがあります。そこで、責任問題に関しては、「どういう責任か」ということを理論的に細かく考えたほうが良いと思いますね。つまり個人責任という観点から考えると、実際に第二次世界大戦に責任があった人と、個人責任は存在しない若い人とがあると思いますね。第二次世界大戦前に生まれた人の間でも、直接戦争に加担してそれを促進した人と、不作為で黙っていた人とは責任が違うと思いますね。そういったような区別もあるでしょう。しかしながらそれを踏まえて、日本人あるいは日本という全体としては集団的責任があるからこそ、政治的責任としての戦争責任を考えなくてはならない。こういうふうに議論のレベルを分節化していくべきだろう、というふうに思っています。いずれにしても、加害にしても被害にしても、人は死ぬということ。この悲惨さが平和主義の原点であると思います。まさに、その犠牲がアフガンとイラクに生じ、日本も犠牲を生むかもしれないし、逆に犠牲

を作り出す危険が生まれている。だからこそ、人命の尊厳や生命への畏敬というところから議論を組み立てなおすこと、アプローチをかえる事が大事だと思っているのです。

主題のデモということに関しては、私は決して違和感はなく、2001年の年末に千葉大で大規模な地球的平和問題会議を開き、「これは学者のデモの一形態だ」というふうに言いました。デモンストレーションの語源というのは、意思表示、意思表明になります。ですから学者がデモをするというのは必ずしも街頭で立つだけではなくて、徹底して議論して政府あるいは戦争を批判する言論を行ない、あとで書物や雑誌にまとめるということも一つのデモンストレーションであると思うのです。その後、われわれは様々な声明を出したのですが、今日では声明では社会的インパクトは不十分と思われるので、平和運動との連携を進めつつ現在に至ります。

パレードというのは、実は、日本の民衆史、あるいは社会運動史を考えてみると類例を思いつきます。例えば幕末の「エエじゃないか踊り」はパレードなんですよ。地球平和公共ネットワークの発起人の一人である、鎌田東二という神道の研究者は、祭りという神道的な文化との関係を意識していて、その祭りの発想を非戦運動の中で展開しようとしています。その発想に教えられる所があって、そこから「アート・オブ・ピース」という観念を考えたわけなんですよ。私はこのアプローチがベストと思っているわけでは必ずしもありません。幕末の時に盛り上がったエエじゃないか踊りが、明治維新以後にどうなったか、という問題を考えてみれば明らかだと思います。ですから思想的に十分であったとか、継続性において十分だったとは全然思わないんですけども、危機事態の時に、日本ではそういう形で盛り上がるという現象もある。これはやはり、社会運動史、民衆運動史という観点からは見ておくべきことだと思います。そういったことを見れば、現在のこの危機的な側面、とくに、この平和主義の廃絶という危機において、そういう形で盛り上げようという若い人がいるのは私は嬉しいことだと思うのです。「この盛り上がる力をいかに促進する形で全体の運動の盛り上がりにつなげて行くか」ということを、研究者としては考えるべきだと思います。その意味では、ピースパレードという言葉を使ってもいいので、是非頑張ってもらいたいというふうにエンカレッジしたいわけです。

最後に、吉川さんから、「過去の平和運動をどう考えているか」と

という問いがありました。吉川さんの本などを読みながら考えたわけですが、読みながら面白いと思ったのは、ベ平連は当時色々批判を受けたこともあるようですけども、そのときの批判が、今の若い世代の運動に対する批判と似ている、という気がしますね。その意味では、段々歴史が進展しながら、同じような問題が、上の世代や別なアプローチから批判されているのか、という感じがありません。ですから、時間の関係で中身について立ち入るのは止めますけども、ベ平連やその後の運動の成果を若い世代も継承しながらさらに発展させていくことができるのではないではないでしょうか。今日お話しになった共同行動の原則などというのは、我々が「平和の結集」などで考えていることに非常に近いと思えるので、まさに関連付けられるのではないか、という気がしますね。

ジェネラティビティーという観点においては、世代間の継承と共に、生成発展を重視しています。つまり、時代の展開の中には、良い展開もあり悪い展開もありますけども、変化しなくてはいけない面もある。変化しなくてはいけない面としては、例えば思想的問題があるでしょう。例えばマルクス主義に代わる思想を考える必要があります。我々は公共哲学を提唱しています。あるいは暴力問題をどう克服するかという問題。これは、最大の問題だと思うんですね。私は「和戦」という言葉を使っています。平和の問題を「外的平和」だけではなくて、「内的平和」、平安という問題として、どのように展開させるか。

分裂問題。それから理想主義的現実主義の問題。例えば吉川さんが先ほど仰って議論されたように、自衛隊についての憲法解釈問題について、憲法解釈の転換を私は提議しています。それから、権力との問題に関しても、同じように考えるべきだと思っています。反対を行うだけではなくて、どういう新しい権力を構成するか、ということもやはり思想の中で考えておくべきことだ、と思いますね。

警察問題が非常に先鋭的な問題として出てきているわけですが、学者の問題としてはこれは官僚との関係の問題とも近い部分があると思いますね。接触すれば、結局御用学者になる危険が高いので、「官僚とは一切接触すべきではない」というのも一つの考え方です。他方、「官僚と接触することによって情報を得たり、批判の材料とする」というアプローチもあります。こういった権力一般との関わりという一般的な問題の極限的なケースとして、警察問題があるのだらうと思います。最後に、今日の議論を通じて、世代を超

えた、特に危機時点における「平和の結集」につなげたいと希望していますので、「そういった新しい議論が続くことを願っている」ということを申し上げて終わりにしたいと思います。」



岡本厚

「ありがとうございました。4人のパネリストの報告をこれで終わります。様々な議論が出ました。非常に面白いですね。例えば権力というものをどう捉えるか。それから平和運動そのもの、何のためにやるのか、あるいはどういう方法でやるのか、どういうふうに広げて言ったらいいのか、そういう論点が出てきたと思います。ここで休憩をとります。」

[>>次へ](#)

TOP	開会前	問題提起1 (吉川勇一)	問題提起2 (小林一朗)
	問題提起3 (天野恵一)	問題提起4 (小林正弥)	討論1
	討論2		

TOP	開会前	問題提起1 (吉川勇一)
問題提起2 (小林一朗)		
問題提起3 (天野恵一)		問題提起4 (小林正弥)
	討論1	討論2

討論1



岡本厚

「再開します。このセクションはパネリスト間の議論をしたいと思います。始める前に、人質の3人は釈放されたという情報が入りました。まだ詳しいことはわかりませんが。日本政府のあの非情さと、無能力さに怒りを禁じることは出来ませんが、とにかく良かったと思います。

天野さんがあと15分くらいで出られるということですので、最初に天野さんのほうに私のから質問する形で進めたいと思います。

第一の論点として、権力をどう捉えるかという問題があると思います。吉川さん、天野さんからは権力の恐ろしさを、実際のご経験から指摘されました。若い人たちは経験がないからだけれども、非常に甘いんじゃないか、と。それに対して、小林一朗さんのほうからは、権力は変えていけるんじゃないか、権力もつきあう中で人間的、人間性を取り戻していくことも出来るんじゃないかと言われました。この辺りは、大事な論点です。私から伺いたいのは、天野さんは権力というものは非常に恐ろしいものであり、警戒すべきものであるといわれるのだけれど、とすると権力というものは打倒の対象であり、あるいは敵である、とご覧になっているのではないかと。そして、その権力観の延長線上には、社会主義と言うものが措定されていたのではないかと、ということです。そして権力の抑圧に対しては暴力で対抗することもありうるんだということ、これは60年代から70年代のはじめくらいまでは、当然のように語られていたわけが、その暴力というものが、世代間の空白といえますか、断絶が起きてしまった大きな要因になったのではないかと、ということです。

果たして権力というのを敵と捉えていいのかどうか、一朗さんたち

は「構造」、あるいは「関係」として捉えているような感じがします。例えば自衛隊は権力の最大の暴力装置であるわけですがけれども、今回、自衛隊をイラクに送るにあたっては、やっぱり自衛隊の人たちも人間ではないかと、あの人たちを殺してはならないんじゃないかという議論が相当出てきた。それは権力をどう捉えるかという問題と関わりますね。警察の問題にしても、警察にもっとも打撃を与えたのは、対抗する暴力ではなくて、むしろオンブズマンの人たちが不正経理を暴露したことだったんじゃないかと思えます。そのあたりについて、天野さんどう考えられるでしょうか。」



天野恵一

「えーと、僕年齢から言って定型的なイメージで世代でくくられるのは一番まずくてですね、僕はその定型から相当ずれた人間ですので、あの、暴力の時代を生きてなかったか、というと、時代全体がそれこそ、そういう感じの時代を生きてましたから。全然外にいたわけでは全くありませんからそうですけど。僕は内ゲバについては、止めたことはいっぱいあります。止めることで血を流したことはありますけれども、関わりそうになったときもない訳じゃないですけども、実際に、そういうことと言えばわりと、ものすごく少数でした、その時代でも。そういう当たり前のことをやってる人は非常に少なかったんです。そういう経験からいってもその、暴力的な運動にすごく一般的にですね、共感してたかって言われると、僕自身はちょっと違うっていう感じがすごくします。それと権力の問題で言いますと、例えば、今仰ったようなことはですね、例えば埴谷雄高という人が、まあ、60年安保の後から読まれた近代文学家の人ですが、要するにその、革命の問題っていうのは制度の変革の問題であってですね、要するに殺し殺される敵対関係を、シュミットの政治概念でやるものではないというテーゼを出して、それはそれで、僕達も非常に影響を受けてよんだ記憶があります。ですから、その機動隊まで含めて要するに人間的コミュニケーションをして向こうにいるものをこちに獲得することが革命だと、20世紀の革命の意義はそういうことだという、そういう政治哲学を、延々お書きになってスターリン以降の文脈で書いた人が、既に亡くなってますけどね。そういう人たちの知的な影響もあったわけなんですけど、まあ彼はアナキストだった訳ですけど。そういう非暴力主義的な発想の哲学って言うのもあの時代にも非常にたくさんあってですね、別段暴力一元主義的に考えていたわけじゃないです、ただし、ただ

し僕は埴谷さんのテーゼを含めてですけれども、敵は制度だといっても制度を支えているのは人間ですから、人間が制度を機能させて維持させている訳ですから、人間と人間との対立は不可避です。ですから敵味方関係も、あの、嫌いだといっても、そういう問題はあるわけですね。ある問題についてどうするのかということ自体の問いかけまで、そこで消滅させるわけにはいかないというふうに昔から思っておりました。

ですから、暴力をめぐる問題っていうのも、どういうスタンスで、どういう立場でどういう時代の中で考えてきたかっていうことはですね、かなり、個人差がいっぱいあると思います。だから、僕は僕自身の立場で今、言っていることはそういうことです。ですから別に僕は権力が敵だとは思わなかったのかといたらそれは思ってます。いや、思っていましたし、今でも思ってます。それは、はっきりした敵味方関係にあると思ってます。向こうも、そう思ってるでしょうけど、それはもう致し方なくそうです。そういう現実を生きていること自体を自覚しないで運動は出来ないと思っています。ただ敵だから殲滅するほかないと思っているわけでは全然ありません。ただ、だけどその変えるといったときに一体どういう関係で具体的な、関係の中で変えるなんてそんな大それたことがどのように、可能なのかっていうのは、そんなに簡単には全然いかないと思っただけですね。

ですから、自衛隊の問題の関係でいってもこの間本当に派兵が進んでしまって、戦地に自衛隊員、軍人が出てくっていう時代になったわけですから、本当にその軍人の家族や本人の命を心配する人たちが具体的に出てきた、で、そういう状況にむしろ派兵に反対する平和運動がそういう人たちに働きかけるためのいろんな運動が始まったわけですね、それは全国的に始まったわけです、でそれは非常に大切な運動だと思います。それは、前にダグラス・ラミスさんがずっと、アメリカ人に働きかけることを今でもやっています、ベトナム反戦運動からずっとやって、で、彼が言っていました。要するにベトナム戦争を止めたのはトップのエリートの政策転換で止まったわけでは全然なくて、米兵がいっぱい人を殺しすぎちゃったというのがですね、自分の精神壊しちゃったり、厭戦感情が充満して、アメリカの兵隊に直接働きかけて、彼らが戦場で使い物にならない規模に精神にさせてくってことがどーっと拡大した時に、本当にベトナム戦争が終わったと、だから兵隊に働きかける運動は非常に大切だというふうにラミスさんはいいました。僕は、そのことは今、い

ろんな各地でやっている人たちは実感していることだと思います。これは、自衛隊の官宿舎に3人でピザを入れたら、それが逮捕されてるってのはとんでもない事態ですけども、逆にこれが表現してるってのは権力にとっても自衛隊の士気が非常に後退したっていう、防衛庁のほうはですね、そういう結果だと。要するにピザのメニューなんて毎日、事務所の回りに入っているわけですね、ピザ屋さんが逮捕されるなんてないわけで。僕のところなんて産経新聞の見本誌なんて毎日入ってますよ、あれ、買いたくないから、僕は、割とあの助かってますけどね。あの、ただで読めるわけだから。だけど産経新聞が逮捕されるなんて聞いたことないですよ。で、そういうことを平気でやってきてるってことは裏表の関係でやっぱりそういう運動が持つ力に対する恐怖ってのが、やっぱり向こうにあると。思うわけなんですよ、で、広がってきてるってのは具体的に自衛隊員と対話してく、働きかけていく、並行的な関係で言葉を交わしていくってことは非常に大切だと思います。

ただ、僕は今、今の、もうちょっと別のことを言いたいのは、ただ日本人の兵隊の命だけを慮る論理をそのことだけ一般的にいえる状況ではもう既に無くなっていると思います。そしたら、僕達心配してるのはやっぱりイラクの人を殺しちゃうんじゃないかということ、が僕は一番、特に自衛隊の人に友人いませんので、あの、本当に抽象的な心配しかないわけですよ。具体的な心配ってのはもてないという関係で、抽象的に心配するんだったら僕はイラクの人達を殺してしまうことを抽象的に心配します。どちらが心配かというふうに言われれば。そっちのほうを優先的に考えるべきであって、殺すなっていうほうから殺されるなっていう方にいきたいと思えますね。殺されるな殺すなって日本人だからって言うような話だけはちょっと止めたいと言う、そういうような気分はあります。ただ、そういう条件をつけた上で僕は色々協力して、外から協力してきましたけど。そういう、実際に制度の内側にいる人達、当の暴力装置そのものの人達自体が変わっていくと言うことがなければ、世の中が本当に変わっていくってことはないと思っています。」



岡本厚

「では次に一郎さんどうぞ。」



小林一郎

「ひとまず1点だけにします。僕自身はそんなに簡単に警察って変わるって思っていないですね。以前、埼玉の狭山市に住んでたんですけども、ちょうど私が勤めてたすぐ前のところに、あの石川さん事件の事務局をやった方の家がありました。そのお宅にチラシ撒きに、ポストにチラシ入れにいったんです。そしたらそこに事件のことが書いてあって、何のことかわからなくて行政の人に聞いたら、口つぐむんですよね。で、たまたま、あの狭山にいたってのもあって、知ることが出来たわけですけど。そういう横暴が行なわれてきたって事を把握してないわけではありません。ただ実感してるかって言えば、多分お話にならないくらい実感してないのは事実だと思っています。これをどう埋めていくかって言う所はやはり非常にこう、知恵をめぐらさなきゃなんないなと。

今日、吉川さんと天野さんに僕から突きつけたかったのは、あの、伝える努力ってのはどういうものをしてきたのか、という点ですね。継承されてないこと、伝わっていないことは解ります。それをどうすれば、例えば僕なんかは、まだ比較的伝わりやすい位置にいる人間だと思いますけれども、もし、その人間にすら伝わらなければ、その外の人間にはまず無理ですよ。

だけど、そう思う一方で、先ほどの天野さんのお話をお伺いすると、やっぱり地道に小さい、小さいっていうかな、運動としては、そんなに広がらなくても続けなくてはならない、きついものだよなあってことを感じるわけですね。だから僕自身がこう、ジレンマになっていきます。すいません、なんか脱線しちゃいましたけど。警察についてですが、構造的に捉えているっていうお話もありましたけども、むしろ、僕はやりたいと思うのは、そのときに来た人間とどう向き合うかということをやっぱりやりたくて。この間、イスラエル大使館前に行きましたけれども、あそこにいた警官たちは、みんな目が釣りあがってましたよね。それで、僕が通りがけると無線で「あいつがきた」みたいなやりとりがされるのが見えて。チャンスなんかは、まだターゲットになってなかったと思いますけど、だから最初は公安調査庁の人達ってなんか、僕らがマイクで喋ってるメモとって威嚇してました。どっちに振れていくかってのを見に来たぐらいだろうなあと思います。次第に全然来なくなった。イスラエル大使館前では、もう、あの、到底話が出来るような状況ではなかったですけども、最初にピースウォークやったときに来た人達ってのは、まあ、多分そんなに気にせずに、こいつらを利用できると思ったかもしれないけど、僕はどういうスタンスで警察の人が

いつも来てんだかいまいちわからなかった。

食事のこと、食事にいったってことがいるなところで話題に上ってしまいました。個人的には僕はこれには反対していましたが、でも、まあ、結局いくことになった訳ですけども、その時に自分が主張したのはですね、「本当にあなた達の仕事が、人々を守ってるんですか」ということをいいました。ひょっとしたらあなたは、その権力の中にいて自分自身は安泰でこのままを続けられるかもしれないけれども、あなたの親戚もあなたの子供も本当にこの国に守られると本当に思うって、ブッシュが何やってるかって解ってますかという、それに小泉が追随するっていうのはどういうことですかというのをですね、まあとうとうとやったんですけども、あの、だからその人がかわるとは期待してません、けどいつか僕らが弾圧される時に良心の呵責に悩んでくださいな。という、その、まず出来ることはその位なんじゃないかなと思っています。ですから、まあ仲良くしていけばいいみたいな気持ちは思いません。ただ、あの集まる人達に対してミスリーディングしてしまうことは、反省してまして、やっぱりいつか運動がより権力って言うかな、今の日本の中心部とぶつかり合う場面になったときに必ず弾圧されるわけで、なのに、警察と仲良しにできるんだということをして社会に対してアピールしてしまうようなことでは、やはり運動としてはまずいなと危惧してました。ただそれをどう展開していけばいいのかとっていうのは解らなかつたっていうのが、こう、そのまま時間がたってしまったっていうのが僕の実感です。」



岡本厚

「ありがとうございました。もう天野さんが出られますので、何かあれば最後に一言だけ。」



天野恵一

「すいません、集会呼びかけちゃってる、主催のほうなので。いかないと無責任になっちゃうので今、こっちの会場に来てくれる人ももう何人か出てますんで。えーと、失礼させていただきます。国会のほうにいかせて頂きます。」



岡本厚

「ありがとうございました、それでは、警察の問題あるいは権力をどう捉えるかというテーマと、それからもう一つ、オールドジェネレーションは伝える努力をどうしてきたのか、そういう問いかけがありましたので、吉川さんからは、この二つの問いにお答えを頂きたいと思います。」



吉川勇一

「いままで出た問題と関連して、まず、軍隊や警察への働きかけのことをお話します。日本の平和運動は、それにどういう対応をしていたのか。私の学生時代 1940年代終わりから、50年代初めの今から半世紀以上も前のことですが、それからしばらく、60年の安保闘争のころまでの長い間、街に行くデモ隊が、アメリカ人を見かけると、一斉に出たシュプレヒコールは、「ヤンキー、ゴーホーム！」しかありませんでした。それを変えたのがベトナム反戦の市民運動なのです。私たちは、「G I, Join us！」（兵隊さん、仲間に入って！）と呼びかけたのです。そして、事実、在日米軍の中に反戦活動をする兵士がたくさん出てきました。先ほど岩国のスナック「ほびっと」への弾圧のことを言いましたが、岩国の兵隊基地の中に出来た反戦米兵による地下グループは、当時の全世界の米兵の反戦闘争組織の中で、最高、最大、最長の歴史を持っているんですよ。それを支えたのは日本のベトナム反戦市民運動なのです。先ほどの「ほびっと」への弾圧というのは、ベ平連が岩国の海兵隊から武器を入手して、それを日本赤軍を通じて中東のP F L Pに渡している、その武器提供の中継地、根拠地が岩国のその喫茶店だという、とんでもない架空の物語です。しかし、日本のマスコミは、これをトップで大きな記事にしたのです。地元の新聞だけにとどまらず、『読売』、『産経』、『朝日』までが、『朝日』はトップ記事ではありませんでしたが、全部警察発表をそのまま載せたのでした。私たち市民運動が、岩国の反戦米兵から銃器をもらって、それを日本赤軍を通してP F L Pに渡すなどと、考えられるでしょうか。でも、それがいったん新聞に大きく出されると、蒙った被害は容易に回復できないものです。警察は、店に来たお客さんの身体搜索までするので、親しくなったお客さんも離れてしまいます。私たちが支えた岩国の反戦米兵も、米軍当局によって何十人もが逮捕され、軍事裁判にかけられました。でも、そうした弾圧にも関わらず、岩国からベトナムに飛んでいく飛行機のガソリンタンクの中に砂が入るんですよ。兵隊自身が飛ばせないために入れるんです。そして、実際飛ばなくなっちゃうんですから、それによってベ

トナム人民の命が助かるのです。そういうことが現実に70年代はじめには起こったのです。そういう運動を日本の市民運動は支えたんですよ。

一方、その当時の一部の党派のセクト運動は、市民運動なんか潰せということをやっていました。それを未だにそれらの党派は総括も自己批判もしていませんよね。その限りでは、高田健さんが辺見庸さんの『世界』論文への批判の中で、それとなく内ゲバ問題の総括もせずに何を言うのか、と反論されているのは無理もない点だと思います。内ゲバの盛んだった最中に辺見さんは早稲田の自治委員長だったそうですから、内ゲバ問題と全く関係ないはずはないと誰でも思います。そここのところを抜きにして今の運動を叱咤されても、そう簡単に手を叩く気にはなれないということは、当時の状況を知っている人ならわかると思います。

しかし、私たち、ベトナム反戦の市民運動はまったく違うのです。それなのに、小林正弥さんのご意見ですと、当時の運動を全部ひとくくりにして、「暗い」というふうに仰ってしまうんですね。権力の非情な弾圧の暗さと、内ゲバの暗さとに何らかの共通があるとしても、その中で一貫して内ゲバに反対し続けたベ平連やベトナム反戦市民運動はどういうふうに位置づけられているんだろうかと思えます。天野さんも、その当時にやられそうになったことがあると先ほど言われましたが、確かに対立する内ゲバの隊列が、槍ぶすま今の方には容易にお分かりにはなれないかも知れませんが 本当に先の尖がった竹槍をもって何十人もが対峙するんですね、その真ん中へ私たちは何も持たずに座り込むんです、「止めろーッ」と言って。何度そういう一触即発の事態を止めさせたか解りません。殴られたことももちろんあります。三里塚の空港に、私は今でも反対しており、成田空港からは飛ばないということもやっており、国外へ出るのにわざわざ関西空港まで行くんですけれども、それはともかくとして、三里塚では、「一坪共有」運動という行動をやりました。農民が持っている空港予定地の土地を一坪づつ購入して地主になり、強制収用を阻止しようというのですね。私も一坪地主です。ところが、当時、中核派は、これは農民のプチブル意識を利用した裏切り行為だと主張して、その一坪地主になった人たちを脅迫したり物理的に襲ったりしたのです。私は恫喝、脅迫されただけでしたが、第四インターの活動家などは、鉄パイプで骨を折られた人、頭蓋骨を凹まされた人など何人も出てきました。そういうことをやっておきながら、中核派の機関紙『前進』には、2年くらい前だったで

しょうか、一坪運動こそ最後の砦だ、というような論文が載ったんです。経過の説明も、自分たちの態度の弁明もまったく無しです。これには驚きました。こういう人たちとは一緒に運動できないなと思います。信頼の問題だからです。これまでの運動に、そういうことはありましたけれども、しかし全部をひと括りにして、「昔の運動は」というふうにしないうで頂きたいと思います。それでは経験は伝わったことにならないのです。かつての運動のなかで、どういふふうになげバを阻止しようという努力がなされたのか、さきほど言及のあった埴谷雄高さんもそうでしたけれども、三里塚に住み込んだ前田俊彦さんもその一人でした。いろいろの方がそれを批判し、阻止しようとされましたが、そういう努力なしには、今のような運動もなかったろうと思います。60年代、70年代の運動を一概に暗いとしてしまっははまずいでしょう。反戦市民運動の中には非常に明るいものがあつたのです。

ついで昨日ですが、当時の『朝日ジャーナル』の何冊かを読み返しました。私や篠原一さんなどが選考委員となつた懸賞論文募集をこの雑誌がやつたことがあるんですが、そこで準佳作に選ばれた文章は、「殺すなバッジ」をつけて新宿西口地下広場での「東京フォークゲリラ」の活動に参加したという、当時の浪人生、今、生きていれば55～6歳になつてゐるはずの人の文でした。それを読み返してみたのですが、非常に素直で明るいものでした。当時の普通の若者がどういふふうにな運動に参加してくるのかということが、ビビッドに解ります。

いわゆる「普通の人びと」「一般の人びと」が運動に参加してくるということは非常に大事です。しかし、運動を明るく、安全で易しいものにするだけがあそのための保障だという主張は、一面的なように私には思えます。自分の主張をことさら難解な表現で言つたり、独善的なシュプレヒコールを叫んだりするのでは、人びとに伝わると思ひませんが、しかし、自分の言ひたいことを一般の人びとには隠して、言わない、あるいは、それは学者が議論することだという小林正弥さんのご意見には、私は賛成できません。一般の人びとのなかでそれが議論されるようにならなにかぎり、運動は進化しないと思ひのです。既にイラク反戦運動が始まつてから1年以上が経ちました。ベトナム反戦運動がいつ始まつたかを歴史的にはっきり言うのは難しいのですが、一応、1965年2月7日の北爆を契機に大規模にな始まつたとすれば、それから一年半の後には、小田実さんの、被害者 加害者を結びつけるあの有名な問題提起がなされた

んです。それは運動の中から1年半で出てきた新しい、全くそれまでになかった理論でした。これがその後の運動にどれほど大きな影響を与えたかは一口では言えないほどのものでした。

ですから、私が「デモとパレードとピースウォーク」を書いた時は、もうそろそろ新しい運動の理論というものがイラク反戦運動の中から生まれてきていいのではないかという期待を書いたんですね。そうすると、いろんな意見は来てるよというだけの反論では困るんです。今必要なことはなんなのかということ、運動に参加している人びとの間で、研究者・学者も含めて議論をしたいと思うのです。

実は昨日か一昨日ですか、流れてきたメールにこういうのがありました。WPNに対する批判的意見ですが、読んでみます。お手元にある私のレジユメ2枚目の真ん中に書いてあることです。WPNのホームページの一番先頭のところに今でもずっと掲げられているのですが、「テロに屈するなではない、テロに国民を巻き込むな、平和なやり方ならテロを呼び込みません、日本人の命がブッシュか小泉総理は自衛隊を直ちに撤退させろ」というのがありますよねと指摘し、これは、火の粉がかからなければいい、日本を安全な場所にして安全な場所から自衛隊でなくボランティアを派遣しイラク復興を助ける、そうすればイラクの人は感謝しテロリストは日本を狙わないと言っているように見える、というのです。まだずっと続くんですけども、つまり、日本さえ安全ならばいいんじゃないのというふうに受け取れるが、自衛隊が行くなという主張はそういうことではないのじゃないか、という趣旨のメールです。

私も、運動の中の一部にそういうニュアンスを感じています。たとえば、今日の会合を準備された斉藤まやさんたちの出されている『シナプス』という無料で膨大な数を配布している印刷物 あれはなんといいんでしょうね、フリーペーパーというんですか があります。最初それを見たときは、こういうものがただで配られるとは、いいものが出たなあと思ったんですよ。ですが、その内容をみて非常に驚いたんです。世界は今安全でしょうか、というのがメインタイトルで、それにはイラクのことが書かれ、アメリカのことが書かれ、韓国のことが書かれ、演劇の評価や映画評、書評まで載っているんですけど、自衛隊のことも小泉政権の政策のこともまったく出ていませんでした。この創刊号が出たのは去年の確か9月ごろだったと思うんですが、あの時期にそれに全くふれずに世

界は今、安全でしょうかというタイトルとはなんだろう、というふうに私は実は愕然としたのです。

ところが、あとになって、はっと思ったことがあります。それを小林正弥さんの責任にしちゃ悪いなと思いますけれど、討論の場だからあえて言いますが、その年の12月8日の集会での小林さんの意見によると、もう日本の加害者性などを言っていたのでは今の若者はついてこない、それだと小林よしのりのほうに全部連れて行かれてしまう、必要なことは、日本国憲法が国民の生命と安全を守るんだという、この戦後平和の原点へ戻らなければならない、というご意見でした。実はそれを聞いて、あっ、そうなんだ「シナプス」はこの線に来てるんだと思ったんですね。あとで斉藤まやさんからは、実際はそうでもないというお話は聞き、今ではそうは思っていないのですけれど、しかし、共通するような危機感を私は感じています。

司会の岡本さんから注文されたことから大分脱線してしまいました。元に戻りますが権力とどう対するかという問題ですが、その対峙は、まず真剣でなければいけないということでしょう。小林一朗さんを批判するんじゃないんですけれど、1回や2回飯を食いながら、あなたには良心があるでしょうというような話をして、それで権力が変わるわけがない。実は、ベ平連のデモの時、警視庁のデモ届けの課で毎回対決することになった幹部の警官がいました。その後、赤坂警察署長になり、デモの現場でもベ平連の「当面の最大の喧嘩相手」になった人物です。その後、機動隊の隊長にもなり、警察学校の副学長にもなって、引退していますが、だいぶ以前から私と年賀状のやり取りが続いています。そして、去年は、世の中、ひどい、今だったら私もデモに行きたいですけどねと書いてありました。しかし、当時はそんな話は全くしたことないですよ。いつも真剣な対峙でした。こちらは運動側、向こうは権力側、取り締まる側なんです。しかし、二人とも、相手側に犠牲者が出りゃいいなんて考えてはいなかったでしょうね。つまり、警官隊とわざとぶつかって弾圧を受ければデモ参加者に権力の恐ろしさがわかるだろうなんて、もちろん、こっちは思わない。向こうも、ベ平連をやっつければ、こいつら恐ろしくなって下がるだろう、脅してやれ、などと、思ってはいなかったでしょう。しかし、二人とも、相手のおかれている立場 当然の権利としてデモをする側と、政府の意を戴してそれを取り締まる側という双方の立場 は理解していました。それだけに対峙は真剣でした。率直な年賀状がやり取りできるようになるまではずいぶんと時間はかかりましたよ。

さっき小林一朗さんはデニス・バンクスさんのお話をされました。デニス・バンクスさんとは、アメリカ・インディアン運動の組織者ですよね、何度も日本に来たことがあります。彼がいつああいう思想を持ったのか一朗さんをご存知でしょうか？ 砂川、1956年の砂川なんです。彼はそのとき19歳でアメリカ兵として砂川基地の中にいたんです。56年の砂川基地拡張阻止闘争のとき、彼はフェンスの中に、そして私はそのフェンスの外に居ました。私も20代です。東京地評の労働者とか全学連、そして日本山妙法寺のお坊さんたちとかとかが、基地拡張阻止のために結集し、警察隊と対峙したんです。襲ってきたのは警官側でした。当時デモ隊の側には、ヘルメットはありませんでした。私は、白い登山帽に鉢巻をしめてただけでした。それで機動隊とぶつかるんです。向こうは棍棒でなぐり、スクラムを組む私たちデモ隊を引き抜き、蹴飛ばし、突き飛ばしそれはものすごい物理的衝突でした。日本山妙法寺のお坊さんは座って太鼓を叩きながら、ひたすら南無妙法蓮華経を唱えるんですが、そこへ機動隊がかかれーッという指令で襲い掛かるんです。棍棒で思い切り、頭を殴るんです。私の目の前で頭が割れ、血がパーッと飛び、座っているお坊さんは倒れるんです。でもひたすら南無妙法蓮華経なんです。その非暴力の意思に、機動隊のほうがひるむんです。まあ、それは有名な話なんですけれども。そのときにデニス・バンクスさんはフェンスの中でその激突を見てたんだそうです。そして、19歳の青年は、自分はいったい何をやってるんだろうと考えたというんです。日本人はここで何をやっているんだろう、そして自分は.....と真剣に考えたそうです。彼の人生はそこで変わるのです。バンクスさんからこの話を聞いていた(*1)のは数年前のことでした。一緒にいた婦人民主クラブの山口淑子さんも、私も、そのとき、そのフェンスの外にいたんだよと言うと、彼も驚いて、三人で抱き合ったんですけれども、実は、それを知るまでには激突から40何年も経っているんです。つまり、人の気持ちや考え方をを変えることはできるでしょう。権力の側に立っている人でもね。しかし、それには反戦の立場にたつ、真剣な対峙と、徹底的な戦い、そして長い時間が必要なのです。一度や二度、一緒に食事をとって話をしたからといって、それで相手がすぐ変わるとは思っていないと小林一朗さんはいいましたが、そうだと思いますよ。

まだ言いたいことはありますが、大分長くしゃべりましたので、ここまでにします。」



岡本厚

「ありがとうございました。今仰ったようなことは、中々伝わっていないと思いますね。いまや吉川さんの孫の世代が中心になって運動をやってる訳ですから。正弥さんに対しては、先ほど、二元論でやるべきだという考えについての批判がありましたけれども、いかがですか。」



小林正弥

「何点か話させていただきたいのですけれども、私は、例えば従来のある種の平和運動や、あるいは古典的なステレオタイプのマルクス主義に対する批判として、人間の心理とか精神のダイナミズムを自覚する思想や運動が必要である、ということを強調したいんですね。それが、権力問題や運動問題にどうあらわれるか。天野さんがおっしゃったことの中でやはり私は問題だと思うのは、敵と味方という捉え方ですね。天野さんの置かれている状況で、そう見る、見ざるを得ない、というのは良くわかるんですけれども。しかし、敵味方思考パターンは、政治思想ではすぐシュミットを思い出しますけれども、古典的な思想としてあります。様々な状況で権力関係一般の捉え方や、戦争、紛争状況に全て出てくる問題です。私は、この敵味方思考パターンを抜け出さなければ、十分には問題解決ができないのではないかと、というふうに思いますね。「相手を敵と規定すれば、相手も敵と規定してこちらを叩いてくる」という相関関係がやはりあると思います。そうせざるをえない状況があるということはもちろん知っていますが、しかし、その見方が良いかどうかということとは問われなくてはいけない問題だと思います。例えば、ソ連が崩壊した後、あるいは東欧が崩壊した後には、ソ連や東欧の国家権力の中にあつた人は、その立場を維持できなくなるわけですね。ですから、状況の変化によって、「敵であつた人が敵でなくなる」というのは当然ありえます。もっとも、すぐそれが出来るわけではもちろんないけれども、そういう可能性を見ることは必要でしょう。人間の可変性を考えて、このような見方を根底にすえるべきではないかと思ひます。普遍的な友愛という概念を私は用いますけれども、一見敵と見える人であっても、実は同胞である。その見方の上で、しかし現状としては敵として現れている。「この見方が根底にあるかないか」というのは決定的に大事だ」というふうに私は思いますね。反権力の問題にも同じことがあるわけで、戦後の政治理論では反権力・権力批判を中心にしてきましたし、私もその

伝統に近いと思っていますけれども、「状況が変わった場合に権力をどのように行使するか」という問題も重要です。だからこそ政策の問題が大事だし、権力をどう善用するか、という問題もある。私にしても、大学で教えていますから、小さな権力はあるには違いなわけですね。そこで、「権力をどう行使するか」ということが問われてくる問題であるということになります。権力が全く無いという人は少ないので、これは日々自覚すべき問題です。

それから、吉川さんの議論についてなんですけれども、さきほど少し言ったんですけれども、今回改めて、吉川さんが書かれたものを読んでいて、私から見ると、当時の状況の中でのベ平連の位置づけというのは、むしろ今の、従来の平和運動との関係におけるチャンスなど新しい平和運動の位置に非常に近いんじゃないか、と思います。外から見た場合は、そういう関係が言えるのではないかと、吉川さんや当時の運動の経験者から見れば、今日の若い世代の運動は生ぬるいとか、議論が足りないとか、様々な問題点が目について批判されているという面もあると思うんですけれども、私から見れば、むしろベ平連の思想的な系譜、あるいは発展形態というふうに見ることも出来ると思いますね。ですから、私が先ほど暗い運動といったのは別にベ平連のことを言っているわけではなくて、日本人の、特に若い世代における従来の平和運動全体についてのイメージについて言ったのです。個別に考えれば、ベ平連はある意味では明るい運動という側面があったように思えます。吉川さん自身も遊びの概念をつかわれたということを書かれてましたけれども、まさにそれなどは、若い世代が徹底して行おうとしている部分でもあるわけですね。吉川さんも批判されたということを書かれていましたけれども、外から見て思うには、ある意味ではベ平連は若い世代の先行者でいらっしゃるのだから、吉川さんなどにはそういう立場から、自分がかつて受けた批判も思い出しながら、むしろ若い世代をエンカレッジして、アドバイスするという方が望ましいだろう、と思います。あまり対立関係が強調される構図よりも、上の世代から下の世代に対する、アドバイスも含めての継承関係が平和運動の発展につながる形に出来れば、この議論も成功となるというふうに思っています。議論の立て方には世代間の違いがあるわけで、研究者の場合のように議論の違いは明確にすることが必要な部分があるわけですね。ただ、今日吉川さんの先ほどの発言でも、要するに「学者の中で議論すれば良い」と私が言ったという話もあったわけなんですけれども、そういったことは言っていません。私がまさにこういった研究会をやろうとしているのは、学者だけではなくて、

市民と学者の交流、市民からの議論を活発にするということを目的にしています。ですから、「学者の間の議論だ」と片付けられれば、私から見れば、ここではバイアスが入っている批判のされ方をしたと受け止めざるをえません。

先行世代からの批判の仕方が、若い世代のほうからすると、どうもこのように受け取れてしまうという危険があると思うのです。私などは、例えば研究者同士で論点として先鋭化する為の議論のアプローチの仕方と、例えば平和運動で若い人たちと接触しながら発言するときの言い方とでは、少し変えざるを得ないと思っているのです。だから、そういう点で、やはり状況に応じてどういうアプローチをするかという言うことを、やはり考えたほうが良いんじゃないか、という気がいたします。」



岡本厚

「ありがとうございます。考えてみれば、今年大学に入った人は1985年か86年に生まれた人です。私にとってはついこの間の光州事件だってほとんど知らない。知らなくて当たり前です。ですから是非、吉川さんはじめとして、かつて運動をやってこられた方々は、これまでの経験というものを伝える努力を積極的にしてほしいと思います。今、何処の本屋さん行っても、図書館行けば別でしょうが、それを伝えるような本はないと思います。

もう一つ、岡小林さんにお聞きしたいことがあります。吉川さんから、さっき「いまの運動には議論がないじゃないか」、あるいは、運動の原則などが全然出来てないじゃないかと言う批判がありました。私は、議論はただやればいっていいものでもないと思うんですよ。先ほどゴールデン街で夜までやったってというような話がありましたけど、私自身は全共闘世代に4,5年遅れてきた世代ですから、確かにそういった議論はした経験もありますけれども、実りのあった議論だったのかというと、良くわからない。むしろ、運動は付和雷同だったんじゃないかとさえ思うんです。みんながやるから俺もやるとか。女の子にもてるからとか。むしろそんな雰囲気が多かったんじゃないか。中心にいた吉川さんたちは違ったでしょうが。今は、みんながやらないから私もやらないって言う、そういう逆のベクトルになってるだけではないか。

いま、議論といっても、何のためにやるのかがわからないわけで

す。先ほど小林さんは、今度は勝とうって仰った。勝つためにどうしたらよいかを考えよう。じゃ、勝つってなんなんだろう。つまり、我々の運動の目的、平和運動の目的は何なのか、答えていただかなくてはいけないと思います。

もう一つは、それが目的だとすれば、もう一つの議論の対象となっているのが、手段というか方法です。デモかパレードかピースウォークか、というのはその手段のことですね。一朗さんはPR、パブリックリレーションといわれました。しかし、この消費社会の中では、PRはあらゆるところがやっているわけでしょう。企業も政府もやっている。すると、平和運動もその中の一つになってしまうんじゃないか。消費されてしまうのではないか。

目的と方法について、正弥さんと一朗さんにそれぞれ、お答えいただければと思います。」



小林一朗

「先ほどの僕の提起って言うか。吉川さんへの質問をあとでは是非答えていただきたいんですけども。えー、話しに入る前にどういう伝える努力をしたかってことなんですよ。これは、あの失礼な言い方をしてしまっているかもしれないですけども。それ（上の世代が新しく運動に関った層および運動の外側にいる人たちに対し「伝えよう」としている姿勢）が、見えるってことが若い世代にとって非常に重要なことで、その、どこか離れたところと言っているイメージが残るのは、僕は非常に良くないと思っていて、それを揶揄、結果的な解釈としては揶揄として記憶されていくというふうに感じます。自分が伝えようとしている相手にわかるかわからないかはわかんないけれども、一生懸命、伝えようとしているっていう気持ちが伝わるのが大事だし、それはさっき僕がパブリックリレーションのことを取り上げたのはまさにそのことなんですよ。街頭にいる人たち相手に、一段高いところに自分が立って、自分のほうが良く知ってるとか、世界のことをわかってるとか、そういう立場で言うんじゃないかと、同じ目線で伝えていくっていう。これには実は、運動の外側にいた人が入ってきて伝えるほうが、有効に働くケースが結構多いんですよ。すいません、なんか他の話から入っちゃいましたけれども。パブリックリレーションのことと重なるので。

僕らのアピールや行動があふれる情報の中の一つとして処理されてしまう傾向があります。僕もそれを意識していて、チャンス立ち上げた時に三ヶ月で辞めようと言ってたんですよ。それ以上やってもシュリンクしていただくと立ち上げ時点では考えました。でも、集まった人たちの問題意識はどんどん深まっていった、僕の思ったようにはならなくて、むしろ繋がっていった。アフガンへの爆撃が行なわれたということと、イラクやるぞって話が繋がっていったと。有事法制が出てきたという状況もありましたが。9・11で開いた感覚、アンテナが、次の問題、次の問題、憲法改悪、日本が戦争できる国になるまで突き進むルールが敷かれていることが多いのに見え、つながっていったんだと思います。

あふれる情報に負けないためには僕は、自分の中に深くあるものをつながるってところが、重要だって思ってました。それを意識したアクションをいろんなところでやりました。例えばピースウォークのあとは、あの、オープンマイクの時間を作りました。代々木公園に戻って、自分がどういうことをやってるかとかかにやってるかってことを話してもらって、それで意見を交わしたり。あとは普通デモの参加者にマイクをまわして喋ってもらうことってないと思うんですが僕らは来てる人たちに、「あなたも是非喋ってみたい？」って、どんどんつれてきて喋ってもらいました。街頭で、不慣れであっても喋ってもらいました。自分の内側にあるものを出してみる、これを経験する場を作るってことが非常に大事なんじゃないかなと。単に、誰かが準備したピースウォークに参加するってことじゃなくて、そこから自分が発信していく自分が主体になっていくってことに切り替えるっていう場ですね。これを意識しました。

一つの情報、一つの消費されるものとしてこの反戦ムーブメントを終わらせないためには、構造的な理解も必要だと強く思います。10月だったかな9・11の翌月には「教えられなかった戦争」の上映会をやりました。規模ちょっと小さかったんですけど。そういう機会をどんどん作りました。単にかわいそうとか、被害者って意識、日本人が被害者とか巻き込まれるって意識だけじゃなくて、今何が問題になっているのかということ、高岩仁さんの「教えられなかった戦争 フィリピン編」は非常に良く描いていると思います。あとは、平和運動をやってく人のその、心積もりっていうのも「沖縄編」の阿波根昌鴻さんのフィルムには非常に良く描かれてると思います。

9・11の前から僕は「教えられなかった戦争」の上映会をやっている

した。それで、この映画で知ったことを活動に必ず繋げていきたいと思って。映画に来てくれた人たちに、次の場考える場、自分が発信者になってく場というものを準備する、そういう言い方はおかしいかも知れないけど、来てくれた人たちの行動を積極的に応援していく。そのことによって、一過性のものに終わらせないってことを努力しました。そしてもう一点は、目的ですね。平和運動の目的なんですけども。僕自身は普通に暮らせればいいやと思ってるんですよ。基本的には怠け者で、グータラで、あんまり本当は努力もしたくなくて晴耕雨読で暮らせればいいなあと思っているんですが、どうもそうもいかない。色々やってるうちに自分の、ちょっと言い方が適切ではないかもしれないですけども、世界で起きてることを知ることに非常に好奇心をくすぐられます。自分の問題意識を掘り下げてくれます。上手く表現できないですが「楽しい」という言葉だと意味が違ってしまうのでそうは言えないのですが。「知る」ということ、知ったことに対して自分が直接かかわり、向かい合って変革に携わるってことにやっぱり喜びを感じるんですね。僕自身はそうです。おそらく若い人の多くがそれに近い感覚になっているんじゃないかと感じます。

議論がないってことについても最後にちょっと答えておきたいんですけども。いきなり入ってきて議論しろって言っても、自分はそのときどう思うかって言えるくらいしか出来ませんよ。けども、時間を経るごとに、9、11から始めた人たちが成長した、そう感じさせられることが非常に多くあるわけですよ。つい最近まで「グローバル化っていいことじゃん」と思ってた人たちが、例えば先日開催されたワールドソーシャルフォーラムに行ってるわけですよ、実際。そしてそこで何が議論されてるか見てくると、経済の構造と帝国主義、帝国主義やこれから起こりそうな事ってのは繋がってることだとしてということも、この時間の経過の中で理解できる。こうした変化自体をある種の目的として捉えていいんじゃないかなとも思います。多くの参加者、しかも、自発的なポジティブな意識を持ちながら未来を作っていくってことに関わる人が増えていくっていう。そしてそこが、そこで努力してる人ってのが自発的な気持ちでやってる時って、その人の個性ってのが光るんですよ。僕はそこに非常に喜びを感じますね。それまで絶望的な気持ちになってた人たちがよしやろうって思う瞬間の表情の変化っていうかな、ちょっと中毒になっているかもしれない。だから、多分僕はこの後もずっとやっていくんだらうなあと思っています。」



岡本厚

「ありがとうございました、じゃ正弥さん。」



小林正弥

「はい、目的ですけれど、私は先ほど平和首位の再確立ということを手挙げました。短期的に言えばイラクからの撤兵だと思います。これをつづけて平和意識の再確立に持っていくことを願っています。私は、先ほどいいましたイメージとも関係しますけれども、いきなり護憲というよりも非戦という概念を提起して、とくにイラク撤兵というものに集中した方が良いだろうというふうに言っているんです。そのなかで平和主義の意義というものをより広げたほうが良いだろうと思います。明らかにタカ派は、数年後に改憲を狙っているという状況の中で、このイラク撤兵を実現して政治責任を問い、それを平和意識の再認識、再確立につなげることです。これが私の考えている目的です。そこで、「平和への結集」では、「イラクからの撤兵問題、国際法における先制攻撃禁止のルールの再確立、そして平和主義、特に平和憲法の尊重」と3点を挙げています。

この目的の在り方からわかると思うんですけれども、その方法との関係で言うと。例えば、あるすごい思想があってそれにみんなが集まってきて、正しいと思って同調して動くという状態ではないと思うんです。危機があって、その危機のために皆が合意できることを考えて、「思想などは違うけれども、それはとりあえず棚上げしてもいいから一緒にやろう」という状況だと今は思っているんです。思想的なアプローチからすれば、「素晴らしい思想があって自分達がそれを作り上げてそれで世の中を変えていく。例えば、もう一つの世界をそれで作る」という形がもっとも望ましいかもしれませんが、そう出来るような状況じゃないだろうと思うのです。ただ「もう一つの世界」を目的としているという合意があるところまででしょう。そうであれば、方法はやはりそれに従ってくるだろうと思うんです。つまり、先ほどイメージの問題を強調したのですけれども、すごく新しい思想が出来ていてそれに従って昔の例えばマルクス主義運動のような形で発展して状況を打開できるわけではないので、新しいイメージを新しく作るべきだということを言ったわけですね。ですから、「平和への結集」は、言ってみれば、薩長連合とか国共合作みたいな話ですね。これまで一緒にならなかったものが一緒にやっっていこうという事自体が新しいことである。そこがこ

の危機自体を打開するものである、というふうに思っています。

思想との関係で言うそうですね、思想的な展開、例えば運動論の展開は大いに追求されるべきだと思っています。それで、これは天野さんも仰いましたけれども、吉川さんが提議されている通りに、運動論を発展させていくというのは、実際に運動に関わる人々や研究者の大きな課題だ、というふうに思っています。例えば、天野さんは帰ってしまいましたけれども、天野さんが議論されている自己否定の問題も、さらに深く考えてみる必要があると思います。暴力とのかかわりの問題で、もちろん天野さんや吉川さんが暴力的運動をした人々、例えば内ゲバをしたグループとは違うということとはよくわかるんです。しかしその上で、「この問題を克服するための思想的なアプローチとして何が必要か」という事は、議論の大きな対象だろうと思います。「平和への結集」が進展すれば、例えば今後平和運動が広がる上で、あるいは思想全体の問題を捉える上で、この点が大事だろうと思います。私は研究者でもあるので、思想的な形で展開することも通じて運動の発展に貢献したいと思っています。これはある意味では、本当に運動にコミットしている人達との議論からはじまっていて、発展させていくべきことなので、こういう場で提起するのは重要だろうと思います。」



吉川勇一

「小林一朗さんから次の世代に伝えるために前の世代は何をやったかを言えという話ですが、この答え方は難しいですね。どういう話をしたらいいのでしょうかね。伝えようという努力はずいぶんしてきたつもりです。この3年ぐらいの間、私が書いた文章の中では、経験の継承という問題をテーマにしたものがおそらく一番多いんじゃないかと思います。」

ベトナムのホーチミン市に戦争証跡博物館という施設があります。ここへ、日本のベトナム反戦市民運動の資料を寄贈するために、一昨年、二度、ベトナムを訪問したんですが、30年も前の日本の運動を伝えるには、どういう形のものにするのがいいか、ずいぶん考えました。ベトナムの若い人だって、そんな生まれる前の戦争なんて何も知らねえやっという人が沢山いるわけですから。それで、視覚に訴えるのが効果的だろうと考え、一時間弱のドキュメンタリーDVDを作りました。カラーで、言語は日本語とベトナム語と英語と三つが入ったものです。制作には多くの人々が協力をして、かなり

いいものが出来たと思っています。シナリオは作家の吉岡忍さんが書き、日本語の朗読をしたのはNHKの現役アナウンサーの山根基世さんでした。日本の爺さんや婆さんたちがやったベトナム反戦運動って何だったんだと思う若い人に見ていただけたら、映像だけに、かなり具体的に当時のことがわかっていただけるのではないかと、と思います。

チャンスの皆さんにもこのDVDは一枚あげたと思うんですが……。いろんな大学なんかでも、学生たちが見る機会はつくられたんですが、1時間でも我慢が出来ず、飽きてしまうものもいる、という話も聞いて、どうしたらいいんだろう、10分の紙芝居でも作らなきゃいけないのかな、なんて冗談も出ました。そういう努力はいろいろしてきたつもりなんですが、それ以上、伝えるために何をやったんだか言ってみろって言われると、どういう答え方をすればいいのか、ちょっと戸惑っているんですね。そのこと自体が今の運動の問題になっているんじゃないでしょうか。

これから言うことは、小林一朗さんへのお答えでも批判でもないんですけど、先ほど紹介した関西の黒目さんやあるいは東一邦さん問題提起の文章があります。今日の討論は、WPNの運動自体を議論する場ではないわけですから、提起のしかたが難しいんですが、これらの問題提起には、WPNを含むこれまでのイラク反戦運動にある、一種の空気というか匂いというか、そういうものに対する批判だと思えるのです。そこにある種の排除の思想みたいなものが思想とまで言えぬにしても匂いですが、感じられるんです。具体的に言うと、「普通でない」人は来ないでくださいっていう感じですね。言い方が難しいですね。そんなことが運動の場で一度でも言われたことがあるかと言えば、それは一度もありません。誰でも参加は歓迎で、いろいろな思想、立場の人がいるんですけどっていうことは明言されてきました。そうではあるのですが、にもかかわらず、でも、なんか自分は違うみたいだなあっていう感じを持ってしまう人がいるんです。その違いは、必ずしも年齢の差ではないし、運動経験でもないんですね。そういう感じを提出したのが黒目さんの文章なのです。彼は、ここは自分のいる場所じゃないな、疎んじられているな、と思えたのです。彼の場合はそれをはっきり言える元気があるからまだいいんですけど、それを言わずに、一度か二度は参加したのだけれど、コリヤ駄目だって、もう来なくなってしまう人が私の周辺にはかなりいます。それで、私は、それは間違いだ、どんな風に思われていたとしても、来るなと言われてはいないんだ

から、今度も参加すべきだ、と誘うんですが、そういう人びともいるんですよ。それは必ずしも、私の世代の年配者だけではなく、ずっと若い人びともいるんです。その気分をはっきりと表現したのが黒目さんの意見だと思ったのです。東さんが「左を忌避するポピュリズム」と言う場合の「左」というのは、決してマルクス主義なんて意味じゃないんですね。社会的な批判をちょっと強めの声で言ってるというだけであったり、権力ということを問題にしてみたり……。普通の生活とは違うなあと思えるような人を切ることによって、自分は普通の人間で、世の中の人と繋がっていると思い、それが運動の幅と拡大を保証していくのだ、と思い込むといった傾向があるんじゃないか、そういう印象を与えている面が確かにあると思うのです。

それを今、具体的に指摘することはかなり難しく、誰のこの発言がそれだとか、誰のあの理論がそうだ、というふうに言えないんですが、雰囲気として生まれていると思うのです。先ほど小林正弥さんは、かつての反戦市民運動の共同行動の原則を見て、ああ、これは私たちが今やっていることと同じだと思ったと言われましたけれど、私は、実はそこが違ってなあって思っていたんです。かつてのベトナム反戦の共同行動の場合は、いろんな感じ方をするさまざまな立場の人びとが、阻害されたり差別されたりしているというふうに思わないで、自分はやりたいことをやってるんだとそれぞれ満足できるような形を全体としてどう組み立てられるかという点で努力をしたんです。そのときの最大の問題は、自分の意思に反した行動形態や主張を押し付けられることがないようにする、ということでした。そのためには、自分は自分のやりたいことをやるのだけれど、同時に、それが他の人にどういう影響を与えるかを、いつも考えることが要請されます。やりたいことをやるのですが、しかしその際、自分を相対化し、全体の中にいる自分の位置を絶えず考えながら、行動を選びとり、それが組み合わさって大きな流れを作り出していくのです。当時、日高六郎さんは『世界』だったか『朝日ジャーナル』の上だったかで、それを「多様性の統一」という言葉で表現されました。そういう共同行動の原理をずいぶん苦心して作ったのです。今の所ではまだそういう努力が感じられないようです。どちらかというところ、一般の人びとがおっかながるようなことはしないでくださいっていうような感じがあって、そう感じた人は、あ、これは自分のいる場所じゃないのか、と思ったり、そういうことは誰が決めてるんだらうと思って、「運動官僚」なんていう表現も使われたのでしょう。私は今のWPNなどの中に「官僚」が発生し

ているとはまだ思いませんが、しかしそういう感じを持っている人たちもいるという事実をどう克服するかという問題はかなり大事だと、私は思っています。

でも、今のべたことは、必ずしも、私に聞かれたこととは合っていないことでしたかね？」



小林正弥

「私はWPNについては、外から、あるいは地球平和公共ネットワークが呼びかけ団体の一つなので、接点を持つ立場としていうだけなんですけれども、今の吉川さんの話を聞いて思うに、「もちろんWPNが大事な役割を担っているから議論の対象になる」というのは分かるんですけれども、しかし、私自身が先ほどいったことはWPNについての話ではなくて、地球平和公共ネットワークで今考えている「平和への結集」というアプローチについて申し上げたわけなんです。ですから、WPNにもし限界があるのであれば、「運動をどういうふうに新しく発展させていくか」という議論がやはり重要だと思うんですよね。そのときに提案してみたいと思うんですけれども、例えば私自身もいくつかデモに出てみて思うのは、例えば、「日曜日の午後に、普通の人々が遊んでいたい時に、多くの人に呼びかけて何万人にも来て欲しい」というデモのあり方と、「非常に緊迫した状況で、国会の前やアメリカ大使館やイスラエルの大使館などの前で、徹底して抗議の意思を示したい」というデモとでは性格が相当異なります。そこで、デモの形態や性質には様々なものがあるといい、と私は思うんですね。メーリングリストなどで情報を流す時にも、来て欲しいから当たり前なんですけれども、「ここで抗議行動やりますから可能な限り沢山の人に来てください」というように流すんですね。でも、私はもう少し「どういうデモの種類か」という点も明示してあげて良いんじゃないか、と思いますね。例えば、私は徹底した立場を取って、「デモはパレードでも良い」といいましたように、「老若男女が集まれるデモが欲しい」と思っているのです。若い世代の人といっても、20代どころじゃなくて10代の人もあるし、さらには子供まで来るといいと思うのです。デモなんか来ることは考えたこともないような、ある意味ではまじめに勤めているサラリーマンとか、先ほどのように官庁をリタイアした人なども来て欲しいと思うのです。

危機状況なので、普段はデモに来てはいなくとも、危機感を持って

いる人たちがいるわけですね。現に、イラク派兵反対訴訟を見れば、北海道では元タカ派の箕輪郵政相が提訴を行ったわけですね。私は、「平和への結集」をして実際にタカ派に勝つためには、従来の平和運動に参加している人々、デモに来ている人たちだけでは不十分です。箕輪氏のように、いままでは自衛隊が大事だと思っていてむしろ左派を批判していた人が声を上げている状況があるので、こういう発想の人がなるべく来るようなデモが欲しいと思うんですね。それは軟弱なデモにならざるをえないと思います。「これは何が何でも何万人達成したい。例えば10万人を達成したい。だからやわらかいデモにします」と正面からPRすればいい。もちろん「過激なことはなるべく控えめにしてください」ということはあってよいと思いますねえ。しかし、逆に、やはり徹底して戦いたいコアの運動家達が、徹底した意思表示をするべきだと考えて、例えば夜中に非常に厳しい状況で警官と対峙して行う抗議行動も当然あってしかるべきでしょう。この場合は「何が起こるかわからない」という緊張感がありますよね。そういうところに、ふらっとあまり知らない人がいっても、やはり少しかわいそうだと思いますね。「こわいから、二度と行きたくない」と思ってしまうかもしれない。だから、「どういうデモか」ということを明示して、メーリングリストなどで呼びかけても良いと思うんです。つまり、デモの種類や特質について意識した上で、PRの方法を考えても良いんじゃないか、というふうに思っています。

先ほど2段階論を述べましたけれども、様々な人がいて、多様な思想を持つ中で、統一した思想が存在するわけではないので、そのアプローチにおいて多様性が必要であり、それに応じた運動の組み立てをしないと、今まで以上に層を広げて、憲法改定反対に過半数を確保することは難しいのではないかと、いうふうに私は思っています。吉川さんと意見が違うところは多々あると思うんですけれども、我々は「平和への結集」のイメージとして「平和連合」というものを掲げているんですけれども、言葉としてはベ平連と似ていますよね。ですから、前の世代と今の若い世代と感覚が違うところはあるんだけど、その辺の感覚の相違を両方が理解をしながら、運動の発展にどうつなげていくか、という点が大事でしょう。既存の平和運動の批判というよりも、この辺の議論を是非今後発展させていきたいというふうに思います。」



小林一朗

「僕が吉川さんに問いかけをしたのにそれに対して答えていただいたことへの反応を、えーと、ご努力されているのは、非常に良くわかるんですね。あれほどネット上に事細かくそのつど、そのつど考えられたことを、載せてるっていうのは吉川さん位しかないのではないかと思います。もちろん他にもいらっしゃるかもしれませんが運動の中でやってる方、そんなに多くないような気がします。やはりそれでもやはり僕は伝わらないと思ってまして、ここをやっぱり考えなくちゃならないと思うんですよ。僕がこういう提起をした場合に、じゃ出来てないじゃないかっていって終わらせたいとはあんまり思わないんですね。市民運動ってのはそもそも、じゃ、出来てないから、じゃあそれをどうして行くかってのを自分で提起していく場だと思っていて。あなた駄目でしょで終わらせてしまっただけは運動をやる人間としてはそもそも考え方間違ってるんじゃないかなと。そして、前の世代が出来ないことというのは必ずあると思うんですね、これ、時代の変化によってそのときの価値概念が、自分では感じたいものにかわっていくって言うふうに思っています。だから、世代交代ってのは常に必要で、その間に大事なものは継承していくってことがこれから先も必要になると。それで、チャンス立ち上げた時に、いずれチャンスも過去の活動になるって言っていました。そういうことだと思うんです。今は、時代にマッチしているように見えたとしても、それは確実にかわっていくんじゃないかなと。だからその時点で出来ることを最大限やるっていうことがとても大事なんじゃないかなと思います。その中で継承していくためには、今の世代の人たちには、僕はコミュニケーションってことがとても大事な要素となっていると思います。一緒に作っていくというプロセスですね。これがないとやっぱり中々伝わらないなと。人間として信頼されるってことが相互に必要なんじゃないかなと、そこから始まるというか。そうでないと最初に持ってた違和感とかですね、メールでやり取りした時のネガティブなイメージがなかなか払拭できないんだと思います。

9、11直後にチャンスはぱっと出てきたんで、それなりに話題になりましたし。難民支援もやっちゃったり、かなり活動の種類も広がったんですね。立ち上げた時の僕の予想は超えてたわけですけども。呼びかけ自体は誰がはじめても良かったわけで、もしですね、例えばこういうムーブメントが起きなかった場合に、吉川さんのそばにいる人たちから、同じムーブメントとは言わなくても、広がりのある青年層にアピール力のあるムーブメントが作れたかどうかって事は是非考えていただきたいと思うんですよ。吉川さんにやってくだ

さいってことでは必ずしもなくて、吉川さんが引用されている人たちの中に社会っていうかな、人々に対して新しく入ってくる人たちに対して。例えば黒目さん、名前があがりましたが、彼だけじゃなくて、インターネット上のBBSはかなり見たくないなあっていうぐらい、中傷、2チャンネルほどひどくないですけども。その人たちとやっぱり対話する気になんないんですよ。結構そういう人たちの多くが吉川さんにシンパシー感じてたりして。僕は吉川さんの責任かなりあるんじゃないかなあ(笑)と思っているんですけども。そういったところで変な悪口とかを言い合っているんじゃないくて、前向きな議論をしていくための支援を先輩世代にはお願いしたいなと思いますね。要求ばかりおおくすみませんが。もちろんこれは、僕を含め30代、20代、10代の人たちも努力してくことであります。」



岡本厚

「ありがとうございました。そろそろこのセクションを終えて休憩に入りたいと思います。」

私もいまの議論を聞いてていろんなことを感じました。私も大学に教えに行ったりすると、結構意見を言ったり議論したりすることのハードルがものすごく高いことを感じます。議論なんかそんなに簡単に出来ないですよ。教育基本法改悪反対の運動をやってる大学生は、あるメールの中で、「私達は何か社会的な問題に関心があっても、関心があることを押し隠し、回りには絶対に関心があることを見せないようにして育ってきた」と言っています。彼女はそれを突破して今、いろんなことを言ってるんですけども、とにかく回りはそんなことして大丈夫みたいな話になっている。そういう中での議論とか対話だってことなんです。小林一朗さんは奪われてる状態って仰いましたけど、そういう状態にいる人たちとどう交流していくか、考えることがすごく大切だと思います。」

それから非暴力。先ほどデニス・バンクスさんのお話を聞きましたが、私は非暴力は暴力より倫理のレベルが高いと思う。なのに私たちは無抵抗を非暴力と勘違いしているのではないか。私は韓国の人たちと交流が深いんですけども、韓国の民主化運動は、一部を除いて非暴力の運動でしたが、それでも激しい街頭での抵抗をして、今、革命的と言うぐらいの変化をもたらした。日本の運動がなぜそのような結果をもたらさなかったのか、そんなことも考えなければ

ならないと思います。韓国の民主化運動をやった人たちは、次々に政治の場に出て行って法律も制度も変えてった。それが何故日本の運動には出来なかったんだろう。プレストウィッツというアメリカの元の役人が書いた本を読んでいたら、日本は韓国ほど民主化されてないのでって書かかれていて非常にショックを受けました。しかし考えれば、なるほど、そういうふうに見えるのも当然です。ここで20分休憩を取ります。」

[>>次へ](#)

*1 このデニス・バンクスに関する話は[こちらの「ベトナムで聞かされた三〇年前のデモの効果」](#)を参照。

[>>次へ](#)

TOP	開会前	問題提起1 (吉川勇一)
問題提起2 (小林一郎)		
問題提起3 (天野恵一)		問題提起4 (小林正弥)
討論1	討論2	

TOP	開会前	問題提起1 (吉川勇一)	問題提起2 (小林一朗)
問題提起3 (天野恵一)	問題提起4 (小林正弥)	討論1	
討論2			

討論2



岡本厚

「武装勢力が三人を釈放した時のコメントというものが、今、届きましたので、読まさせてもらいます。「神の名の下に日本政府の兵士3人についてのコメントを聞いて痛ましく思った。それは彼らの命を軽く見ているもので、日本政府の正当性を良く表している。我々の行いは拘束された三人を日本政府から守ることである、なぜなら日本政府は日本人の命を全く大切にしておらず、つまりはイラク市民の命を大切にすることはできない…(声にならず)ごめんなさい。」



吉川勇一

「朗読を交代してやります。「日本政府の兵士三人(拘束された三人)についてのコメントを聞いて痛ましく思った。それは彼らの命を軽く見ているもので、日本政府の正当性を良く表している。われわれの行ないは拘束された三人を日本政府から守ることである、なぜなら日本政府は日本人の命を全く大切にしておらず、つまりはイラク市民の命を大切にすることはできないからだ。われわれは日本政府の傲慢な発言を拒否する。日本の政治家たちは国民の鼓動と希望を表していないことが判明し(鼓動は鼓の動きですね)彼らはブッシュやブレアのような戦争犯罪者の命令に従っているのだ。それでわれわれは日本の人びとの声に耳を傾けるようになった。われわれはアメリカによって広島と長崎で起きた大虐殺を受けた日本人に思い出して欲しい。抵抗を続けているファルージャでも今同じことが起きている。それは国際的に使用が禁止されている爆弾が使用されるなど、もっと痛々しく暴力的な方法で行なわれている。われわれがここで世界中に伝えたいことは、イラクの抵抗運動はどんな宗教、民族、宗派であれ平和を求める民間人を標的にしない責任がある。われわれは今夜メディアを通じて呼びかけた。イラクの宗教的指導者たちのイスラム評議会の考え方や信用性と勇気を完全に信じている。そして、われわれは三人の日本人たちが占領している国の味方ではな

く、イラクの痛みや苦しみの理解者であるとの情報を得た。われわれは、戦争に反対する日本人の気持ちに敬意を表する。その為にわれわれは以下のことを決定した。1、イラクイスラム評議会の呼びかけに即座に答え、日本人三人に敬意を払い、神の慈悲の元で24時間以内に解放する。2、友人であり、依然としてアメリカの弾圧を受けている日本の人びとに対して、自衛隊を撤退するように日本政府に出来る限り働きかけて欲しい。なぜなら、その存在は非合法的なものでありアメリカの占領を長引かせているのだ。神は偉大である。これは勝利するまでの戦いのためだ。イスラム暦1425年サファル月19日、2004年4月10日サラヤムジャヒディン」 以上です。」



岡本厚

「すいませんでした。あまりに私、日本政府のやってることが恥ずかしくて……。しかも我々がやったことがイラクにちゃんと届いたということではないですか。

では、第3部をはじめて行きたいと思います。最初に今日は、招待者ということで、パネリストの方たちから、是非、発言して欲しいという方何人か来て頂いています。フロアの人たちもおそらく聞くの疲れているでしょうから、私は発言したいんだと思っている人、手を上げていただけませんか？わかりました、じゃあ、まず招待者の方4人の話を聞いた後、フロアの何人かに話をさせていただいて、その後また招待者の方に話をさせていただく。そういう形にしたいと思います。すいません、これはちょっと差別的なんですけども、できるだけ多くの方に発現してもらおうということで、招待者の方は3分でフロアの方は2分ということで、お願いします。それでは東さん。よろしくをお願いします。」



東

「東といいます。吉川勇一さんたちのやっておられる市民の意見30の会・東京のニュースに、先ほど吉川さんが配布した『左を忌避するポピュリズム』と『連帯とネットワーク』というタイトルの文章を投稿しました。この間、WPNの主催するデモに参加して感じたことと、私のNPOでの経験がひとつの契機になって書いたものです。

小林一朗さんの発言に「なるほど、これだな」と思ったんですが、

「人に伝わらなければ意味がない」という発言がありましたね。ベ平連や学生運動の時代だって、今から30年前を見ると、暗いとか暴力的だと思われるかもしれないけれど、やっぱり誰だって人に伝えようって思っていたんです。「自分だけわかってればいい」などとは思ってはいなかった。まず、そのことはわかってもらいたい。そのやり方は、時代時代によって違うだろうし、その当時はその当時の、今は今のやり方があるということです。

もうひとつ。さっき吉川さんが言われたように、ベ平連は、当時の党派の連中から揶揄されたり、馬鹿にされたりしました。でも、彼らは市民運動を排除はしなかったですね。

今は逆ですね。WPNの中には、参加を「ご遠慮願いたい」という言い方をするところがある。これは、どうなんだろうと私は思います。何をもって「ご遠慮願いたい」のか根拠がよくわからない。「感じ」で言っているとしか思えない。自分の感覚に合わない人々、人に伝わらないようなやり方をしていると自分が感じる人々に対して「ご遠慮願いたい」と言っているとしか思えない。

わたしの参加しているNPOの活動の中には、「反戦とか平和などといっても、普通の人には受けいれられない」という人もいる。そういう場面では、実は小林一郎さんも「左」だと言われるんです。「普通の人に受けいれられる」というところに基準を置こうとしたら、「平和とか反戦とかイラクとかアフガンとか言わないほうがいい」というふうになってしまいうんじゃないか。「左を忌避するポピュリズム」というのは、そういうことです。

どんなに人に伝わりにくいことであっても、私たちが本当に真剣に言いたいこと伝えたいことはあるはずです。「人に伝わらなければ意味がない」ということが「普通の人に受けいれられるように」となっていくことは、本当に伝えたいことを曖昧にし、自分にとっての「普通」という感覚に合わないことをもって排除していくこと、排除の論理に繋がっていくんじゃないかと、私は感じています」



岡本厚

「では、加藤さん。続けてお願いします。」



加藤

「加藤哲郎と申します。インターネット上で『ネチズンカレッジ』という学術サイトと『イマジン』という平和サイトを主宰しております(*1)。

二つだけ申し上げたいと思います。私は世代的には天野さんと同じ団塊・全共闘世代で、吉川さんたちのベ平連運動にも学びながら、さまざまな政治運動・社会運動をやってきました。同じ政治学研究者として心情的には小林正弥さんに近いんですが、同時に、小林一朗さんたちの新しい運動スタイルをぜひ理解し学びたいと思っていますところですよ。

その理由が、二つほどあります。一つは、理論的に言いますと、私はネオ・マルキスト、ネオ・グラムシアンということになっているんですが、グラムシがファシズムの獄中で述べた「機動戦から陣地戦へ」という20世紀政治の変容が、もう一段転換して、「機動戦から陣地戦へ」から21世紀に「陣地戦から情報戦へ」という時代に入ったと了解しています。情報戦という観点から見れば、PRを重視するのは当然です。権力の側も運動の側もメディア効果を考え、ヘゲモニーを競い合うわけです。インターネットの活用は、市民の側の情報戦の重要な武器です。例えば9日の朝八時から、昨日の夜八時まで、札幌の今井君の友人達が作ったサイトで、9万5千のインターネット署名が集まったわけです。これは、僕の知る限りでは、日本における短期間のネット署名としては、画期的な数だと思うんです。かつて自民党総裁選の時に、小泉純一郎を首相にする勝手連が2ヶ月かけて75万アクセスでしたから、たんなるアクセスではなく署名という主体的行為だと考えれば、大変な数です。今回の三人の拉致問題に関しては、市民の側がイニシアチブを持って画期的な運動が行なわれたと思うわけです。その点で、現在の若い世代の運動を高く評価してます。

もう一つ。さっきからここでも世代間とか党派との関係の問題が議論されていますが、私は、なぜ過去の運動の経験が継承されなかったのかという問題には、やはり過去の運動の方に問題があると思っています。それは、日本ばかりではなく、20世紀の世界史的な社会運動の問題です。私は今、太平洋戦争開戦期のゾルゲ事件と尾崎秀実らの情報戦の新資料を集め解読しているんですが、要するに政党・政治党派と労働組合や学生運動、そしていわゆる市民運動・平和

運動の関係は、長く語られてきた古くて新しい問題です。今日ここで議論されているのは市民運動レベルでの世代間ギャップということですが、実は、その根底にあるのは、長い歴史の中で培われてきた政党・党派と大衆運動・市民運動の関係の変容の問題じゃないかと思います。

この点で、今日は日本の文脈で、なぜ既成の社共や新左翼の運動は高齢化して盛り上がりせず、なぜ小林一朗さんたちのWPNが若者たちを引きつけているかを議論しているわけですが、もっとグローバルな文脈で言うと、実は、もともとヒロシマ、ナガサキから始まった日本の平和運動の総体が深刻です。世界的に見ると、かつての社会主義・共産主義主導のインターナショナル運動に代わって、ブラジルのポルトアレグレで始まった世界社会フォーラム（ワールドソーシャルフォーラム）が、9・11以後の世界の多様な反グローバリズム運動・平和運動をネットワーク風に接続し、盛り上げてきたわけです。2月15日に世界中で千五百万人が街頭に出たのに、なぜ日本はWPNが奮闘してもせいぜい3万人程度だったのかという、世界の新しい社会運動・平和運動との落差が、問題になりうると思います。それは、今言った第2の問題、過去の政党・党派主導の運動の後遺症が日本ではなお深刻に残っていることと関係があるのではないかと考えています。以上です。」



岡本厚

「ありがとうございました。じゃあ千葉さん。招待者の第一陣として、そこまでにしますけれども。なんかね、あのテレビ画面に映らないから、むこうを見てやって欲しいと要望がありました。」



千葉

「国際基督教大学の千葉真と申します。今日は大変貴重なフォーラムに出させていただいて勉強になりました。こういう催しは今という時期に大変重要であると感じました。いろいろと申し上げたいことはあるのですが、3分ということなので短く申し上げます。私としては、やはり小林一朗さんたち若い世代の平和運動をどう吉川さんたちの世代の古くからの平和運動家たちがいかにサポートしてくれるかということに、特に今後の日本の平和運動の将来がかかっているだろうというふうに思います。辺見さんも、天野さんも、吉川さんも、平和運動の分野で偉大な貢献を為された方々で私はずっと

敬意をもって見てきましたけれども、今日の議論のやりとりを聴いていて思ったのは、旧世代の方々にもうちょっと謙遜になってもらいたいということです。継承の問題は決定的に大事ですが、若い世代にどう伝えるかという問題においても、もう少しサービス精神と言いますか、謙遜さと言いますか、あるいは自己相対化と言ってもよいと思いますが、これが必要じゃないかと思います。たしかに、60年代の左翼陣営の中でベ平連は別格だと思えますよ。僕もベ平連についてはすごく評価していましたし、すごく近いところにいました。高畠通敏さんやダグラス・ラミスさん、尊敬する政治学者がかかわっていましたが、その後、彼らとは研究者としても交流があります。ですから大変シンパシー持っているのです。

しかし、当時の左翼運動、市民運動、平和運動にはいくつかの問題点がありました。そしてベ平連といえども、それらの問題点からが全面的に免れていたかということ、そうではなかった面がありました。今後とも歴史的に検証していかねばならない問題です。第一はやはりイデオロギー的硬直性の問題、それから第二は階級性の問題ですね。これは、所謂、マルクス主義的な階級論ではなくて、知識人偏重という階級意識の問題で、知識人の殻を破れなかったのではないかという問題です。それから第三は暴力性の問題ですね。ベ平連も当時左翼運動の前提であった暴力主義を克服する非暴力という視点をどれだけ明確に出し得たかという問題ですね。それから第四に、僕は「逆天皇制」と呼ぶのですが左翼主義や平和運動の中にも、やはり異質なものを排除する体質がしぶとく介在しており、また同一化のすさまじい圧力が働いていたと思います。これは、精神構造として天皇制に繋がるような体質がずっと根強くあったように思います。これをベ平連が、どれだけ克服できたかとかという問題があります。

現時点からみると、60年代以降の左翼運動や平和運動が、日本社会を変えることが出来なかったことは明らかです。この事実を踏まえておく必要があります。このような大きな反省に立って、日本社会を変革することが出来なかった平和運動、それを直視し塵灰のなかで悔い改めてですね、猛反省をして再出発する必要があるのではないのでしょうか。若い世代から学ぶことは多くあります。若い世代から学んでいこうとする姿勢がないとですね、日本の平和運動の将来はないんじゃないかと思います。そのときに一つ考えておきたいのは、60年代以降、ずっと「反戦」という問題意識で来ましたが、それでも、「非戦」ではないのかと、それから「非暴力」ではないのかと

ということです。それからさらに積極的に平和の文化と平和の術をです、**「アート・オブ・ピース」**を、どう私達の身の回りから作っていくのかという課題が決定的に重要な問題の気がするんです。まあ、そういう意味では、私は**「平和への結集」**、**「平和連合」**の可能性に賭けたいと思っている、そういう思いがあります。**「平和への結集」**、**「平和連合」**の構築のためには、やはり多様性の中の統一性、緩やかな結合、これがやはり大事であって、個々の運動や集団のアイデンティティーを大事にしながら、どうやってですね、他の同様の志向性をもった運動や集団と繋がっていくことができるのか。そこに賭けたいという風に思い、ぜひ吉川さんには小林一朗さんたちを力強くサポートしていただきたいと思います。」



岡本厚

「ありがとうございました、それじゃあですね。フロアのこっちから半分。ごめんなさい、こっちから半分。この4人の後ろにいる人たちの、手を挙げていただけますか。今、マイクを持っていきますので。じゃあ、一番後ろの女性の方。えっと、上手くいけるかな。」



栗本

「大阪から来ました、大阪自由学校「ぼちぼち」という市民団体の栗本と申します。今日は来た甲斐がある内容で、とてもよかったです。二点あります。一点は、前半出てきた権力の話です。警察であるとか自衛隊の人たちに人間性を取り戻して欲しいという事に関しては、フィリピンをはじめアジア諸国では人権教育というアプローチで、国から独立して、軍人であるとか警察官とかに対して教育するという発想があって、それをシステムとして作ってやっているそうです。今日はちょっと、デモとかの現場でどう対峙するかって言うお話だったと思うんですけども。これから、平和運動を考えていく時にそういうシステムをつくるという考え方までフォローして運動として展開できないものかなと一つ思いました。」

それと、もう一点は世代間の話についてです。私は大阪で最初にデモに参加した9, 11の直後の時、まさに、なんとなくみなさんそれぞれグループで参加していてすでに繋がりがあがる人が多い中で、何処にも入れなくって。あぶれてるなあっていう人々で、自称して**「有象無象（うそうむそう）」**という名前をつけられてました。それ

で、「空気に入れない」という感覚ってというのは私もわかるところがあるなど。私は今32歳ですので若い世代の方に入るかと思うんですけれども、大阪もピースウォークといていたその中で排除感というのはあると思うんですが、それは、私を含めた「若い」世代の抱えている問題だと思うんですよね。例えば、学校のイジメとかの空気とおなじであって、みんなと一緒に何かするって言うのがよくって、ちょっと、浮いてると排除するって言う空気がメジャーどころで。だから、ちょっとイケテナイ服着てると入れないという。そういうノリで排除されるという問題だと思うのです。ホント、雰囲気って言うことだと思うんです。それと同じレベルであって、「左派が排除される」というような「雰囲気」に、思想性とかそういうものはないと思うのです。今日の議論でもこの問題に関してそういう捉え方のズレがあるのだと思うんです。で、そこでもう一点あるのが、一朗さんが言われたように、若い世代が自発的思いで活動する中でやりがいを見出し成長していくっていう可能性はかなりあると思います。今の世代が自分達で行動する機会を得ることで、エンパワメントしていくという発想で平和運動を構築する必要があるんじゃないかと思いました。ありがとうございました。」



河内

「河内と申します。今日は、いろいろ楽しい話を聞かせていただきまして、どうも有難うございました。いつかはこういう会、あるいはシンポジウムが必要だと思っていたんですが、公共哲学フォーラムや縁の下の力持ちになっておられる大学生や若い人たちの力で今日出来てホントに嬉しいです。

吉川さんに問題提起をさせていただきたいと思います。二つ問題提起があります。一つは、小林さんたちの努力を、若い人たちの努力を率直に認めるべきではないかということです。非常に大きな困難の中で、そして、自分の言葉で訥々とですね、語っておられることに、やっぱり私達は非常に感銘を受けると思うんです。それは吉川さんも同じ気持ちだと思うんです。ただ、吉川さんの文章を読んでいると、それが薄いような感じがします。若い人たちが困難な状況の中で自分流のやり方でコツコツ努力しておられることを認めるといことを、吉川さんはもっと明確に宣言されたほうがいいんじゃないか、これが一つの問題提起です。

第二番目の問題提起、吉川さんは、1960年代70年代には非常に大き

な議論があったと言われますけれど、私は、議論の内容の点でも、議論のやり方の点でも、その経験を相対化する必要があると思います。相対化しなければ、単なる経験の押し付けになってしまい、結局は、経験は継承されないと思います。たとえば、たしかに延々と、場合によっては夜の2時、3時まで議論しましたが、今から考えれば、自分がいかに正しいか、いかに相手を論破するかというところに重点がおかれた議論の仕方だったと思います。これからは、お互いに良いところを学びあって、そして、新しいところに到達するために共同で努力するという、新しい民主主義のあり方、新しい討論のあり方を私達は工夫する必要があるんじゃないかと思っています。以上です。」



匿名

「チャンスのほうで、9、11からメーリングリストに入っています。（匿名）といいます。一朗さんとは大体10歳位上で、小林正弥先生と同じような世代です。実際これまで、こういった平和運動について私達の世代に伝わってなかったっていう事が、やっぱり一つの問題だったと思うのですね。私自身も大学とか学生のとき、中核派とかそういうところしか知らなくて。はっきりいってベ平連と中核派の区別もできていなかった。それが実際なもので、今地元で社民党、共産党、民主党の方たちと平和のイベントを考えており、去年もピースウォークを地元でやりまして、それを歴史教育者評議会の方でも取り上げていただき、今度の夏にもそちらのほうで発表させていただくことになっています。そのようにして、一応今、広がりがどんどん出来ています。でもやっぱり、過去の清算は他の方々が言われるように、それが十分出来てない。この先続けるのが難しいところがあるなって言うのを実際に考えていますので、その点について是非、吉川さんとこれからどんどんお話を進められていけたらと思っていますのでよろしくお願いします。」



加藤

「えーと、ジュゴン保護キャンペーンセンターというところのスタッフをしています加藤と申します。私は、吉川さんのなさったデニスバンクスさんの話を聞くのは2回目なんですけれども、日本山妙法寺の方が血を流しても、倒れても、南無妙法蓮華・・・をやっていたというのはどちらかという怖いんです。自分達もこれから基地の問題、4月7日にボーリング調査と称する着工、あの工事着工が決定

してしまったので、これからは体を張る運動が中心になっていく可能性もありますが、暴力の問題とどう向き合うのか。私は殴られそうになったらかわす練習はしようかなと思っています。やっぱりそういう血を流してもというの、私はメーリングリストに一回書いたのですが、ヒボウリョクといっても被る方の「被暴力」じゃないか。それは暴力だろうと思うんですね。だから吉川さんがそれを自慢げに話されるのは、なんか実は良くわからないんですけど、ある人達には恐怖心に写るんです。暴力の問題とからめて何か意見がありましたら、あと私達の運動に何かアドバイスがありましたら、過去の基地問題の教訓などもいっぱいあると思いますので、教えて下さい。以上です。」



加藤

「Chance!に参加していた者の一人としてお話ししたいと思います。私は、9・11同時多発テロをきっかけに活動を始めたので、それまでデモや集会に行ったことはなく、Chance!での活動がすべて初めての経験でした。Chance!には、ソフトでオープンマインドな雰囲気があったからこそ、そんな超初心者の私でも参加することができたと思います。その後、Chance!以外の違った形の活動をしている方たちにもたくさん出会って、他にもいろいろな考え方や方法論があることも学びましたが、私にとってChance!は原点で、そこからすべてが始まりました。今は、元ベ平連の方や市民の意見30の会の関係者の方などと一緒に、新宿西口地下広場で反戦意思表示をする活動をやってたりしています。Chance!は30代くらいの若い方たちが中心でしたが、こちらは50代の方が中心です。私は自分が40代でその中間の世代のせいか、どちらの世代にも違和感がありません。私の中では世代間の対立というものはなくて、それぞれにいいところがある、というふうに考えています。ただ、平和運動に関わったことがない人にとって入っていきやすい場所というのはあって、そういう意味ではChance!またはWPNは、誰でも参加できるような工夫をこらしていると思うんですね。やっぱり多くの人に自分たちの主張を伝えるためには、相手がそれをどう受け取るかということに配慮することが必要だと思うんです。映画や演劇では、戦争反対という一言を言うために、億単位の莫大なお金をかけ、俳優も二、三ヶ月芝居を稽古して、大勢の力を結集し、良い作品をつくります。そこまでして、やっとその一言が伝わるわけです。世間一般の人たちの、平和運動をしている人たちへの冷ややかな視線や、その間の溝をひしひしと感じるにつれ、人に何かを伝えるには、それぐらい大変な努

力が必要なことだと、最近改めて痛感しています。Chance!のピースウォークの後で、オープンマイクをしたことがあって、私はいきなり指されてしまい、みんなの前で考えていることを話さなければならなくなったことがありました。それこそ生まれて初めての経験で、ドキドキしてしまいましたけど、振り返ってみると、それは貴重な体験でした。それまでは、Chance!のスタッフがつくってくれた場に傍観者として参加しているという、消極的な姿勢でいたんですが、人前で話すという行動を自分で実際にやってみたら、私も平和を創る当事者なんだ、という、主体者の自覚が芽生えたんですね。それからは、自分でいろいろなアクションを試みるようになりました。ほんの小さな一歩でも、その一歩をまず踏み出してみることによって、自信や情熱が生まれ、その人がアクティブに変化していきます。イラク戦争にも有事法制にも無関心で選挙にも行かない人たちが多くを占めている、今の日本を変えていくには、まずはピースウォークなりに来てもらうこと、そして、平和を目指して生き生きと活動している人たちの生きざまに接してもらうことが、大切じゃないでしょうか。これからも、そういう架け橋となるような場をつくっていくことが、すごく大事だと思っています。」



二見

「都内の大学に通っている大学二年生です。この討論会に来る前に国会のWPNに参加してきました。僕が行っている大学には今でも他の大学にちょこっと残っているような過激派の残りのような団体などは一切なく、普通に大学で過ごしている分には、政治的な活動を行うことのない学生がほとんどの大学です。そういう状況の中で大学生活を送っている僕が、今日国会前で見えた光景というのは、WPNの方には人ばかりができていて、平和的な感じの集会をやっているんですけども、そこからは離れた向かい側のところで、いわゆる過激派の学生たちがシュプレヒコールをあげているというものでした。結局、やっぱり二つの運動は異なっていて、どうしてもそこには何か分かり合えないものがあるんじゃないのかなあというようなことを感じてしまいました。この前スペインで列車の爆破テロがあった後に、スペインではものすごい大きな市民のデモがあって、そのときは町中を、というか国中を埋めつくすような、200万とも言われているような数の市民が集まったということをニュースで聞きました。日本で例えば「平和への結集」と言ったときに、平和運動をどう進めていこうかという話と同時にあるのは、やはりその市民の無関心さというか、無気力感のようなものに対し

て、社会全体としてどう運動を盛り上げていくのか、ということだと思います。平和運動に少しでも関わっていく者として、大変勉強になる議論となりました。ありがとうございました。」



岡本厚

「ありがとうございました。こちらから半分はだいたいいいですね。後で発言したいときはまた言ってください。私も昨日ですね、国会に行ってきましたけれど、やっぱり初めて来る人がけっこう多いんですね。集会に参加するのに、お金いるですかとか、法律に違反しないのかとか聞いてくる人がいました。新鮮な感じでしたが、どうしたらいいのか、何をしたらいいのか分からない、でも止むにやまれずという人がいっぱい来ていました。」

ではパネリストのほうに、少しマイクを戻したいと思います。吉川さん、天野さんがいない分、代表として、いろいろと答えなければいけないことが出てきたようですね、どうでしょうか、もう少し謙遜をとか、あるいはサービス精神、自己相対化をしてほしいとか、あるいはどういう議論があったかというのは、いかに正しいかばかりだったんじゃないかとか、「ベ平連」といえども左翼的な運動から免れていなかったのではないかと、さまざまな指摘がありました。」



吉川勇一

「謙虚になれというご忠告、ありがとうございました。なるべく謙虚になるように努力いたします……なんていう言い方をすると、それは謙虚に言ったことにならないんでしょうね、やっぱり開き直ったというふうに聞かれてしまう。そこが難しいところですね。しばらくこれから先を見ていただくよりしょうがないかなと、いうことですね。」

私が今一番お答えしたかったのは、おっかないという問題でした。それから、ヒボウリョクは暴力ではないかと、ヒボウリョクの被は被るもの、つまり暴力を受けるといえるのは暴力ではないか、その論理が私にはよく理解できませんでした。私はそういう運動をみんなで作ろうと提案をしたわけではありません。日本山妙法寺の僧侶たちのやったような非暴力抵抗を実践しているのは、日本の中ではごく僅かな人たちです。ヘンリー・ディビッド・ソローからガンジー、

マーチン・ルーサー・キング Jr.と伝えられて来た非暴力運動というのは、日本では本当に僅か、まだ運動の伝統というか大きな流れにはなっていません。君島東彦さんたちのやられている運動が最近出てきているわけですが、そういう運動をどう拡げてゆくのかということは、かなり大きな宿題です。

私は、いかなる暴力を振るわれても、敢然としてそれを受け、しかし自分は非暴力に徹するという形の行動を、全部の運動参加者がやるべきだとは一度も言っていないんですよ。妙法寺の実践には私自身がすごく感銘、影響を受けましたが、私自身は出来なかったわけですね。でも、その非暴力抵抗が「暴力」だというご意見は私にはまったく理解できません。

ベ平連について振り返ってみても、60年代後半から70年代にかけて非暴力抵抗、あるいは市民的不服従ということ、十分には強く提唱できませんでした。ごく最近完結したばかりですが、みすず書房から『鶴見良行著作集』が刊行されました。鶴見良行さんは、独自のアジア学の道を切り拓いた人ですが、ベ平連時代に書いたものに、非常にすばらしい非暴力論と憲法論、日本の非武装論があるんです。しかし、それは当時のベ平連の中でも、十分な注目は得られなかったと私は思います。鶴見俊輔さんも、早くから非暴力直接行動を説いていたんですが。

「暴力闘争」とは言わなかったけれども「実力闘争」という表現がよく言われて、68年の佐世保でのエンタープライズ阻止闘争のように、学生の集団が果敢に機動隊の暴力と対決する行動にひろい市民からの共感が寄せられました。その後、学生や新左翼党派の行動は、次第に竹やりや鉄パイプや火炎瓶なども用いて、「機動隊粉碎」までをスローガンとするようになるのですが、「実力闘争」=勇敢な効果的行動、「非暴力行動」=市民層の弱い2次的行動、といった価値序列感を全体の中から払拭できず、もちろん自分たちは暴力は使いませんでしたけれども、それに正面から議論を起こして当時のベトナム反戦運動の中で非暴力の運動を確立することを、ベ平連はやれませんでした。なぜ鶴見さんのあの提起をこの当時私がもっと真剣に中心に据えられなかったのか、という残念な思いは今かなりあります。それはこれからの課題だと思いますね。

ただ、非暴力と、先ほど岡本さんがちょっと言われた無抵抗主義がイコールに理解されるようになってきているのは困るな、と思います。

そこだけは何としても区別をしてほしい。ガンジーの「無抵抗主義」なんていう言葉を聞くともうびっくり仰天するんですよね。ま、そのくらいにします、時間がないので。」



岡本厚

「正弥さん、どうですか。」



小林正弥

「一言だけ、研究者としての発言が多かったという話ですけれども、われわれ地球平和公共ネットワークは「平和への結集」を実現するために、今年の初めだったでしょうか、WPNの呼びかけ団体に入りました。これは市民の平和運動との結合を深めるためで、私のアイデンティティとしては、もちろん市民の一員であるという側面と、市民とは別の研究者としての側面という、両方のアイデンティティがあるんです。ただ今日は、市民運動との関係における研究者からの発言というふうにしたほうがいいだろうと思い、その側面を強調しました。」



岡本厚

「今、いろんな方々から出てきた問題提起、大切なことがたくさんありましたが、例えば、市民の無関心さをどうしていけばいいのか、それは先ほど加藤さんが言われたような、ワールドソーシャルフォーラムの中で、日本だけが陥没しているのはなぜなのかということにもつながっていくとも思いますけれども、そういうことも議論していかなくはいけないと思います。」

それじゃ、次の半分、まず招待者の方からの発言をお願いします。」



吉田

「私も吉川さんと同じ市民の意見30の会というところで、だからと十年ぐらい活動をご一緒してきました。今日の議論は、運動論と世代論ということだったので予想はしてしていましたが、こういうテーマはどっかで一回くぐらないといけない議論なので、やむをえないかなと思いつつ、私たちがこれだけの人たちが集まっ

てやる議論ということでは消化不良の感がぬぐえません。例えば護憲派がなぜ衰退しているのかをめぐって、小林さんの論で言いますと絶対非武装主義に吉川さんの思想、運動なんかは立っていると思うんですけども、一方で専守防衛論、国家自衛権あるいは国連指揮下のPKO型海外派兵は良しとする、つまり国が軍事力によって自衛する権利は普遍的なものとみなし自衛隊を容認した上で、海外派兵だけは歯止めをかけようというふうな護憲政党的な考えや平和の構想「非戦の哲学」による護憲運動は構想できないものか、というのが小林さんの出した問題提起ではないかと思います。吉川さんなんかの非武装主義でいけば原理原則は分かるが政府のなし崩し改憲や9条明文改憲に有効な反撃と自衛隊を容認している多数市民をまきこんだ護憲運動はむつかしいのではないかと。では、国家非武装主義による戦後平和運動やベ平連運動などの代表される市民による非暴力直接行動などの運動のエネルギーと政治的影響をぬきにしたり、国家非武装市民非暴力の原則をあいまいにした9条護憲運動はありうるのか、どのような力によって実現可能なのかと反論したいのです。そのあたりを議論して欲しかったと思いました。そして運動論から、今度は理屈や政策の面でこのパート2を是非やる必要があるんじゃないか、問われている問題じゃないかと思います。それから、ぼくの知る限りですが、だいたい非武装主義を言う人はなぜか攻撃的な人が多いっていうか（笑）、吉川さん見ていて僕はずっと感じるんですけども（爆笑）。あまり性格のいい人はいないんですよ（大爆笑）多分にそういう問題が世代論とか何とかじゃなくて、非武装主義でもものすごい武装するっていう（爆笑）。そういうのは左翼の伝統、名残りみたいなものにみえるでしょうが、僕から言えば個人の性格に由来する部分が非常にあると（笑）ということです。それは若いか何かは問わないと思うんですけども、もう少し運動経験豊富な人からその辺を自覚してもらえば何とかなるんじゃないかなという感じがしているんですけども。」



岡本厚

「井上さんお願いします。」



井上

「私は、沖縄・一坪反戦地主会関東ブロックの井上澄夫と申します。今日の議論で世代論がいろいろ出てきたんですけども、私は世代論のところには収斂するのは反対なんです。今ある運動そのもの

がですね、反戦市民運動として、かつての質をですね、継承し発展させているのかという、もうちょっとマクロなところで見ておいたほうがいいだろうと。そういう歴史性の問題から言いますと、私はやはり小林正弥さんがおっしゃる、戦略的に、三十年前、四十年前に運動の依拠する論理をあえて後退させるという考えは容認できない。1960年の反安保闘争というのは、4月の韓国の学生革命と響きあってたんですね。で、そのことは今ほとんど忘れられているんだけれども、4月26日に、ソウルの国会前で、十万人のデモがあった、そのときに日本の全学連は国会周辺で警官隊と激突するわけですね。そこには響きあうものがあったんだけれども、その後の経過は全然違います。運動の継承性では圧倒的に韓国のほうがすごいですね。ということが一つあります。

で、さっき小林さんが吉川さんたちの世代は体験をどういうふうに継承する努力をしてきたのか、と言ったときにちょっと驚いたんだけれども、それは、その問うた本人にはね返ってくる問題なんですね。運動を発展させ、政府の政策を変更させるためにはですね、やっぱり過去の事実から学ぶしかないんですね。それはもう自分で図書館に行って勉強するしかないんですよ。だからそこで責任を言うのならば、相互的な責任だと私は思います。もう一つだけ。最近「反戦と変革」って言わないんですよ。革命でも世直しでもいいのだけど、反戦と世直し、反戦と革命、反戦と変革って言わなくなっちゃってる。だけど、この二つのことは切り離すことはできないんですよ。やっぱり世の中変えないとですね、戦争はなくなる。例えば戦争をさせない民衆の力を強化するというだけでも、これはかなりのですね、世直しですね。だから、私達の反戦は、日本の現状を変えるんだというところをふまえた反戦なのであって、ただ戦争は嫌だよというのではないのです。そのところは、もう少しみんなで自覚的に議論してもいいことではないかと思います。ありがとう。」



大迫

「杉並の荻窪にある日本地域社会研究所という出版社で編集をしております大迫と申します。今日はちょっと取材を、ということで話を聞きにきたら、出版関係者ということでこんな前のほうに座らされてしまって、ちょっと辟易しているんですけども（笑）、そういう運動の実績というものもないので、この「デモかパレードかピースウォークか」という世代間のテーマについて、自分でちょっ

と見聞きしたことをもとにお話ししようと思います。

一年前に、アメリカのイラク侵攻が開始したときに、NHKでもスペシャルで放映されたので、ご存じの方もいらっしゃるかもしれないんですけども、「ことばで綴る千羽鶴～千人祈」というプロジェクトがありました。インターネット上で、反戦のメッセージを若い人たちが中心になって募集するというもので、これにはかなりの数が集まったと思うんですけども、結局それは単行本化されて、最後にはネットで反戦の言葉をつづった人びとが実際に集まるという千人祈の集いという催しがあったんです。それにちょっと私は参加させていただきました。

その時に、じゃあこういうふうにして反戦の声が集まったから、それをこれから実際の活動に移していくのか、と呼びかけ人の方に対して僕は聞きましたら、「もう本にしたので、これは一つの活動で終わりです」というので、ちょっと僕は拍子抜けしてしまいました。実際そこには、若い人だけじゃなくて、学生運動の世代で活動されてきた方もいらっしゃるみたいで、その人たちも何かすごく拍子抜けしていたということがあったんですけども、ネットによる世論は、発信しやすいとか、ちょっと参加しやすいというその反面、止めやすい、抜けやすいという相反する要素もありまして、それが年配者から見ますと、どうも「本気ではないのではないか」というように見えてしまうということが一つあるんだと思います。ですから、「情報戦」という話が出ていましたけれども、実態がけっこう空虚であるという可能性が否定できない。とはいうものの、若い人の間で、あまり反戦に対しての意識が高まっていないところで、どうやって声を集めていくかということになると、有事なのに歯がゆいと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、パレードという明るい名前を始めなければいけないというのも、ひとつの現実ではないか、と思います。」



佐久間

「私もここで一分長く喋る資格があるのかどうか分かりませんが、佐久間と申します。「環境・持続社会」研究センター（JACSES）という団体に所属していますが、それ以前は「市民フォーラム2001」という「環境と開発」に関して活動していた団体にいました。ですから、平和運動については本当に素人ですけども、大変関心を持っています。運動論に関して少しコメントしま

す。

これについても大して経験があるわけではないですが、やはり一番気になっているのは、このような議論の次に、では何をしようかと考えたとき、チャンスなどの呼びかけに答えてウォークなどに参加し始めた人はもうOKのようなところがあって、そこにさえ来ない人たちにどう働きかけるか、ということです。若い人たちも、年配の方も、そのほとんどが、 이슈が何であれ社会運動に関心がないのですから、呼ばれてないところに言って喋るというような時に、聴衆は誰なのかと言うことを常に意識しておかなければいけないんじゃないかということです。例えばピースボートなどは、ちょっと意地悪な言い方をすれば、安く世界一周旅行に行けるということだけで参加している中高年の方も多いし、若い人の多くも基本的には同じです。特に若い人の場合は、少し受け身あるいは面倒くさがり、または疲れているから3ヶ月も船上にいられるのかなあ、と思うこともあります。そこで私などはグローバルゼーションの話をするわけですが、お呼びでない、という感じになることもあります。特に旅行の後半に乗り込むと、もう社会問題の話なんか聞き飽きた、という雰囲気の場合もあります。日本のODAで撤去させられることが決まっている貧しい漁民のお家にホームステイさせてもらったり、南アでエイズ問題に取り組む現場の人々と交流したりしたのに、クルーズ最後に出てくる典型的な言葉が、「私にとっての平和とは、まず自分が幸せを捜すこと」というものだったりするんです。もっとしっかりした人でさえ、自分の地域に帰って、地域を知って、みんなの繋がれる場をそこに作りたい、という反応でした。つまり、世界の現状を自らの鏡に利用するだけで、より大変な状況にある人々に対する共感が薄いんですね。どうしてそうってしまったのか、そうした人々にどうやって働きかけていくのか、ということ私たちが本気に考えて行かねばならない状況にあるということです。

そうなると、今、知の体系が崩れているのに、同じ知識を持っていないから相手にしない、というのではお話にならないですし、実際、知的水準の高い運動家の方の多くは、新しいサブカルチャーのことはよく知らないのではないのでしょうか。でも、そのサブカルチャーの一個一個の蝸壺に個々人がはまり込んで、個がバラバラになっている実態を分析できなければ運動論はできないと思うんです。従来のコミュニティが崩壊した後に、擬似コミュニティの中で暮らしていけると思っているのは、変な話ですが、ここにいる人も

一緒ですよ。アーレントのいう市民というのは、ある意味で、擬似コミュニティだと思っんです。でも、擬似コミュニティであつても人質解放に貢献できるという凄さもあるわけですが。しかし同時に、ここに参加している私たち、特に、全共闘の世代の皆さんがお家で子供たちに何を伝えてきたかという、援助交際を始めたのは全共闘世代の子どもたちだと言われていますが、彼らは家で何も伝えられていない。彼らは本気で怒られることも知らないし、怒られ方も知らない、反論の仕方も知らない。だから、思考が停止しているにもかかわらず批判に立ち向かおうとせず、ネットの曖昧なコミュニティに安住しようとするのではないかと感じてます。そういう現状分析をどんどん出し合い、ぶつけ合うことで、運動の外側の人たちとどう繋がるのか、どうやって一緒に運動をやっていくのか、という議論に繋げていきたいと思ひます。そういう意見期待してます。」



岡本厚

「ありがとうございました。えーと、それじゃあこちらから半分の方で。発言したい人。じゃあ、後ろのほうから行きましようか。」



匿名

「2分ですよ。まず、WSF世界社会フォーラムについて。僕は、加藤さんの所の学生と一緒に、社会フォーラムの準備とかをやってきたんですが。そこで、一つ問題だったのはそれが空間なのか運動なのかっていう問題があります。で、とにかくそれはその、世代間だけではなく。例えばいろんな課題をやっている人の課題間のギャップみたいなものもあることもあって、もうひとつの世界は可能だといった時に、繋げていく必要があるだろうと。特徴の一つはそこにあると思ひます。そのことを、宣伝になります。4月24日に論議したいと思ひてますので、若い人からダサイといわれる文京区民であります。よろしくお願ひします。」

二つ目に、暴力の問題。これについては匿名さんがサパティスタを例にとって、慎重に、最終的には武装放棄したわけですが、そのことの問題提起として、その世代も考へている人がいて、今の世代も考へてる人がいるってことを伝えておきたい。あと、もう一つはその佐久間さんが今言っていたこととも繋がるんですが、僕はその地

元でOCネット、外国人と一緒に生きる大田市民ネットワークって活動をしていて、山の手線の中ではこういった反戦運動をやったりするわけなんですけど、その中には50人くらい日本語ができないスタッフがいるわけなんですけど、そのことと山の手線の中でやる反戦運動と中々結びついていかないっていう問題を抱えていて、そこをどう超えていくのかなということ、今日の課題に重なっていく問題でもあるのかなと思いました。あと、2つ言いたいことがあります。あの、アカデミズムの問題で、やっぱり「もうひとつの世界」は可能だってだけでなく「もうひとつのアカデミズム」は可能だっていい。僕はあの、すごいなあと思うのは武者小路さんで、彼のように小さな集会に来て、僕らの10人くらいの集まりにも来てくれるっていうような、ああいう人が沢山出てきてくれるのが良いなって思います。最後に小林君たちに途中の世代として言いたいのは、やっぱりあの踏みしだいて乗り越えて欲しいなあ。こうやって欲しいああやって欲しい。やっぱり運動してきたものとして、踏みしだいて乗り越えていく責任があるんじゃないかと。是非、乗り越えて欲しいなあと思います。以上です。」



匿名

「えっと、(匿名)と申します。(匿名)さんとかと「はてみ」って言うのをやっているのと、シナプスも、先ほど吉川さんにご批判いただいたシナプスもやっております。今日は、ホントに貴重なお話皆さんありがとうございました。今、なんかいろんな話を聞いて頭がボーっとしちゃってるんですけど。一つちょっと、この場で言っておきたいなあということがあります。

まあ、議論にはある程度の仮定を設けるってことが必要なんですけど、若い人たちに議論がないって言うのも、議論の仕方っていうのもあると思うんですけど、確かに議論慣れしてないところがあるかもしれないんですけども……。まあ金曜の夜から昨日の夜にかけて渋谷の地下鉄の中で今回イラクの撤退を、日本人三人の拘束を解くためにも、イラクから自衛隊を撤退をとというビラと署名をもって地下鉄の中とかを動いたりしてたんですね、地下鉄の中で配ったりとかして。本当に普通に見える若いことか、あとガングロって色が黒くて、ここらへんこう真っ白にお面のようにお化粧してる渋谷の若い子とかも署名に列をなして、初めて署名しますってということで、結構そこで議論になったりするんですね。そういう場を求めてる人たちもいるってことを、それで本当に真剣に考えてい

て。言うことも、日本人だから助けなくちゃいけないと、確かにそういう言い方をする人もいました。だから、自衛隊はイラクから撤退するべきだと言う人もいましたし。他の国の人たちも拘束されてますよね、それ以上に、イラクの子供たちもっと殺されてますよね。けっこうね、若い子はこうだっていう。あの、皆さんのイメージとは違う若い子も渋谷にはいっぱいいました。ただそのことだけ申し上げたいのと、やっぱり今の若い世代、私達の世代ってのはイデオロギーってものがない。まあ、ある人もいるかもしれないんですけども、多分ほとんどの人たちが持たずに運動をやっています。自分の実感の中から湧いてくるものを信じながらやっているっていうところがあるんですね。なんで、こうばらばらで議論しても、こう感情的になって議論になんないとか色々あると思うんですけど、遅々として進まないところもあると思うんですけど、どうぞ色々叱咤激励いただいて、これからもどんどん議論を喚起していただきたいと思います。私達の若いシナプス、色々問題ありつつも、喚起を常にその考える側に余韻を残させたいんですね。主義主張をバーンとのせて、それがどうだって言うんじゃないで。ある程度の考える余地を与えつつ、どうしてかって言うと自分で自分のフィルターを通さないで。やっぱりなんとなく私達の世代って言うのは、60年代70年代のこうなんとなく、なんかこう、凝り固まった平和運動ってイメージがどうしてもあってですね、そういうものになりたくないって言う思いもありまして、自分のフィルターを通して欺瞞ではないものっていうことをちょっと考えながらやっておりますので、どうぞ叱咤激励をお願いします。」



匿名

「えーっと、サラリーマンやってます。(匿名)といいます。デモとかほとんどやってません。今日は面白いかなと思って来て見たんですけども、非常にがっかりしたというのが正直なところです。一番真っ先に天野さんがいなくなっちゃったので、ちょっと話が聞けないのですけれども、権力との関係が話された時に、やはり敵対するものってみてるところが非常に気になっていて。何でそういうことを言い出すかっていうと、あの、憲法になんて書いてあるかって言うと国政は国民の信託として行なわれると書いてある。すなわち国民の総意として一種のその自分達の財産を銀行に預けるような感じで、生命・財産の安全を預けるものなわけですから、少なくとも敵ではないはずなんですね。根本的なことを考えると。それを考えるとそもそも憲法的価値に対して非常に昔の人達は無関心で

あって、そういう人が9条について語るのははっきり言って馬鹿馬鹿しいというのが本音です。何でこういうことになったのかなって言うのがあるんですけども、個人的に好きな、自民党で今いなくなっちゃったあの野中さん。あの方も結局、政策は本当に鳩なんですけれども、やってることといえばズーッと裏で根回しをして、社会性民主主義を全部、建前を壊してきた人ですから、そういう形では鳩の人たちが憲法的価値をここ50年かけて殺してきたと。そういう現状があるんじゃないかなと実は思っています。小林正弥さんに対しては、あのそういった憲法的価値ってのを根底にすえて、平和運動をどういうふうに作っていくかって事を、一朗さんに対してはやはりそこを一つの正統性のありかとして運動を作っていくということを、吉川さんと天野さんにはなんて言ったらいいかわかんないです。正直なところ。以上です。」



匿名

「今日は何も代表しないで皆さんお話をさせていただいて、僕も個人として自分の意見を言いたいと思います。僕も運動とか作っていて、若者達とかとね、集まって、運動とかも作っていて、そういう経験から言って小林一朗さんの運動をどう広げていくのか、色々工夫するって話は良く解ったし、むしろネットとかで見た会食問題のこととかあってですね、小林さんには非常に悪い印象持っていたのですが、運動やるってことで言えば同じようなこと考えてるんだなというようには思いました。

僕はふけて見えるんで、年上だと思われてるかもしれませんが、64年生まれで、まだ40歳なので、むしろ小林さんと吉川さんで言えば、小林さんに近い年齢なんじゃないかと思うんだけど、ただ、小林一朗君が言ってるのを段々聞いてるうちに要するに僕自身もそうだと思うんだけど、小林君やチャンスにしてもそうなんだけど、自分達だけが何かしら若者や普通の市民を代表しているかのように喋ってしまっていないかと、そういうふうにしてしまうことが、僕なんかでもしてしまうことがあるんだけど。それは、結局、排除の論理に繋がっていくところがあって、やっぱり違う。要するに踊りを踊りたい人もいるし、ヨーロッパとかアメリカとかあるいはイスラエルのパレスチナとかで行なわれているようなデモを見てね、もっと威勢良くデモをやりたいと思っている若者だって現実にいるわけですね。そういうのに対して、そこで排除していくようなのはいけない。そこで思うのは継承されてない、継承されてないって言わ

れてるけれども。そういう、自分を何かしら他のものに仮借して、自分は正しいって言い方というのは戦後の日本の反体制運動ではきちんと継承されてるなあというふうに感じました(笑)。かつてだったならば、自分はプロレタリアートの前衛であるとか、ベトナム人民とともに戦っているんだとか、あるいは農民の味方だとか、様々なことが言われて、自分が正しいとは言わないわけなんですよ。自分が何かの代表だということによって、自分と意見の違うものや、自分の気に食わないものを排除して去ることが続いたのが、僕がやってきたことを含めてね、戦後の運動の歴史だったんじゃないかという、やっぱり僕は若者というか、小林君と同じ世代の立場から言って。やっぱりその若者の代表面して年寄りに文句を言ってもね、運動作ってくのは僕らなんだから。いくら、年寄りに継承させてくれって言ってもしょうがないわけで、むしろ良い顔して教えてもらうだけ教えてもらって、自分達で新しい運動を作っていくっていう、そして、そういう中で、要するに誰かの味方のふりをしてね、若者の代表のふりをして、自分のやり方と違うものを排除するような卑怯なやり方だけはね、僕自身も含めてやめていかなければならないんじゃないかと思いました。」



匿名

「えーっと、今日はお話ありがとうございました。ナインといいます。WPNや、チャンスに少し、少しじゃないのか、関わっています。先ほど話の出ていたシナプスも、(匿名)さんや(匿名)さんとやっています。吉川さんに二つ質問があります。シナプスが最初話題になったときに加害者意識が足りないように見えると仰ってたんですけど、その話を聞いていた時に加害者意識と被害者意識をどっちを優先すべきかというある種の二項対立で捉えているのではないかという気が少ししたんですね。けれども、ベ平連の時に加害者意識っていうのが出てきた時にそもそもその初発の動機は、二項対立でどっちを優先すべきかということを出したのではなくて、そのときの状況を見て、今何を伝えていくべきかということ考えた上で、選択して、広がっていったんじゃないかと思うんですね。小田さんがそうだったのか、僕は知らないですけども。自分もそういう意識で、自分個人としてはシナプスの中で、被害者意識・加害者意識といったものをどう出していくかっていうのを考えています。だから、吉川さんにお聞きしたいのは、被害者意識を優先しようと考えた初発の動機がどうだったのかということについてです。

もう一つは。過去の運動が継承されていないということをどう伝えようとしたかってことが問題だと一朗さんが仰って、それに対して吉川勇一さんはこの2,3年にやったことを反論として出されていたと思うんですが、僕はそれよりもむしろ平連が終わってから、まあ、これは吉川さん個人の問題ではないんですが、70年代、80年代、90年代の間にそういった平和運動的なものが、どのようにその時代の若者に共有されてつながっていったかという話をお伺いしたいんです。今、30、40代の人たちですかね。僕はその時代の若者よりも更に下なんですけれども。それは日本の中でいわゆる消費社会が爆発した時期でもあると思うんですよ。いわゆる平和運動の中に社会への問題意識というものが、集約しきれなくなってきた、そういう時代だと思うんですね。そして、ニューアカデミズムとかあったと思うんですけど、あるいはああいう形で出てきたり、あるいはオウム真理教なんかで出てきてしまったというのがあります。だから、その時代その時代に挟まる世代に吉川さんが若者とどう向き合われていたかということをお聞きしたいんです。」



富永

「立教大学のリスク・マネジメントとNGO・NPOをテーマにしている二一世紀社会デザイン研究科というところでアドボカシーをテーマにしております富永といいます。私はいわゆる386世代なんですね。いま韓国では非常に重要な位置を担っている、30代で80年代に学生、60年代生まれという世代です。韓国に比べてこの世代は日本の運動や政治では目立ちませんが、小林君たちがやろうとした運動の革新って言うものを80年代からやっぱり何度かやろうとした経験があるんです。例えば反天皇制個人共闘 秋の嵐 っていうのがあって、例えばパンクスとか、それからアニマルライツの連中とかもいました。その流れで、新宿のホームレス支援なんかで非常に面白い、カオス的なコミュニティを作り出しました。彼らなんか今、WPNなんかで登場しようとしたら、おそらく排除されたと思う。やめてって言われる。この 排除 の問題というのは非常に重要です。」

小林正弥さんがおっしゃる運動論というのは、僕はやっぱり多様性ではなくて一様性の、ホモジーニアスなパラダイムだと思います。なおかつ生活保守主義。非常に排除的で、非常に息苦しいコミュニティを再生産するだけではないかということを恐れます。「孤立を恐れて連帯を求めず」という、天皇制的なものが生み出す一方の

典型になりかねない。これは「連帯を求めず孤立を求める」という「トンガルこと」を自己目的にするって言う傾向とコインの裏表の関係にある。この同位対立を超えるパラダイムとして「孤立を恐れず連帯を求める」という 実際には「連帯を求めて孤立を恐れず」という順番だったことに限界はあると思いますが 日本の実の運動の中から出てきた非常にいい言葉があります。吉川さんが先ほどからおっしゃっている「共同行動の原理」の中にはこの原理が含まれている。ですから、この多様性の原理、 排除 を超える原理、これを継承していくことが今日のこのシンポジウムの何よりも重要な課題なんじゃないかと思います。それから、最後に小林一朗君に一言だけ、やっぱり公安会食問題の参加者メンバーは明らかにしましょうよ。本人のためにも、運動のためにも。以上です。」



道場

「道場と申します。研究はしていますが、研究では飯が食べないので、「研究者」というよりは、一応、「市民」という立場で話させて頂きたいと思います。以前、吉川さんにも運動の継承ということで、『現代思想』誌上でインタビューもさせていただいたんですけども、経験の継承という問題について、もっと基本的に確認しておかなくてはいけないことがあるんじゃないかと思ひまして発言させていただこうと思ひました。

端的に言って、経験の継承って言うのは別に歴史に詳しくなるということではありません。単にいろんな蘊蓄をかたむけることが継承するってことではなくて、多分ですね、人間何か運動やると、何か問題にぶつかるはず。そのときどうしたらいいのか。たとえば、形が似ている問題っていうのはあるんですね。そうした問題への対処の仕方というものをどういう形でノウハウとして伝えていくのか、これが本当の基本的な問題だと思います。そのときはですね、かって経験した人たちがそれをもう一度思想化している場合もあれば、現場で解決できたいいい実例っていうのもあって、それがほとんど継承されていない。それが問題だと思うんです。こうしたものをどんどんつないでいくこと、それがどうして必要かという、やっぱりWPNの努力もあってですね、イラク反戦の中で、ものすごく沢山の人が参加した。で、体を動かしちゃうとですね、その人の中に何か残るはず。残ったものに次にどんな形や言葉や、あるいはその繋がり方を与えていくかという時に、はじめて経験の継承ってことが問題になるはずなんです。そうしたことが十分に確認

されないまま昔話をしても、なんの意味もない。そういうことを誤解してこられた方もいらっしゃるかもしれませんが、今日はそういうことを議論していたのではないということをやはり確認しておく必要があるだろうというふうに思います。それを踏まえるならばですね、大同団結のために一定の行為に制限を設けるってということは僕は意味がないと思ってまして、いろんな出会いがあっていいはずだし、そういうものをどういった形で作っていくかっていうときに、リスクを軽減するためであれ、一定の枠をはめるとするのは私は非常に切り詰める、非常に貧しいことになるんじゃないかと思えます。それはあらかじめ自分に見たいものだけを見ているということになるんじゃないかと、個人的に思っています。そうした問題については、僕はもっと議論すべきだろうと思えます。

それからもう一点だけ、人質が解放されてですね、ちょっと今僕危惧しているのはですね。運動の側の努力もあったんですけども、道行く人の話を聞いているとですね、「あの人たち、多分死んじゃうよね」という話をしている人たちが多くて、非常に一般的には無関心だったように思います。すごくニュースになりましたけれども、それと同時にですね、運動的な連帯の中で釈放するのが実現されるのは非常にすばらしいんですけども、僕は非常に最近ペシミスティックなので、「あいつら出来レースでやっているんじゃないか」とかというような悪宣伝がなされるんじゃないかという危惧を僕は持ちました。運動をやってる連中が、自衛隊を撤退させるためにあえて誘拐事件をでっち上げて、そして解放してみせる。要するにこれは左翼の出来レースなんだ、と右から展開される恐れを私は今日感じました。ですので、十分にそのことを考えながら、今後運動が人質を解放したということは強調しながらも、政府が出してきたものをきちんと批判しながら、そういう為にするような悪宣伝を、右の側からでっち上げてくるようなそうした言論にきちんと対抗していく軸をこれからきちんと作っていく必要があると思えます。以上です。」



岡本厚

「ありがとうございました。大体、終わりですね。もう一度パネルのほうに戻したいと思います。今回は、両小林といいますか、お二人に対して、多様性といいながら、一様化しているんじゃないかと、あるいは排除しているのではないかと、などの指摘がありました。まずお二人にお話いただければと思えます。」



小林一朗

「えーっと、僕が若い人とか普通を代表するような顔をして喋っているというご意見があったのでお答えします。そう思われるかもしれないですね。色々議論したいのですが、ひとまず、どう感じられるかはしょうがないです。僕が言いたかったことは自分が働きかけていく主体を何処におくかっていうことです。これを僕は運動に参加していない人においてきたし、多分、チャンスに集まった人のほとんどが、そこに置いていたと思います。運動についてどう考えるだとか、議論よりも常に外側、外側って言うか常に新しい参加者に働きかけてくことを優先していたっていうのは事実です。そうした視点で活動していくことで付随して生じる問題が、多分時間がたつほどに増えて来るんだと思います。すくなくとも、現段階まではそっちに重点を置いてきたし、おそらくWPNもその傾向が強いんだらうと思います。で、ただ、僕のレジユメの一番最後のほうに書いたんですけども。両立させていかなくちゃなんないんじゃないかなと。あとは、その市民運動をどう考えるかってこととの働きかけの両立ですね。僕のほうで危惧してるのは、自分自身はいつも気持ちを改めながらというか、いないといけないなあと思うんですけども。運動を担う青年層の性質についてって言う事で書きましたけれども。特に、三つ目ですね。自分が何かやってきた、自分達が何かやってきたってことを、これが、この自負がですね、おごりに転じていないかということ。これはやはり、常に振り返ることだと、その必要があると思います。やっぱり自分自身も、そういう面がなかったかといえ、多分そんなことはないと思うし。だけど、僕としては振り返るようにしています。これは驚くべきことなのかもしれないのか、それとも、当たり前言葉なのかもしれないですけど、少なくとも市民運動に類する活動をやっていなかった人たちが、それをやり始めた途端に、「無関心な人たちに伝えなきゃ」という言葉が出てくるんですね。これもですね、非常に驚きの言葉であるんですが、それまで自分はなんだったんだという。でも、このことは裏返せば本人の問題意識は元々あって、偶々こう参加できる場所にであえなかったということなのではないかと。こういうケースも非常に多いわけで。まあ伝える対象っていうのは今そばにいないくても相当いるって言うこと。いっぽうで、運動を始めた途端無関心な人たちについていう言葉が出てくることに危うさが垣間見えるのではないかなと思います。

WPNはじめた時は色々危惧しました。それまでに僕はレインボーパ

レードをやっていて。その時はパレード、環境のお祭りだったんであんまり衝突する場面とかなかったんですけれども。そのイベントでは野外レイブもありました。テクノの音楽をかけて踊りながら歩くっていうのをやっていたんですけれども。そのときと9.11の後のアクションというのは明らかに違うわけで。それで色々危惧しました、ものすごい数の人に来てしまって、事故がおきたらどうするかなあとか。かつてレインボーパレードやったときも、参加者が道端の車を傷つけたりした場合に、自分達に責任がかぶってくるんじゃないだろうかとか。あの、かなりその辺慎重にやったんですよ。で、今回は例えば僕らが発信したメッセージが海外のメディアののって、加工されて出されちゃうこととかも考えられたし。あとは、何とか自分の思いを表現しようとして集まった人が、なにか事故というかトラブルに巻き込まれるということは主催者としては絶対防ぎたかったから、かなり、過保護な形でスタートしたのは事実です。で、それはあの時点ではやむをえなかったのかなあと思うんですけれども。次第に変わって行ったかなと思います。で、吉川さんのご指摘の中にWPNの中で、警察にありがとうって言った、っていう事件があったっていうんですけれども、僕は、それあったかなあとうろ覚えで、ただWPNが始まった頃に、それまでしばらくチャンスから離れてた人がDJをやって、確かマイク持ったときがあったんですよ。そのときに、その人が活動を離れている間の雰囲気の変化を感じないまま喋ってたなあと思ったことがありました。そのあたりがWPNに移って意識してかえた部分の、感じられてもらえなかったところかなあっていう気がします。

排除の論理についてなんですけども、最初はかなり気をつけたために、そして僕自分がいろいろ誤解をしていたために排除に近いようなこともやってしまったんじゃないかなと思っています。じゃあそれすぐ修復できるかって言うとまだ僕良く解らないんですね。もっと話し合いたいというのが本音です。やっぱり自分達で場を準備したからには、やっぱりその責任があると思っています。だけどそれは、決してやたらと人を縛りたいと思っているわけではないし。やっぱりコミュニケーション不足っていうのが一番大きいかなって気がします。

WPNで排除された人たちもチャンスのピースウォークだったらそんなもん勝手にやってるよと思っていたでしょうからそもそも参加しなかったと思うんですけれども。運動をどう捉えるかっていう部分の主張にかなり違う部分がありますから。しかし、その違いを埋め

る作業とかは必要なんじゃないかなと思います。

驚いたのはサウンドデモってというのが渋谷で始まったときに、僕らに参加禁止メールがばーっと届いたんですね。ピースウォークではそういうことはしたことはないけど。一応、こういうのは守ってねというのはあったけど。チャンスは参加禁止ってというのが来て。ここまでの排除をしたことは少なくとも自分達にはないんだけどなあと。けどそれはあんまり人には言わなかったです。そんなこといっても、どうせ対立ばかり広がるだけで意味ねえなあと思っで、実際行って帰らされた者もいて。器ちいせえなあとか思ったんですけど。そんなところですかねえ。ひとまずじゃあ。」



岡本厚

「では、正弥さん。」



小林正弥

「孤立を恐れず、連帯を求める。とてもよい言葉だと思います。『平和への結集』を進めるときに、私の支持している思想が中心であるわけでは全くありませんので、今日はあまり自分の思想や哲学の話はしなかったんですけども。私自身はコミュニタリアンとかリパブリカンなどの思想に親近感があります。現在の人間非常に孤立しており、原子化している状態にあるので、これをどういうふうに解決するかということ非常に重要だと思っています。その意味で、連帯とかネットワークを重視しています。東さんは連帯とネットワークを区別されてネットワークに批判的ですけども、私はネットワークと連帯とは両立すると思っています。「多様性を自覚した上での連帯」を求めるのがネットワークだというふうに考えており、地球平和公共ネットワークもそれでネットワークという名前がついているのです。先ほど共産主義の問題・コミュニズムの問題をいいましたけれども、参考文献にあげた『理戦』という雑誌で、「コミュニズムの友愛革命」について簡単に書きました。コミュニズムは、思想的に様々な問題があって衰退しています。これに対して、連帯をネットワークとして回復する思想として、コミユナルな要素が大事だと思います。それを新しい形で再構成する必要があるということを書いてみました。そういう意味では「友愛」とか、「普遍的友愛」、「友愛革命」という概念を強調しています。そういう意味では、コミユナルなものを強調する思想です。共産主

義にもコミユナルな要素があったために非常に意味があったし人々に光を与えたと思うんですね。しかし、それが財産の共有とか国有化とか様々な問題があるがゆえに、衰退した面があると思うんです。そこで、新しい次元でそれを回復する必要があると私は思っています。

そういうことを言うと、「昔のコミュニティーとかコミユナルなものを再現しようとするんだからそれは抑圧を招く」とかあるいは「排除の論理に繋がる」という批判を常に受けるわけですがけれども、そういった問題を常に自覚しながら、しかし、新しい形でコミユナルなものを再構築する必要がある、というふうに私自身は議論を構成しているつもりです。

哲学の話はこれくらいにしておきますけれども、排除の問題として、より今リアルな問題として考えられるのは、例えば地球平和公共ネットワークで提唱している「平和への結集」で、29日にまた大きなシンポジウムを開くので是非皆さんにも来て頂きたいと思っているんですけれども、そこで「平和への結集」の為に多くのグループや人々と連携しようと呼びかけようと思っているんです。そのときに「どのような連携の組み方をするか」というような問題とも関わって、排除の問題は非常に重要な問題だと思っています。このときに、現在われわれが検討しているところで、二つのポイントが重要なのではなからうかと思えます。一つはやはり「非暴力」という原則でしょう。それからもう一つは、「非カルト」というふうに言っています。両方とも大事だと思っています。と言うのは、レジユメで5ページに少し書いたんですけれども、内面的平和と外面的平和の問題と関係するからです。つまりかつての運動の一部に暴力事件を引き起こしたグループがありましたから、天野さんは滅私奉公と自己否定というように思想的に区別されていますけれども、単に「自分達はそれらとは関わらなかった」とか「それらと区別すべきだ」したというのではなくて、「そういった問題を克服するためにどういった思想的な展開が必要か」ということを議論する必要があるだろうと思うのです。そういう意味では、「自己主張、自己否定、自己超越」とレジユメに書きましたけれども、そういった自己の問題から振り返って、議論を再構成する必要があるだろう、と私は思っているんです。そんな意味で、若い世代はもちろん優しいその感覚が強いので、このような問題には鋭敏だ、と私は思っているんです。

ただ逆に言えば、オウム真理教問題を見れば解るように思いますけれども、その優しさとか精神性への欲求が、カルトとか社会的に問題がある活動のほうにいつてしまうという危険もあると思います。また、若い世代の人たちのメーリングリストなどを見ても結構、重要な問題があると思うのは、そういう精神性とか、優しさを重視する人達の方は、「デモに行くことが攻撃的で良くない」ということがあるのです。WPNのデモ自体が生ぬるいというのは正反対ですね。「そういうデモですら内面の精神を崩す」という人が多いんです。われわれは「内面性も重視するけれども行動することが必要だ」といっており、「いや、デモといっても闘争的で攻撃的なものではなくて、優しさの波動や精神性を重視する。両立する。」と主張します。内面的な平和と、外面的な平和を連動させることが大事なんだ、ということ言ってるわけです。今日はあまりでなかったですけども、これは若い人たちの多くにとっては大きな問題で、あちこちで同じような問題があるんですね。そういう意味では若い世代特有の問題というものも考えなくちゃいけない、ということで非暴力だけではなくて非カルトという原則もあげてあります。で、こういうことを言うことが、果たして排除ということになるのかどうか。あるいはこういう原則を立てるとすれば、どういう形でそれを実際の形にするのか。これが大問題になるだろうと思います。しかし、それはやはり議論として避けて通れない問題だと思いますので、ご関心のある方は、「平和への結集」の方の議論の場に加わっていただければありがたいと思います。」



岡本厚

「吉川さん。先ほど、いろんな方が意見を言われた中に、天野さんに対してでしたけれども、憲法的な価値について、ちゃんと解ってないんじゃないかという意見がありました。権力を敵だっているのはおかしいんじゃないかと。つまり我々の信託によって、権力って言うのは構成されているんじゃないか、と。この背景にいろんなことがあると思いますけれども、先ほど井上さんは変革と反戦、これは切り離せないと仰いましたけれど、その変革と申しますか、世の中を変えていく内容や方向については、一朗さんも正弥さんもいろんな人たちも言われましたが、だいぶ違うように思います。憲法的な価値ということについて、天野さんに代わってじゃなくてもいいんですけども、お答えいただけますか。」



吉川勇一

「主として天野さんに向かって言われたことだと思うんですけど、私も同列に扱われているようですから、お答えします。

あの、言われた言葉と同じ言葉をお返しすることになるんで、困るんですね、また吉田さんに怒られそうです。性格が悪いんだって思ってください。

この件は、憲法ということについて言われた限りでは、あなたのほうが無知だと思う。もうちょっと考えてほしい。つまり、国民の委託によって政府は出来ているのだが、そうだとしたら、政府は国民の委託に応えなければいけないでしょ。政府の側がそれに応えなかった時に、主権者である国民は一体どうするのでしょうか。主権者には、政府を変える権利と義務とがあるんですよ。アメリカの憲法でもそれははっきりと規定しています。今問題にしてるのはまさにそこなんですね。

主権者がいったん選挙で投票したら、あとは次の選挙まで、権力の言うことに全部従わねばならないなんて、そんなこと憲法のどこにも書いてないですよ。精神はむしろ逆です。私たちの委託に反したことを権力がやったときには、主権者はそれを正し、必要とあれば、それをひっくり返す権利があるんです。それを反権力と言っているのでね。そのことを何か、すぐ暴力主義的だとか、マルクス主義的だとか、時代遅れだというふうには思わないでほしい。このことは、これからずっと続くと思うんですよ。権力は絶えず腐敗をしてゆくからです。それに、私たちが投票をする時には考慮や予測の対象になっていなかったような問題が次々と起きてくるわけでしょう。候補者の選択のとき、判断の基準となっていなかった問題にまで、議員は全面的に代行を委託されている、ということはありません。ですからデモというものがあるんですよ。あなたがた政府、あるいは議員たちのやっていることは違うんだよ、われわれ主権者はこういうことを望んでいるんだよ、ということをやデモによって表示する、それで為政者に伝えていかなきゃならない、あるいは変えていかなきゃならないわけです。今度のイラク派兵の場合など、民意の無視の度合いは極端じゃないですか。そのときに、権力は味方のはずだよ、私たちが選んで民意を託したんだからなどと言ったのでは、今日のこの集会を持つこと自体やめなきゃいけないことになりましょ。その認識はかなり違うと思いました。

あと加害者と被害者の問題が出ていましたね。私は二項対立ではないと思っています。そもそも小田実さんが1965年にそれを提唱したとき、それは二項対立ではないと定義しているんです。被害者であった者が加害者になる、そして加害者の立場に立つことによって、さらに被害者にされるんだと。具体的には、太平洋戦争での大阪の市民や広島犠牲者の例だのベトナム戦争での米兵の立場を取りあげて、そこは結びついてるんだということを行ったのであって、時機に応じて今日は加害の問題を強調すればよい、明日は被害の問題を訴えればよいといった、そんな二者選択の問題ではなく、もっと本質的な問題でした。それは、それ以前に誰からも言わなかったことなんです。言葉としてだけから言えば、戦後の早い時期に、鶴見俊輔さんが被害者と加害者という表現を使われたことがありましたけれども、小田さんのようなコンテクストで言われたのは、日本思想史の中で彼が最初だったと思うんです。その思想はぜひ、引き継いでいきたいなあと思っています。

小林一朗さんたち、チャンスの人たちに一点だけわかってほしいことがあります。私はずいぶん注文も言いました。ですけど、味方だと思っている、というふうに思われているのかどうか少し疑問に思っているんです。いつも批判や攻撃ばかりしている「外部評論家」と受け取られているのかなあと。そうじゃないんです。しかし、私のほうからみると、どうも皆さんは被害者意識が強いなあという感じがします。やられている、だから防衛しなきゃ、と何か一丸となって防衛されているという感じがするんですよ。私が望んでいるのは、弁明や反論を聞きたいというよりは、それを運動の中で共有される社会的な経験にしたいということなのです。警察との会食問題を取りあげるといふご意見がありましたけれども、私はそれをそれとして取りあげるつもりはないんです。それからベ平連が警察に花束を贈ったかどうかという問題で、小林一朗さんと議論をしたときも、小林さんからの撤回の意見が寄せられたので、私のホームページの上では、この問題はこれで終了したと理解すると載せました。それ以来、この問題で議論をふっかけるつもりはないんです。ただ問題は、そこで出た問題が、教訓として他の人びとにどういふふうに共有されたか、ということなのです。つまり、会食問題が起こった、チャンスは今後はそういう迷惑をかけるつもりはない、と表明した。それで片がついた筈なのに、そういつまでも言い立てるなっていう反応が出てくるのは、どうもチャンスがいじめられ、攻撃されていると受け取られているからじゃないかと思えるんです。そうではなくて、その経験がどういふふうにみんなに伝えら

れたらいいのか、そのための努力を社会的にしたほうがいいということだけなんです。そうでないと、また繰り返されることを防ぐ保障がないことになるんですね。

私自身の体験から言えば、最初はやむをえないという意見なんです。最初ってというのは、例えば警察にはじめて逮捕されたときのような場合ですね。私自身も、一番最初に捕まったのは学生の時ですけど、警察の取り調べに対して、黙秘ではなく、かなりいろいろな話をしてしまいました。自白ではないし、仲間を売るなどということとはなかったけれど、完全黙秘なんてものではなかった。ところが、直接の行動のことと関係がないことだから喋ってもいいだろう、なんて思って、お喋りをしていくと、いつの間にか、相手の手の上に乗せられていたな、と後で気がつくんです。とにかく、相手はベテランですからね。でも、最初はなかなかそこが理解できておらず、そううまく具合にいくもんじゃないのです。経験を積む中で、だんだん権力の巧みさ、恐ろしさというものが分かってくるのだと思いますから、最初からそこまで分かっているべきだと非難するつもりはないんですよ。それだからこそ、ああいう会食問題にせよ何にせよ、秘密にしたり、話題にならないようにするのではなくて、なるべくみんなに伝えるほうがいいと思うのです。会食者の名前を公開しろっていう意見がありましたけれども、私はそんな必要はないと思います。そういうことではなくて、あの経験がどういうふうに運動で共有されなければいけないかというほうが大事だと私は思っているんです。」



岡本厚

「ありがとうございました。あと10分ぐらいで終わらなければなりません。」

本日の議論、第一に、先ほど佐久間さんが言われましたが、関心のない人たち、議論できない人たちに対して何をどう伝えていくか。この課題が、ここにいらっしゃる方々全員に問いかけられたと思います。どう問いかけていったらいいのか、どう話していったらいいのか、どう対話をしていったらいいのか。ここに来ている人たちは、一種の共通の基盤があるといっているいいでしょうが、それは本当に小さな基盤であって、それをどういうふうに広げていけるかが、共通の課題になるのではないかと。

民主主義は、自分達、民衆が自らを統治するものです。しかしでは、民衆は権力をどういうふうに構成していったらいいのか、公正な権力の行使っていったい何なのか、それは人類がずっと議論をしている問題の一つでもあるわけです。それをいま、ここでただちに解決したり、答が出てくる問題ではないと思います。

今日はこれをまとめるということではできません。次は、今日はこういうメンバーでしたけれども、次はみなさんの中から新しいメンバーでパネルを組んで頂いても結構ですし、本当は、20人とか30人の規模に分けて、それぞれ議論してみたらどうかという案も出たんですけども、最初からそれはちょっと無理だろうということで、今日はこういう形にしましたけれども、いろんな試みがあっていい。私はこの試みは、種であり、まだ芽が出たばかりだと思います。これからいよいよ、憲法っていう問題にせよ、あるいは平和っていう問題にせよ、ますます大きな課題に私たちは向き合っていかなければいけません。

なお、先ほど、人質が釈放されたと言ったのですが、そのメールを送ってくれた人から、まだ安否が確認されていないというニュースが今、入りました。大変残念ですが。みなさん、お帰りになった後、ニュースでぜひ確認してください。」



匿名

「一つ提案なんですけれどね、私、地球平和公共ネットワークの者なんですけど、吉川さんの最後のセリフが僕はすごく嬉しくて、大切なのは、吉野川でやっている姫野さんの行動がですね、姫野さんは要するに市民を信じるという考え方をもっています。要するに、お互いにとにかく信じあって、信じあうところから物事が分かってくるんだという言い方で運動を進めています。そのことがすごく大切だと思います。意見の違いはあったとしても、違いを認め合って、その中から何をお互いを違いの中で役割を任じていくか、それから分かんない分かんないって言うんじゃなくて、その中から相手のことを分かっていく努力と、その中から学んでいくことをやっぱりしていくべきだろうし、それからメール上での意見の交換はすごく危険なんで、本当にお互いに被害者になったりするんで、なるべく対話の場をもっていくという、みんな忙しいでしょうけど、両方をやりながら、今回の事件みたいな時はすごく意味を持ちます。だけど一方で、本当にこういう対話をどんどんどんどん持続してい

くことが大切なんじゃないか、そしてお互いに信じあって、いい形で平和を作り上げていくっていうことが、その中で意見の議論、そして組み立てをしていくことが大切なんじゃないかと思います。どうもありがとうございました。」



岡本厚

「ありがとうございました。では、最後に主催者からお願いします。」



小林正弥

「最後に何点かだけプラクティカルな話をしたいと思うんですけども、先ほどの「憲法の価値を言ってくれ」という話には私も全く大賛成で、私自身は独特の憲法解釈論をやっていますけれども、そういう自衛隊違憲論や合憲論の相違を超えてですね、今のイラク派兵は決定的な違憲であるということで、「決定的違憲」という概念を使っています。自衛隊合憲論をとっていても違憲論をとっていても、平和運動にコミットしている人であればイラク派兵が決定的違憲であることには基本的に賛成だろうと思うので、決定的違憲であるということについてみなさんで合意して、イラク撤兵を実現する、そのための運動を展開する、ということを考えています。その意味では、我々は憲法的価値に従ってやっているんですね。ですから「権力をどう見るか」という一般論とは別に、この運動はマイノリティーの運動では本来はなくて、憲法体制そのものを擁護しそれに従ってやってるわけなので、むしろオーソドックスな議論であるべきなんです。にもかかわらず、そうはなっていないから、そこに運動の課題があるわけなんですけれども、その部分はしっかり自覚した運動にしたいなと思います。」

特にこの間我々は、イラク派兵訴訟についての説明会を開催いたしましたして、そこでは名古屋の違憲訴訟の代表をやっておられる池住さんをお迎えして、名古屋の集団訴訟に対する参加の呼びかけをしていただきました。他にも東京でリレー訴訟がありますし、まもなく山梨でも起こります。そういうわけで、全国各地で起こっているので、違憲訴訟をなるべく横でネットワークをしながら多くの人に参加を呼びかけたいと思っています。一方で、分かりやすく、多くの人が入ってこれるようにデモも入りやすい形態を、という話を今日はしたんですけども、もう一方ではやはり中核の人には自覚が求

められると思います。我々はそれを「全身全霊で行なうべきだ」と言っているんです。勿論、暴力的なやり方は良くないと思いますが、違憲訴訟に参加するというのは市民の正当な権利です。これを行って、圧倒的な市民の声によって、イラクからの撤退を実現したいと思っています。ここ2,3日の事件でそれが出来ればいいんですけども、出来ない場合は、それを粘り強く続けていくということになります。是非皆さんも、訴訟のほうにも関心を持っていただきたいと思っています。まだまだこれから可能ですので、原告へ参加していただきたい、というふうに思います。これが一つ目です。

二つ目は、感謝の言葉として、主催は地球平和公共ネットワークですけども、協力で「はてみ」の方々、斉藤まやさんをはじめ若い人たちと一緒に今回の会議を催しました。皆さん是非拍手を。

三点目ですけど、私達のメーリングリストに、地球平和公共ネットワークのホームページのほうから行きますと入れますので、ご関心のある方々、もしくは今後「平和への結集」に関心のある方々はそちらにアクセスしていただければありがたい、と思います。「平和への結集」の試みについては今度29日に大きなシンポジウムを開きますので、それもホームページでご確認ください。まだ、パネリストが確定していないので、公表していませんけれども。そこで、今日の議論に関連した話なども引き続き話し合いたいと思いますし、「平和への結集」を実現していくためには、多くの方々のご協力が必要です。「具体的には実務をどうするか」などの課題が山積していますので、「是非まあ積極的に加わっていただければありがたい」というふうに思っています。今日はありがとうございました。」



岡本厚

「それでは、ここで終わりたいのですが、もしよろしければですが、本当は私は、もし三人が釈放されていなかったならば、30秒くらい彼らを思う時間を設けたかったですけれども、釈放されつつあるということなので、ここで日本政府に撤兵を要求するシュプレヒコールを(笑)やれたらなと思うんですけど、どうでしょう？ 折角いい共通の議論ができたという確認のもとに。いやですか。

では、撤兵せよといったら。撤兵せよといってください(笑)。いいですかそれで。」



小林一朗

「このあいだイスラエル大使館前では、自分の好きなように言っ
ていいやってやったんですよ。撤兵せよ、撤兵せよじゃなく。それが
結構良かったなと思って。コールはかけるんだけど。自分の好きな
言葉で返していいっていう。それが結構気持ちよかったの。」



岡本厚

「日本政府はイラクから撤兵しろ。」



参加者

「（聞き取れず）」



岡本厚

「日本政府はイラクから撤兵しろ。」



参加者

「（聞き取れず）」



岡本厚

「日本政府はイラクから撤兵しろ。」



参加者

「（聞き取れず）」



岡本厚

「ありがとうございました。」

*1 [IMAGINE! はこちら。](#)

[TOP](#) [開会前](#) [問題提起1 \(吉川勇一\)](#) [問題提起2 \(小林一朗\)](#)
[問題提起3 \(天野恵一\)](#) [問題提起4 \(小林正弥\)](#) [討論1](#)
[討論2](#)